Ⅱａ類（Ｓ31・Ｓ32・Ｓ37～Ｓ44）：全体の形状が短冊形で両側縁が直線的なもので、刃部は直線的である。Ｓ31は横型剥片を素材とし、主要剥離面には打面除去のための調整、基部の調整が行われる。他は縦長剥片を素材とする石篦で、打面側に刃部を設けるＳ32・Ｓ37・Ｓ39では、刃部は主要剥離面と背面の細かな調整によって作り出される。また主要剥離面の両側縁にも２次調整が行われる。

打面に対する側縁に刃部を設けたＳ40～Ｓ44は比較的薄い剥片を素材とするもので、主要剥離面には側縁に２次調整が行われる。Ｓ44は形状が撥形で、背面には極めて丁寧な平坦剥離が施される。

Ⅱｂ類（Ｓ33～Ｓ36・Ｓ46）：両側縁が曲線的で、刃部が丸みのあるものである。縦長剥片を素材とするのはＳ33で、Ｓ34～Ｓ36・Ｓ46は横型剥片を素材とする。Ｓ33は打面側に刃部を設け、主要剥離面には刃部を除くほかの側縁に２次調整が行われる。

石匙（第88・89図、図版28・29）

石匙は全て縦長石匙で、石材は頁岩である。

Ⅰ類

背面には細かな２次調整を施すが、主要剥離面には側縁のみに調整を行うかあるいは全く行われない。

Ⅰａ類（Ｓ48～Ｓ52・Ｓ54・Ｓ55・Ｓ60）：主要剥離面の一側縁に２次調整の行われるものである。横型剥片を素材とするＳ50を除けば全て縦長剥片を素材としている。Ｓ48・Ｓ49・Ｓ52では直線的な一側縁に連続する調整を施すが、Ｓ51では調整が部分的である。Ｓ54・Ｓ55・Ｓ66の刃部は曲線的である。Ｓ50は打瘤を除去する調整を行う。

Ⅰｂ類（Ｓ58）：主要剥離面の両側縁に２次調整を施すもので、Ｓ58は背面、主要剥離面ともに先行剥離面を広く残している。

Ⅰｃ類（Ｓ53・Ｓ56・Ｓ57・Ｓ59・Ｓ61）：主要剥離面に２次調整の施されないものである。Ｓ53の背面には細かな２次調整が施されるが、そのほかのものでは背面に先行剥離面が広く残される。Ｓ57では縦長剥片の打面とは反対側につまみ部が作出されている。

Ⅱ類（Ｓ65・Ｓ66）

両面調整された石匙で、２点である。

掻器（第90・91図、図版29・30）

素材となる剥片における設置される刃部の位置によって２分類できる。

Ⅰ類（Ｓ67～Ｓ69）：素材剥片の一端に刃部を設けるものである。

Ｓ67は打面に対する一端に刃部が作り出され、主要剥離面には打面周辺にわずかに調整がおこなわれる。Ｓ68・Ｓ69では節理面、先行剥離面を広く残し、Ｓ69の主要剥離面の両側縁には

細かな調整が行われる。

Ⅱ類（S70～S80）：素材剥片の側縁に刃部を設けるものである。

S70・S71・S76～S78では背面に2次調整が行われ、一側縁に刃部が設けられるが、S72～S75・S79・S80では素材剥片の形状を全く変えることなく、刃部だけを作り出している。

削器（第92～94図、図版31～33）

Ⅰ類

背面あるいは主要剥離面の両面に2次調整が行われ、側縁に刃部が設けられるものである。

Ⅰa類（S81・S83～S86）：背面に2次調整が行われるものである。S81は横型剥片の一側縁に刃部を設けた半月形の削器で、主要剥離面には打面除去のための剥離作業が施される。S83～S86では背面に細かな調整が行われ、主要剥離面の側縁にも2次調整が行われる。

Ⅰb類（S82）：両面に細かな平坦剥離が行われるもので、S82は両側縁に刃部が設けられる。

Ⅱ類

両面への2次調整が行われず、素材剥片の側縁に刃部を作り出したものである。

Ⅱa類（S87～S93）：縦長剥片の側縁に刃部を作出するものである。2次調整は打面周辺にわずかに行われるだけで、刃部の調整も背面にのみ施される。S89では両側縁に刃部が設けられる。

Ⅱb類（S94～S100）：不定形剥片の側縁の一部に短い刃部を作出するものである。刃部作出のための調整は、背面に行われるS94～S96・S99・S100などに行われ、S97・S98では両面に短い刃部が設けられる。

断面調整石器（第94図S101～S105、図版31）

5点の石器は、折断面に細かな調整を加えたもので、全体の形状は台形を呈している。2次調整は背面全面と主要剥離面の側縁に行われる。S105では折断後の主要剥離面への調整が顕著である。

ピエス・エスキーユ（第95・96図、図版32）

折断面の有無によって以下のように2分類できる。

Ⅰ類（S106・S107）：折断面をもたず、打面のある小型の剥片を素材としたものである。

Ⅱ類（S108～S119）：折断面を有するものである。S108～S112では折断面が一面で、他は複数の折断面を有している。

石核（第97・98図S120～S126、図版32）

S120・S121は断面が厚く、打製石斧様の形状で、両側縁から剥片を剥取している。S122・S123では両端から剥片剥離作業が行われている。S124・S125は作業面を作出しながら4方向から剥片を剥取している。

磨製石斧（第99図S128、図版33）

短冊形の偏平な黒色頁岩の一端を、両面から研ぎ出した石斧である。刃部には使用痕が認められる。

くぼみ石（第100～104図、図版34～36）

くぼみ石は、全て安山岩の転石を利用したものである。凹部のある面の数によって3分類する。

Ⅰ類（S130～S132）：凹部が単面にのみあるものである。

S130の凹部内面は平滑で、敲打よりは回転によるものであろう。S131・S132の凹部は浅く、後者は3面が磨られている。

Ⅱ類（S133～S148）：凹部が2面にあるものである。

使用される安山岩は、円形や楕円形・三角形あるいは長方形のものがあり、いずれも広い表裏面に凹部がある。凹部は単に一面一箇所のものや、一面に数箇所あるものなどがあるが、後者の場合、礫の長軸に沿うように凹部が連なる。S144～S146は単面に、S147・S148では2面に磨面がある。

Ⅲ類（S149～S156）：凹部が3面以上にあるものである。

3面に凹部のあるS149～S151、4面に凹部のあるS152～S155などがあり、いずれも広い表裏面と側面に凹部がある。S156は立方体の6面に凹部がある。

磨石（第105図S157・S158）

2点とも凝灰岩の転石を利用したもので、S157は両面、S158は長方体の4面が磨られている。

石皿（第105図S159・S160）

大型の偏平な礫を使用したもので、一面が部分的に深くなっている。

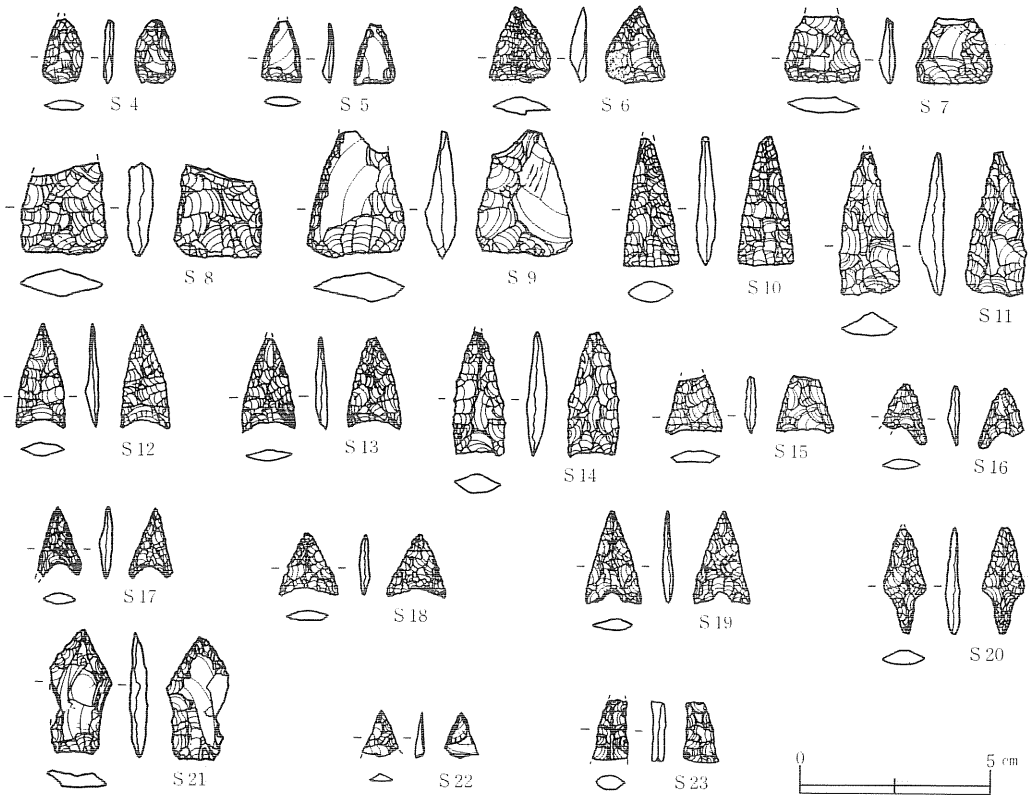
3．石製品

石刀（第99図S127、図版33）

縦長の圭化木の片側縁を研ぎ出し刃部を作出したもので、刃部以外に加工される部分は無い。

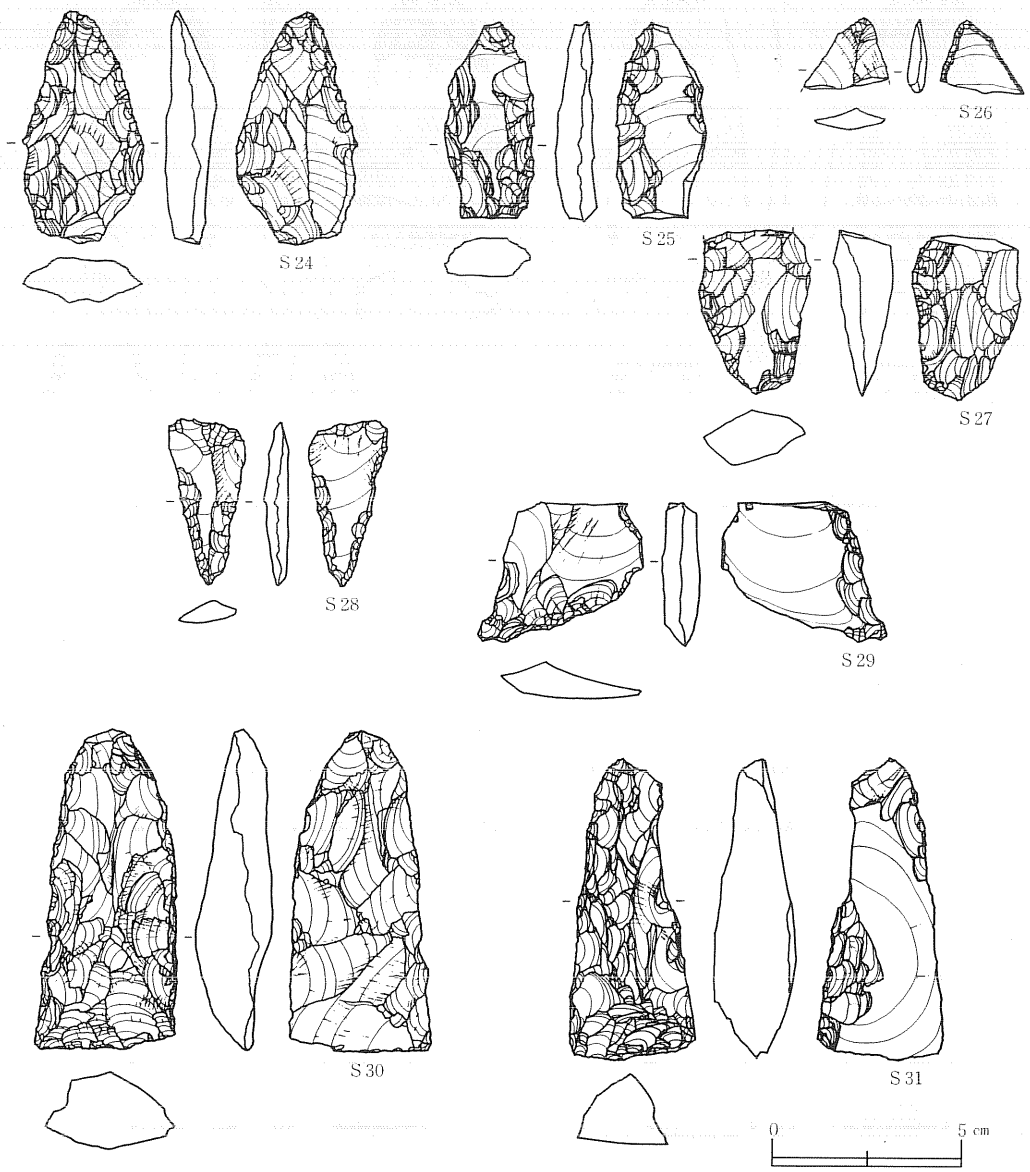
独鈷石（第99図S129、図版33）

凝灰岩を素材とするもので、中央の凹部にはアスファルトが明瞭に残る。両端にはわずかに使用痕と思われる損傷がある。



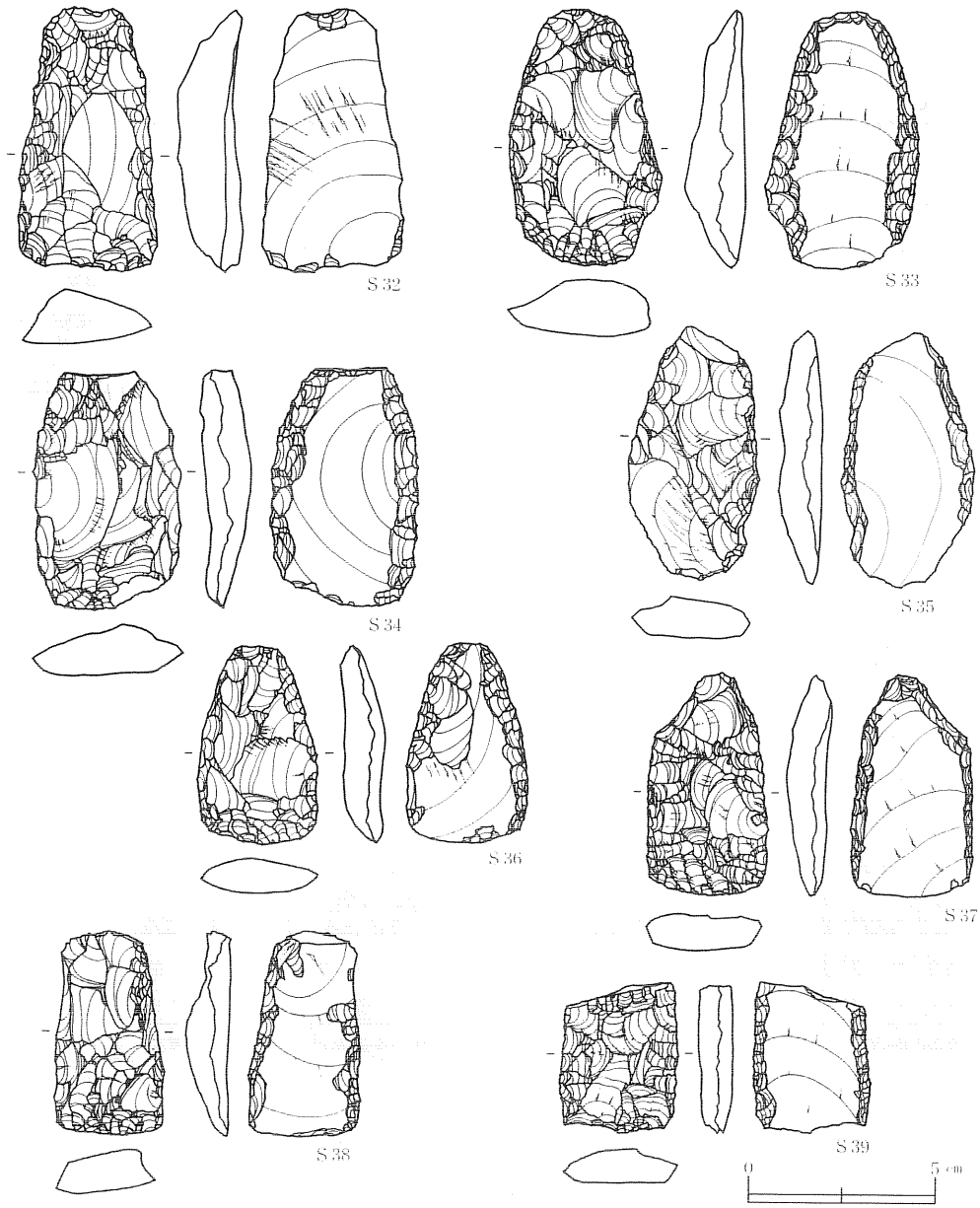
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S 4	LS 56		石鏃―― I	17	12	3	1	頁岩	27
5	LO 53		〃	16	9	4	1	〃	〃
6	MC 53		〃	20	16	4	1	〃	〃
7	MC 53	II	〃	18	20	5	1	〃	〃
8	MC 47		〃	25	23	7	4	〃	〃
9	LS 45	II	〃	34	26	9	5	〃	〃
10	SD 14		〃	34	15	6	2	〃	〃
11	LT 48		〃	38	16	7	3	〃	〃
12	SN 16		〃 ―― II	28	13	4	1	〃	〃
13	MC 52	II	〃	25	14	4	1	〃	〃
14	LP 51		〃	34	14	5	2	〃	〃
15	MA 52		〃	46	15	4	1	〃	〃
16	MB 50		〃	16	12	3	1	〃	〃
17	MC 52	II	〃	19	11	14	1	〃	〃
18	ME 52		〃	17	16	3	1	〃	〃
19	LS 52	II	〃	25	15	3	1	〃	〃
20	MC 52		〃 ―― III	28	11	4	1	〃	〃
21	MC 56	II	〃	33	17	5	2	〃	〃
22	MC 53		〃	12	9	3	1	〃	〃
23	MF 53		〃	16	9	4	1	〃	〃

第84図　遺構外出土石器(1)



番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S24	MB 47	II	石槍	61	32	13	22	頁岩	27
25	MF 55	II	〃	53	24	10	13	〃	〃
26	MF 48	II	〃	19	22	6	1	〃	〃
27	SD 14		〃	44	29	15	16	〃	〃
28	MA 52		石錐	40	20	7	4	〃	〃
29	LT 49	II	〃	37	44	11	12	〃	〃
30	MF 52	II下	石篦 — I	85	38	21	59	〃	〃
31	LO 50	II	〃 — IIa	79	34	22	42	〃	〃

第85図　遺構外出土石器(2)

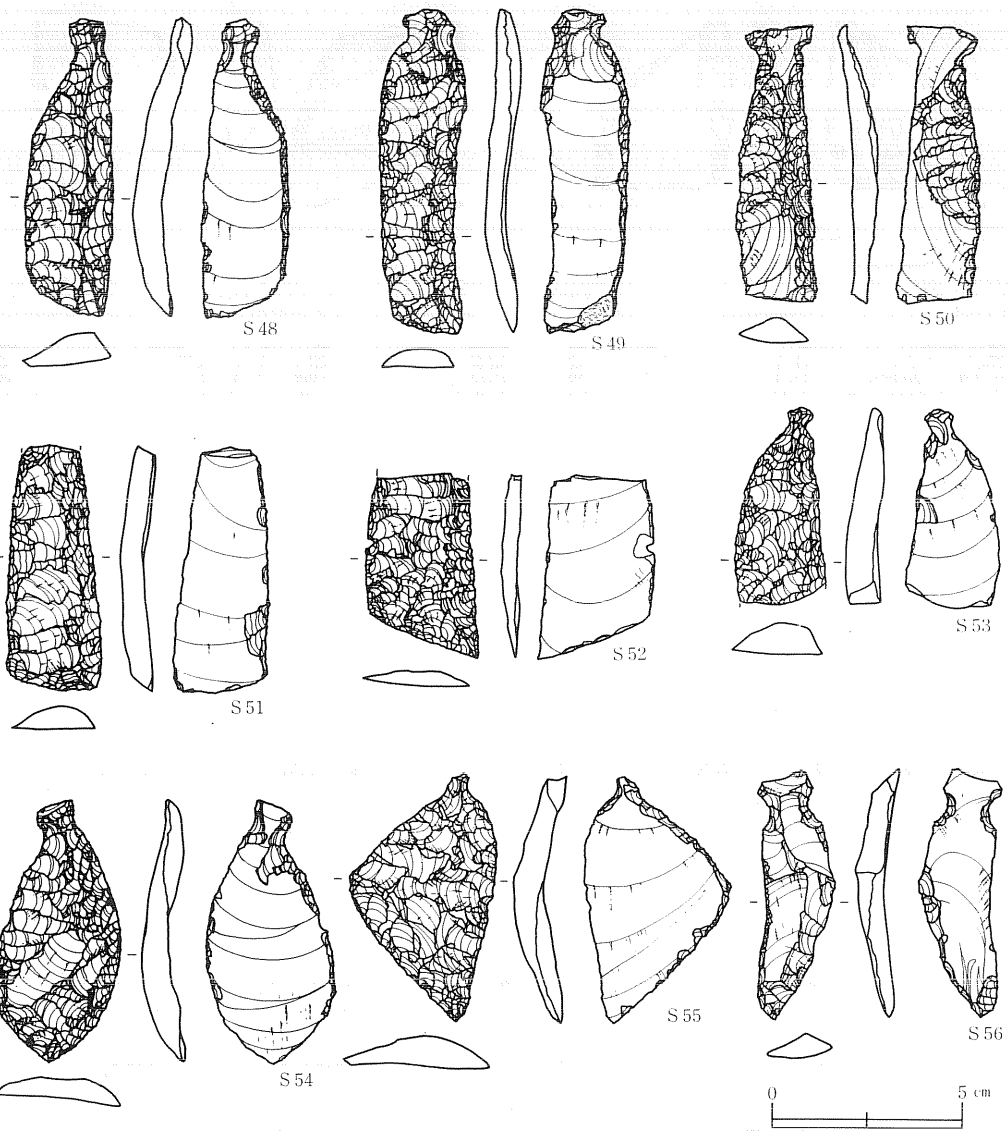


番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S32	LN 52	II	石篦――IIa	71	38	17	43	頁岩	27
33	LJ 48	II	〃 ――IIb	69	41	17	44	〃	〃
34	LQ 45	II	〃	64	4	14	37	〃	〃
35	LS 49	II	〃	68	36	17	26	〃	〃
36	MS 56	II下	〃	53	32	12	20	〃	〃
37	MA 55	II	〃 ――IIa	60	33	12	23	〃	28
38	MD 54	II	〃	55	30	12	18	〃	〃
39	LN 48	II	〃	41	32	1	15	〃	〃

第86図　遺構外出土石器(3)

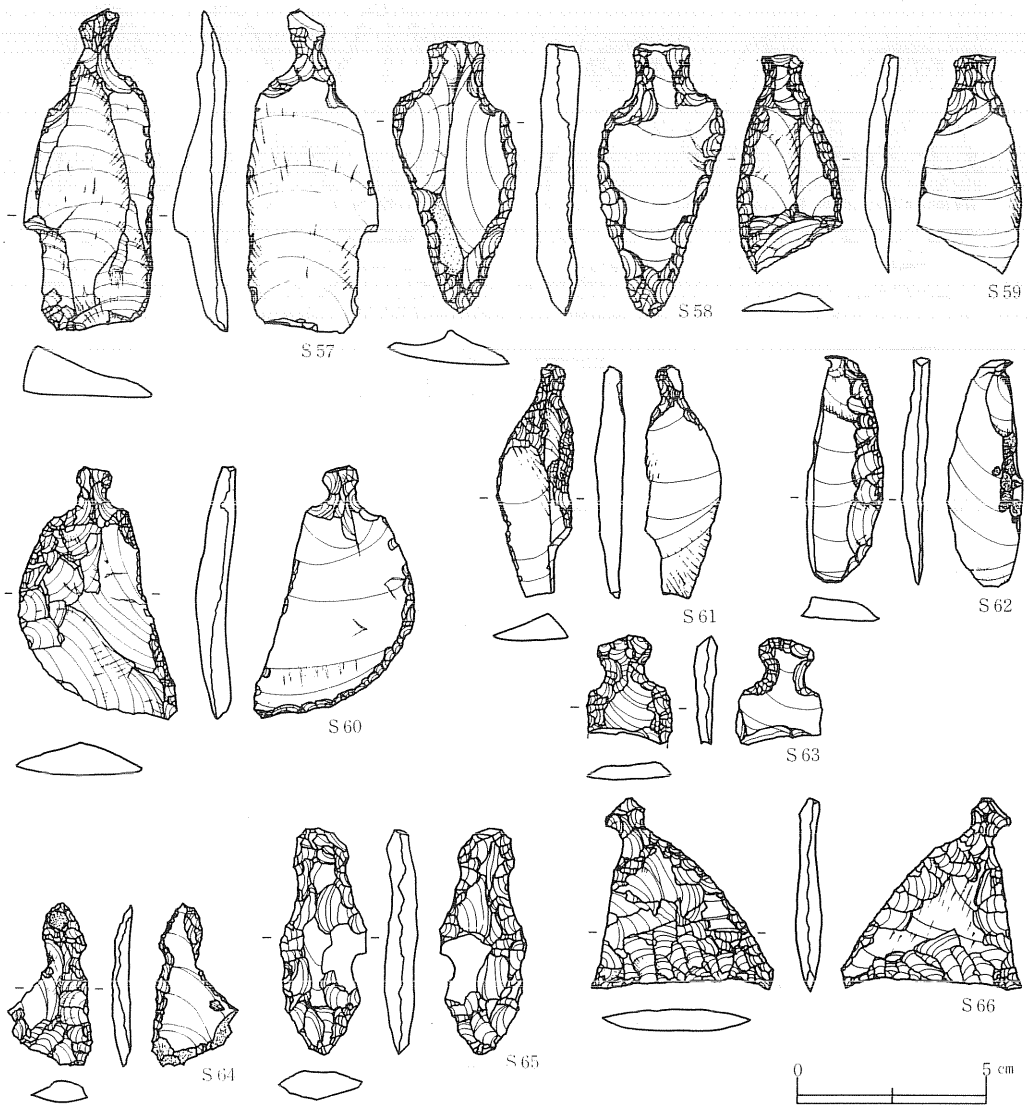
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S40	MI 53		石篦── IIa	48	37	15	23	頁岩	28
41	LS 42	II	〃	37	46	14	20	〃	〃
42	LP 47	II	〃	47	47	11	21	〃	〃
43	MB 52	II	〃	32	58	10	12	〃	〃
44	ME 49	II	〃	58	44	11	35	〃	〃
45	LS 52	II	〃 ── I	72	35	21	39	〃	〃
46	LK 52	II	〃 ── IIb	60	33	15	20	〃	〃
47	LO 59	表土	〃 ── I	43	25	15	18	〃	〃

第87図　遺構外出土石器(4)



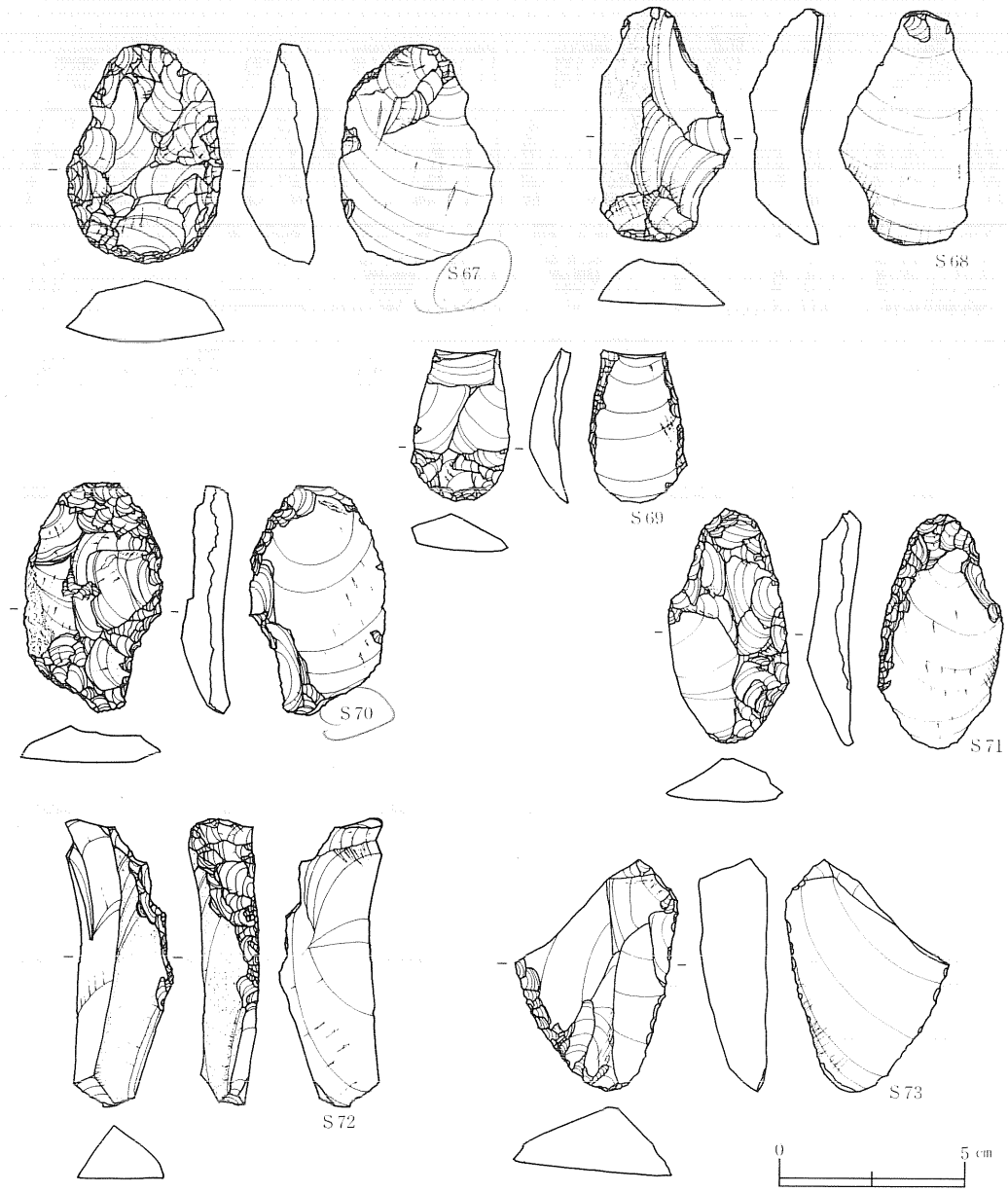
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S48	ME 55	Ⅰ	石匙── Ⅰa	79	24	14	15	頁岩	28
49	MI 55		〃	86	23	10	15	〃	〃
50	MC 51		〃	73	22	11	12	〃	〃
51	MC 52		〃	65	26	8	14	〃	〃
52	LQ 50	Ⅱ下	〃	49	31	5	7	〃	〃
53	LT 51	Ⅱ	〃 ── Ⅰc	58	25	10	12	〃	〃
54	ME 55	Ⅰ	〃 ── Ⅰa	70	34	12	15	〃	〃
55	LT 52	Ⅱ	〃 ── Ⅰa	66	39	14	16	〃	〃
56	MG 52	Ⅱ	〃 ── Ⅰc	66	21	12	8	〃	〃

第88図　遺構外出土石器(5)



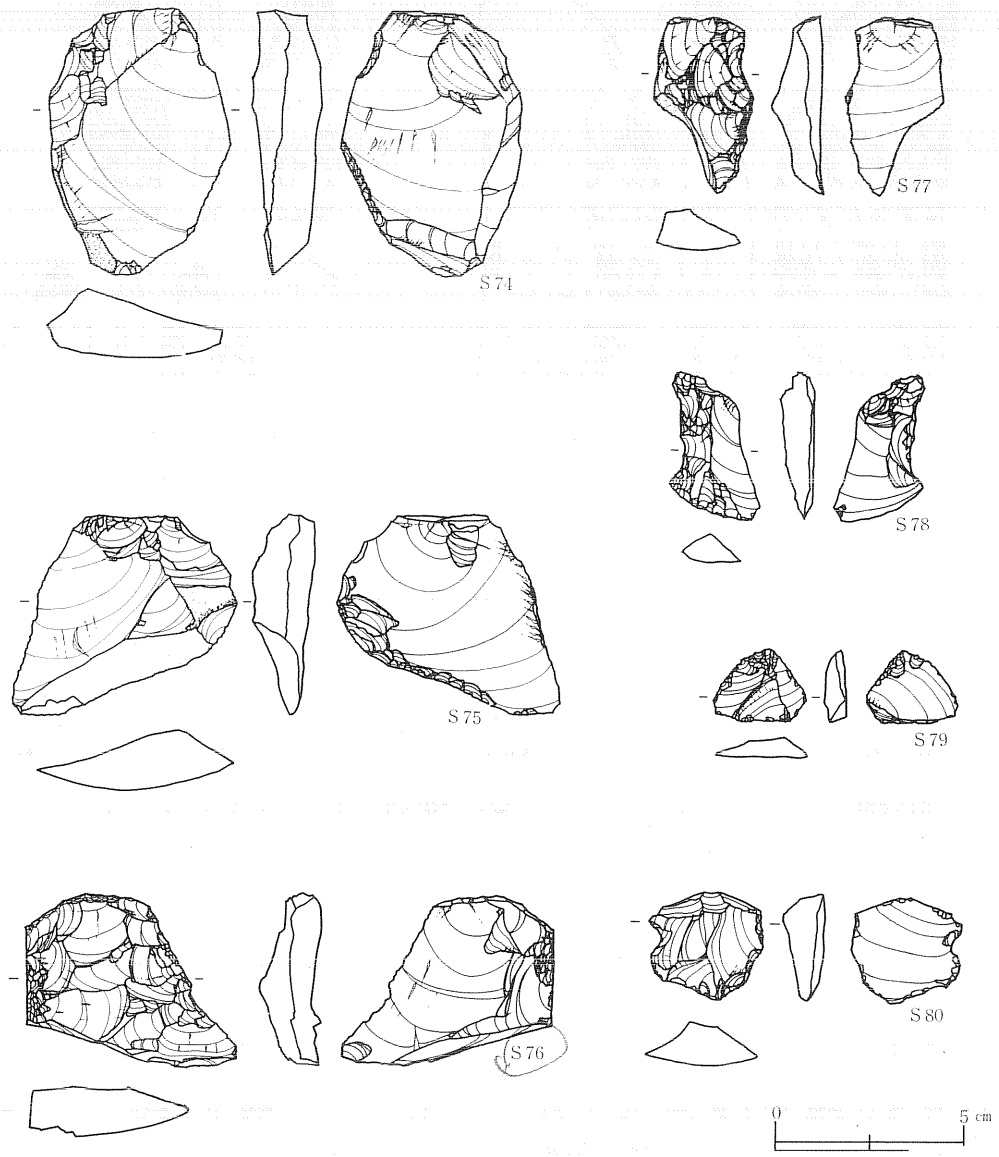
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S57	MA　52	II	石匙―Ic	85	35	14	25	頁岩	29
58	LT　53		〃 ―Ib	72	33	11	20	〃	〃
59	LT　50		〃	58	28	9	9	〃	〃
60	MC　53	II	〃 ―Ia	67	42	11	18	〃	〃
61	MO　45	II	〃	62	20	8	7	〃	〃
62	LS　42		〃	60	21	7	7	〃	〃
63	LT　52	II	〃	30	23	6	3	〃	〃
64	MD　50		〃	44	23	5	3	〃	〃
65	LS　56		〃 ―II	60	24	9	11	〃	〃
66	LT　50		〃 ―II	51	48	6	11	〃	〃

第89図　遺構外出土石器(6)



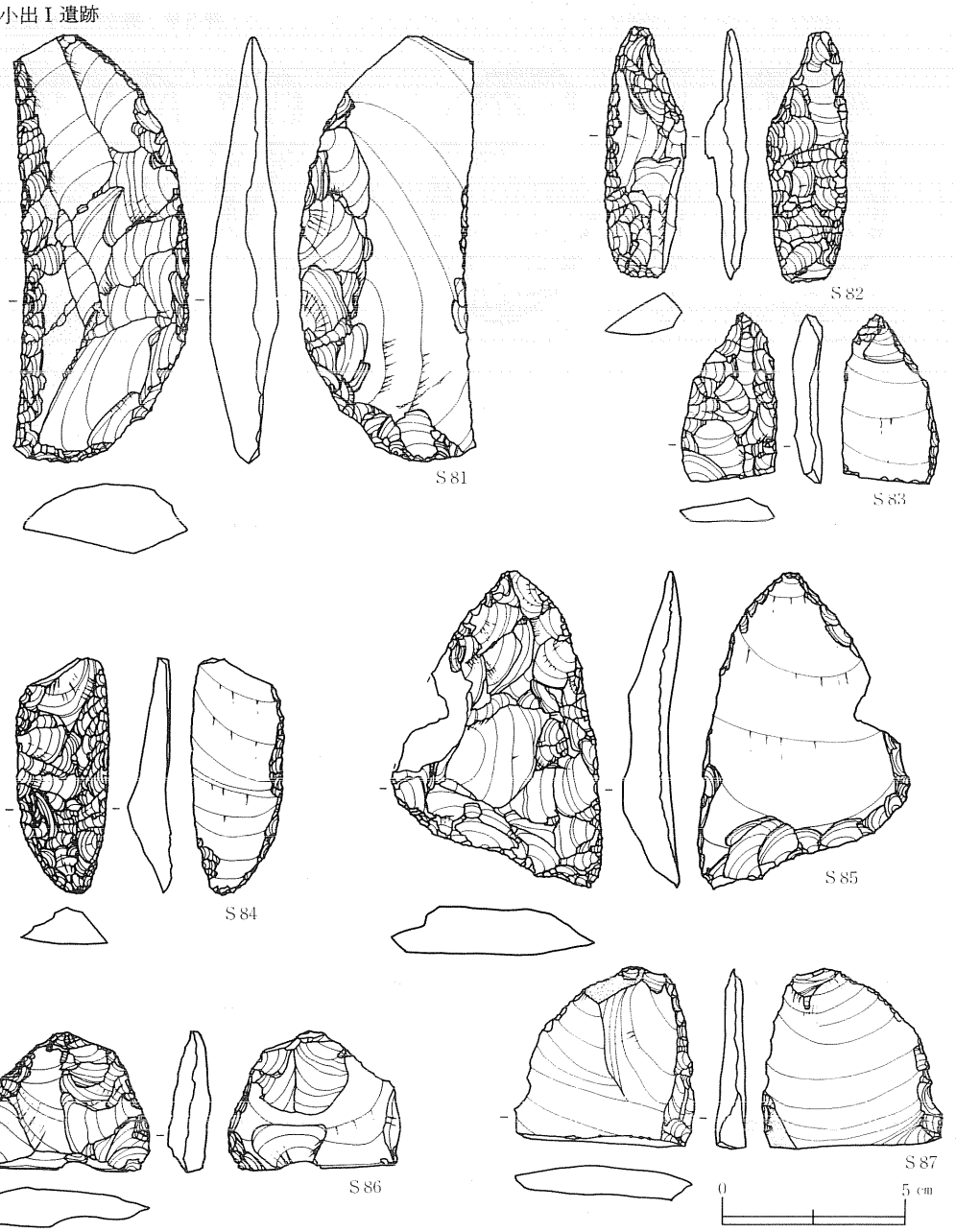
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S67	LH 49	II	掻器―― I	60	42	21	43	頁岩	29
68	MD 54		〃	64	35	20	30	〃	〃
69	ME 56	II	〃	42	27	11	8	〃	〃
70	MC 53		〃 ―― II	62	37	13	26	〃	〃
71	MA 57	II	〃	64	34	13	22	〃	〃
72	MH 53	II	〃	19	78	32	30	〃	〃
73	MF 48	II	〃	64	45	19	32	〃	〃

第90図　遺構外出土石器(7)



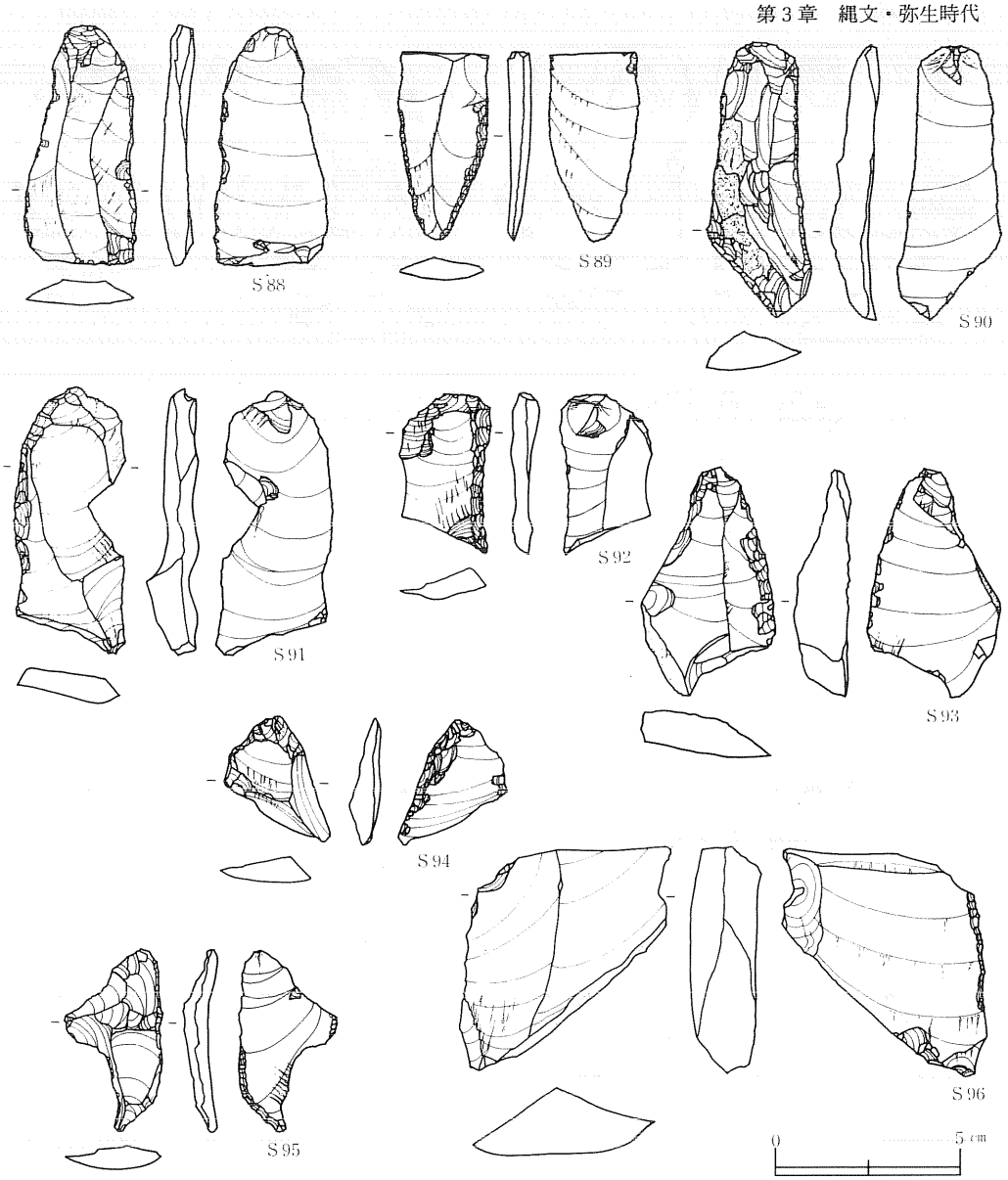
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S74	MB 50	II上	掻器 ── II	70	48	19	55	頁岩	30
75	MB 55	II	〃	53	59	17	36	〃	〃
76	LK 44	II	〃	57	46	17	30	〃	〃
77	MA 57	II	〃	46	26	14	11	〃	〃
78	LK 55	II	〃	39	24	9	5	〃	〃
79	MD 53		〃	19	24	55	2	〃	〃
80	LR 43	II	〃	29	30	30	8	〃	〃

第91図　遺構外出土石器(8)



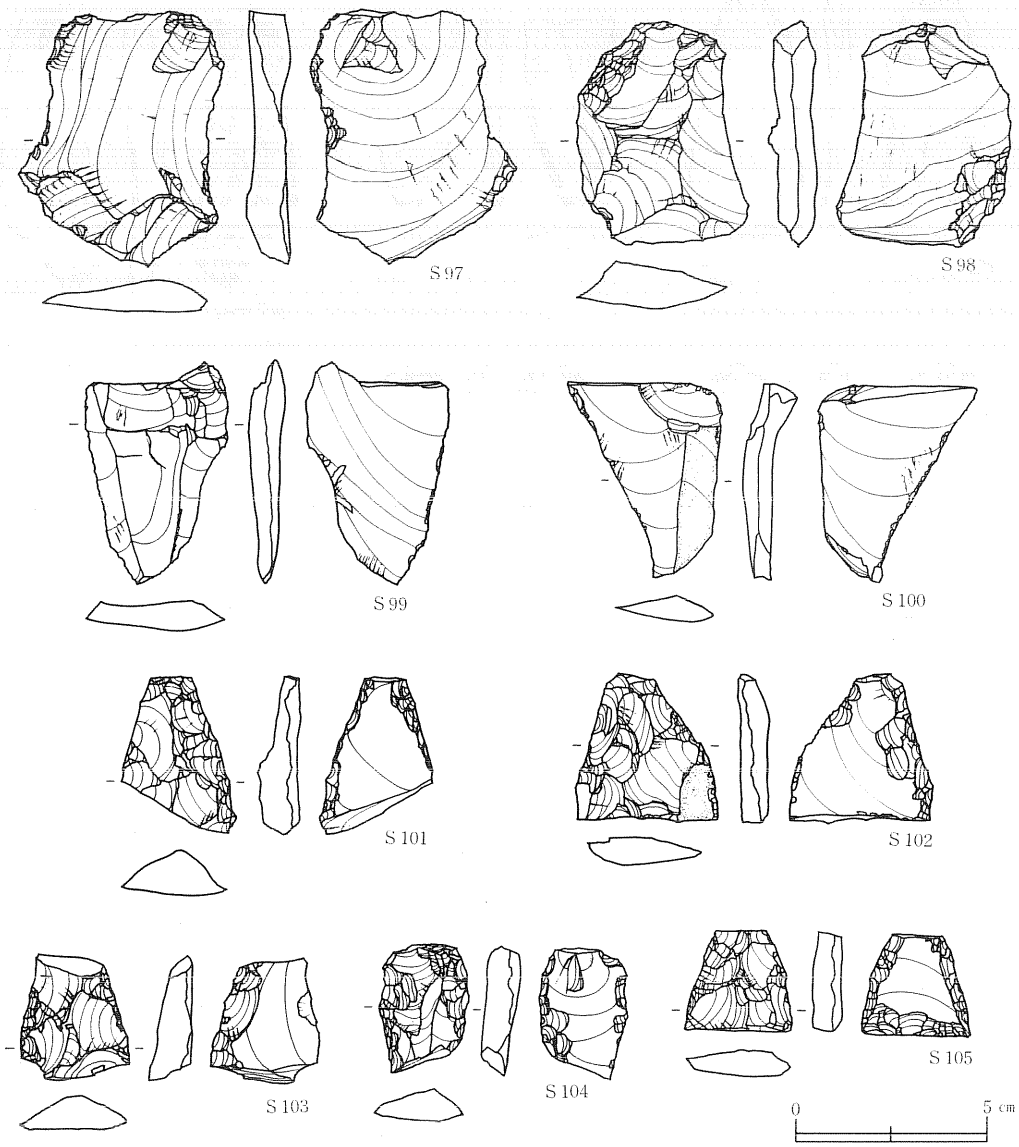
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S81	MA 46	II上	削器 ── Ia	118	48	19	97	頁岩	30
82	LQ 57	II	〃 ── Ib	69	22	13	13	〃	〃
83	MD 51	II	〃 ── Ia	50	26	85	9	〃	〃
84	LT 50		〃	65	26	13	16	〃	〃
85	MD 49	II	〃	92	58	17	53	〃	〃
86	LR 50	II	〃	42	47	12	19	〃	〃
87	MF 52	II	〃 ── IIa	51	54	9	25	〃	〃

第92図　遺構外出土石器(9)



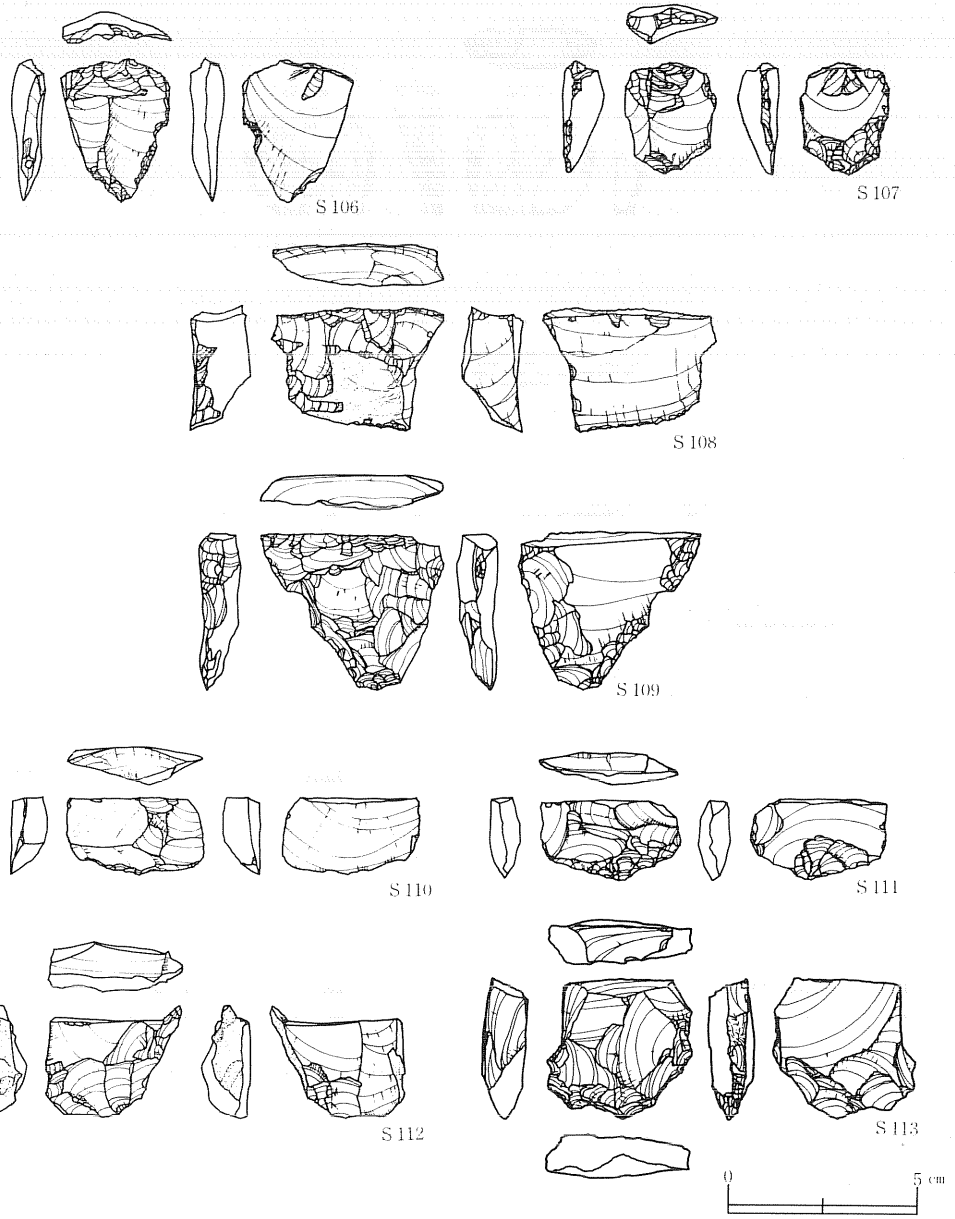
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S88	LT　27	II	削器 ── IIa	65	31	8	16	頁岩	30
89	MD　56	II	〃	51	23	7	7	〃	〃
90	LR　42	II	〃	75	28	13	19	〃	〃
91	LS　46	II	〃	72	31	14	20	〃	31
92	MF　48	II	〃	44	25	8	2	〃	〃
93	LT　56	II下	〃 ── IIa	61	36	14	22	〃	〃
94	LS　52		〃 ── IIb	34	30	8	5	〃	〃
95	表　採		〃	50	27	10	6	〃	〃
96	LR　45	II	〃	66	56	19	55	〃	〃

第93図　遺構外出土石器(10)



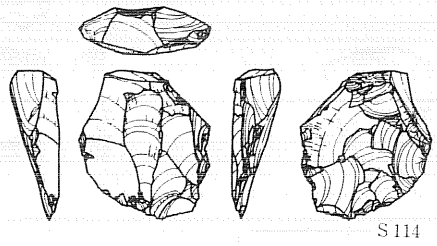
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S97	表採		削器 ── IIb	59	54	120	36	頁岩	31
98	LS 51	表土	〃	60	46	13	31	〃	〃
99	MD 48	II	〃	59	38	10	14	〃	〃
100	MA 59	II	〃 ── IIb	52	41	12	11	〃	〃
101	MA 46		断面調整石器	41	30	12	10	〃	〃
102	MA 54	II	〃	39	37	9	12	〃	〃
103	MP 53	II	〃	33	28	11	9	〃	〃
104	MB 53	II	〃	34	24	10	8	〃	〃
105	MC 53	II	〃	26	28	8	8	〃	〃

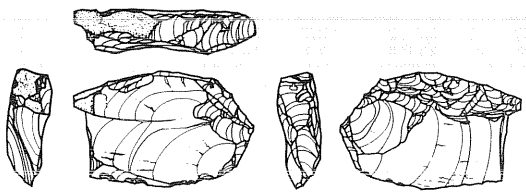
第94図　遺構外出土石器(11)

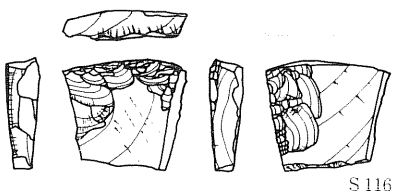


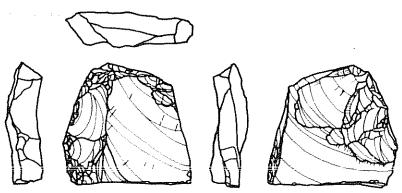
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S106	ME 48	II下	ピエス ── I	38	30	10	7	頁岩	32
107	LR 48	I	〃	30	24	11	6	〃	〃
108	ME 55	II	〃 ── II	33	46	16	21	〃	〃
109	LT 52	II	〃	41	48	11	18	〃	〃
110	LR 43	II	〃	21	37	10	8	〃	〃
111	MC 47	II	〃	22	37	9	7	〃	〃
112	MD 54	II	〃	30	36	14	13	〃	〃
113	ME 55		〃	37	38	12	19	〃	〃

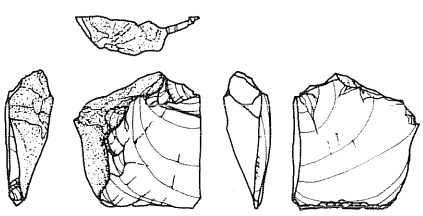
第95図　遺構外出土石器(12)

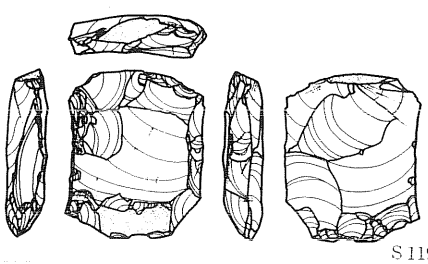

S 114


S 115


S 116

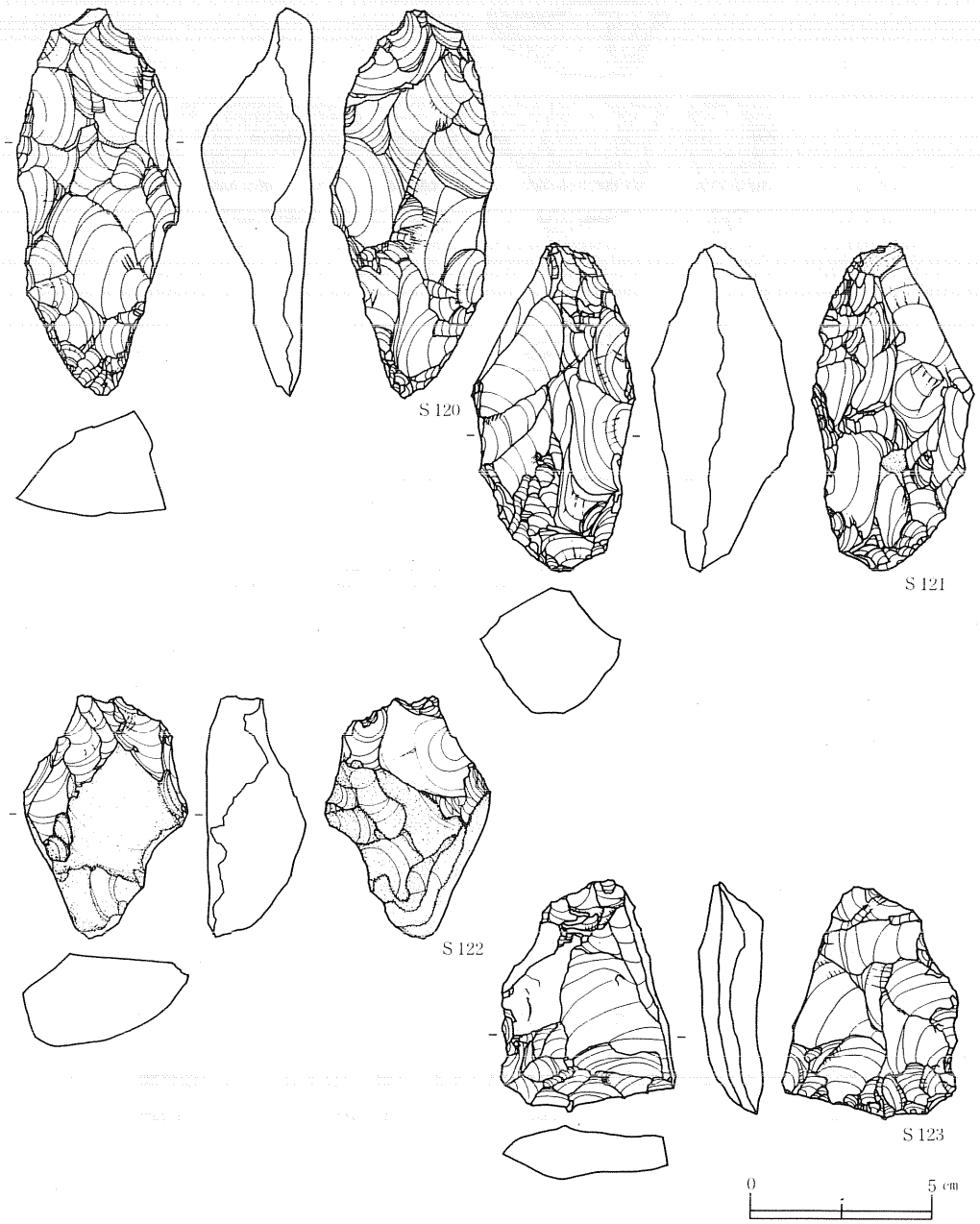

S 117


S 118


S 119

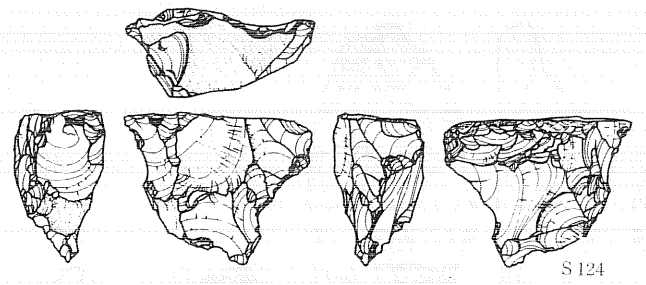
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S 114	表採		ピエス――Ⅱ	40	31	10	14	頁岩	32
115	L I 46	Ⅱ	〃	31	48	12	17	〃	〃
116	MH 53	Ⅱ	〃	38	33	9	10	〃	〃
117	MB 56	Ⅱ下	〃	33	34	10	10	〃	〃
118	L S 52	Ⅱ	〃	36	33	13	11	〃	〃
119	I R 46	Ⅱ	〃	45	36	11	20	〃	〃

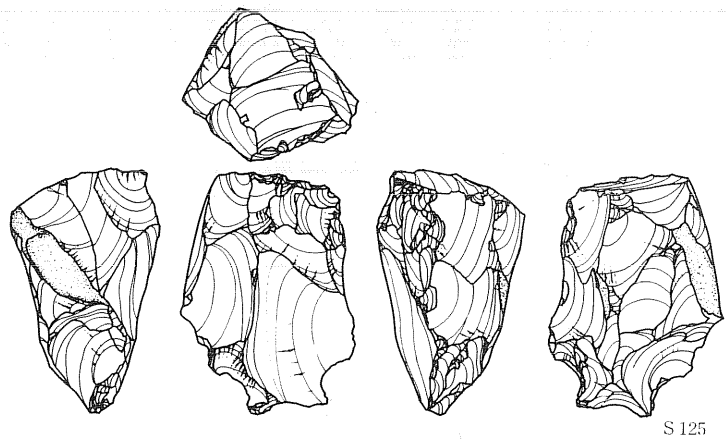
第96図　遺構外出土石器(13)

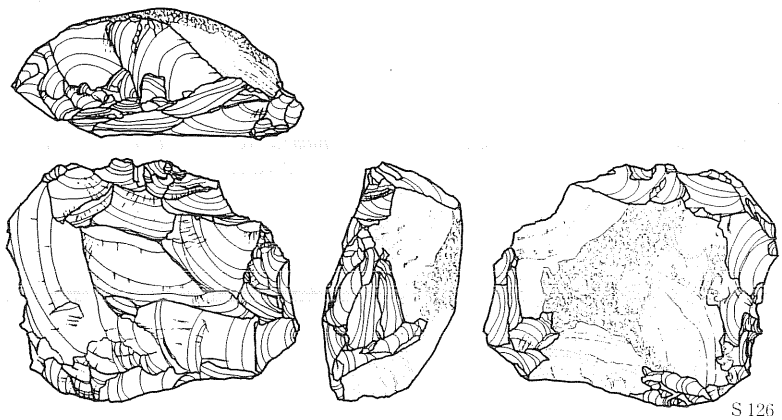


番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S120	LK　45		石核	107	45	30	111	頁岩	32
121	LS　42	II下	〃	90	41	31	121	〃	〃
122	LL　45	II	〃	71	45	27	70	〃	〃
123	LQ　45	II	〃	64	49	19	52	〃	〃

第97図　遺構外出土石器(14)


S 124

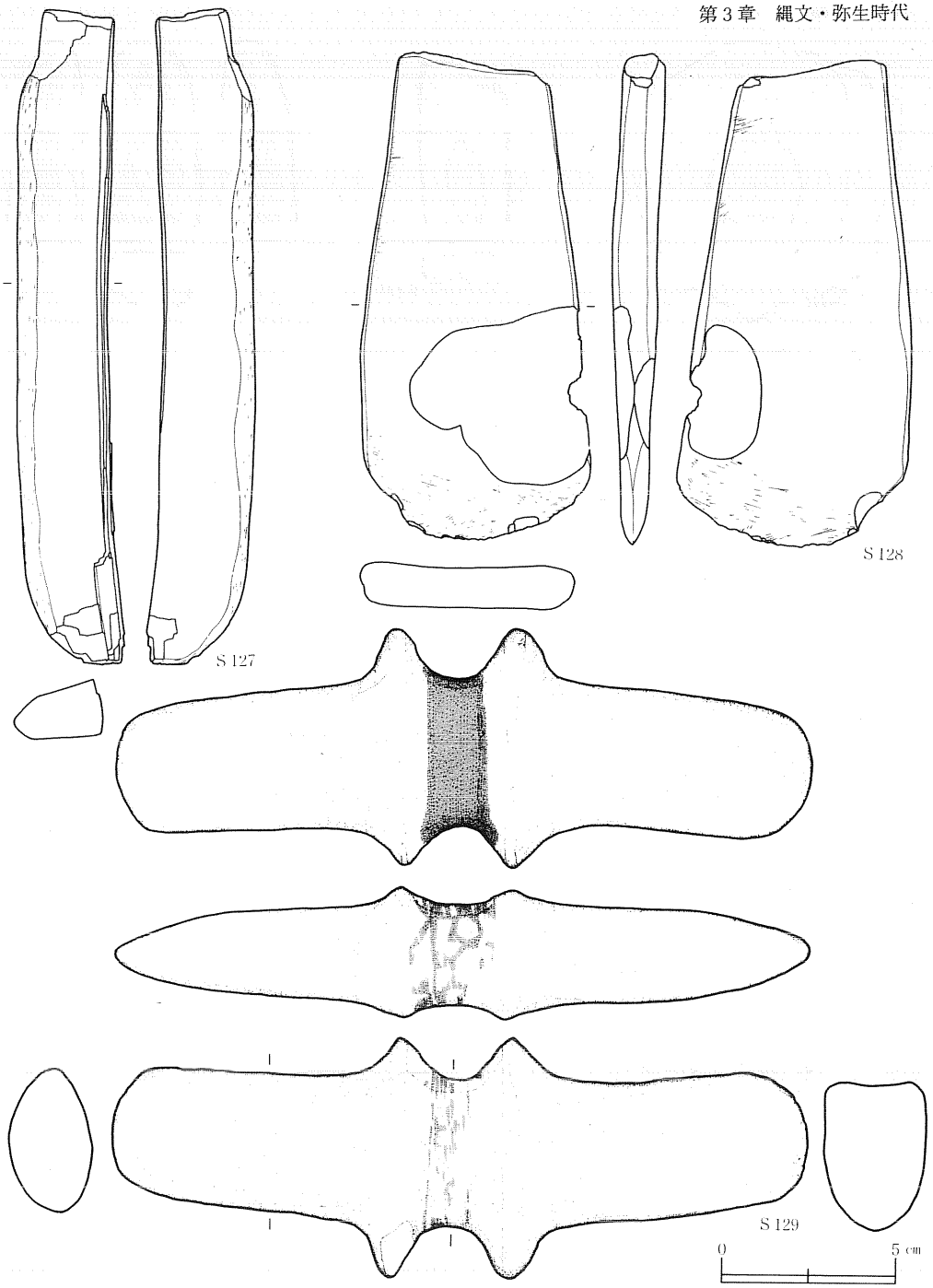

S 125


S 126

0　5 cm

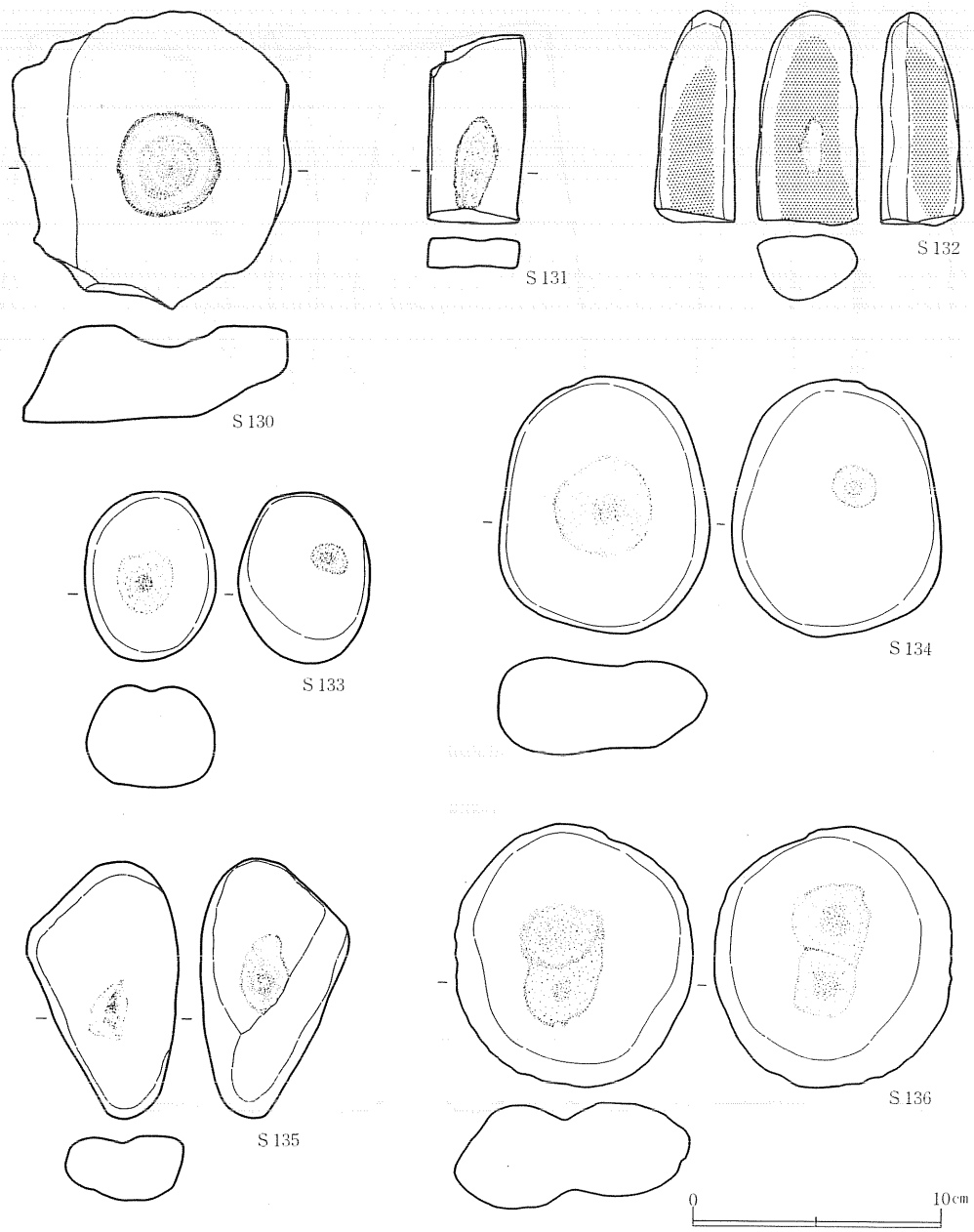
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S 124	MC 51	Ⅱ上	石核	40	41	20	35	頁岩	32
125	MG 50		〃	64	47	39	89	〃	〃
126	MC 48	Ⅱ	〃	65	77	37	174	〃	〃

第98図　遺構外出土石器(15)



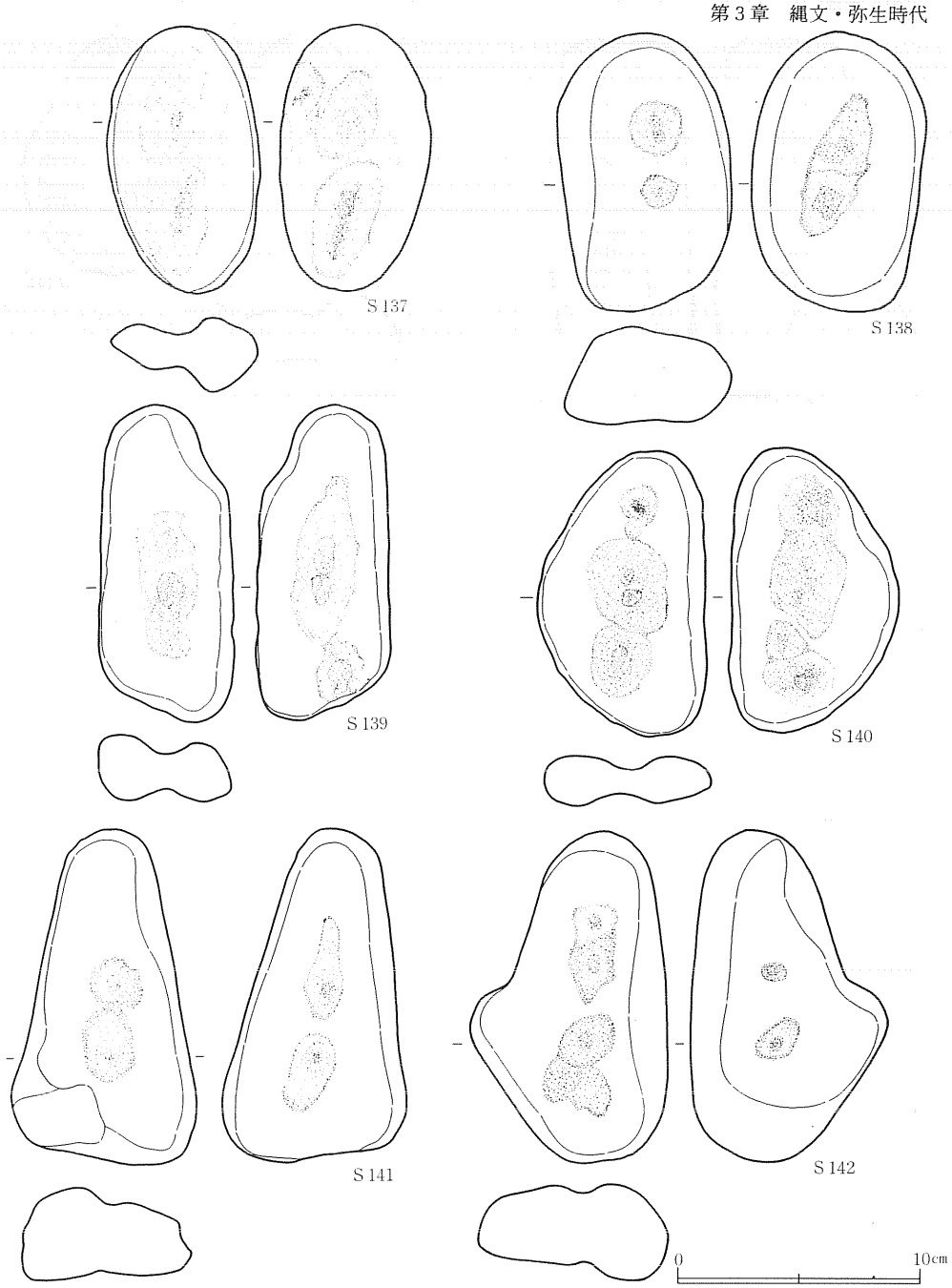
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	図版
S127	MA　53	II	石製品	188	32		113		33
128	LR　48		〃	140	57	14	165	頁　岩	〃
129	LR　48	II上	〃	199	69	39	466		〃

第99図　遺構外出土石器(16)・石製品



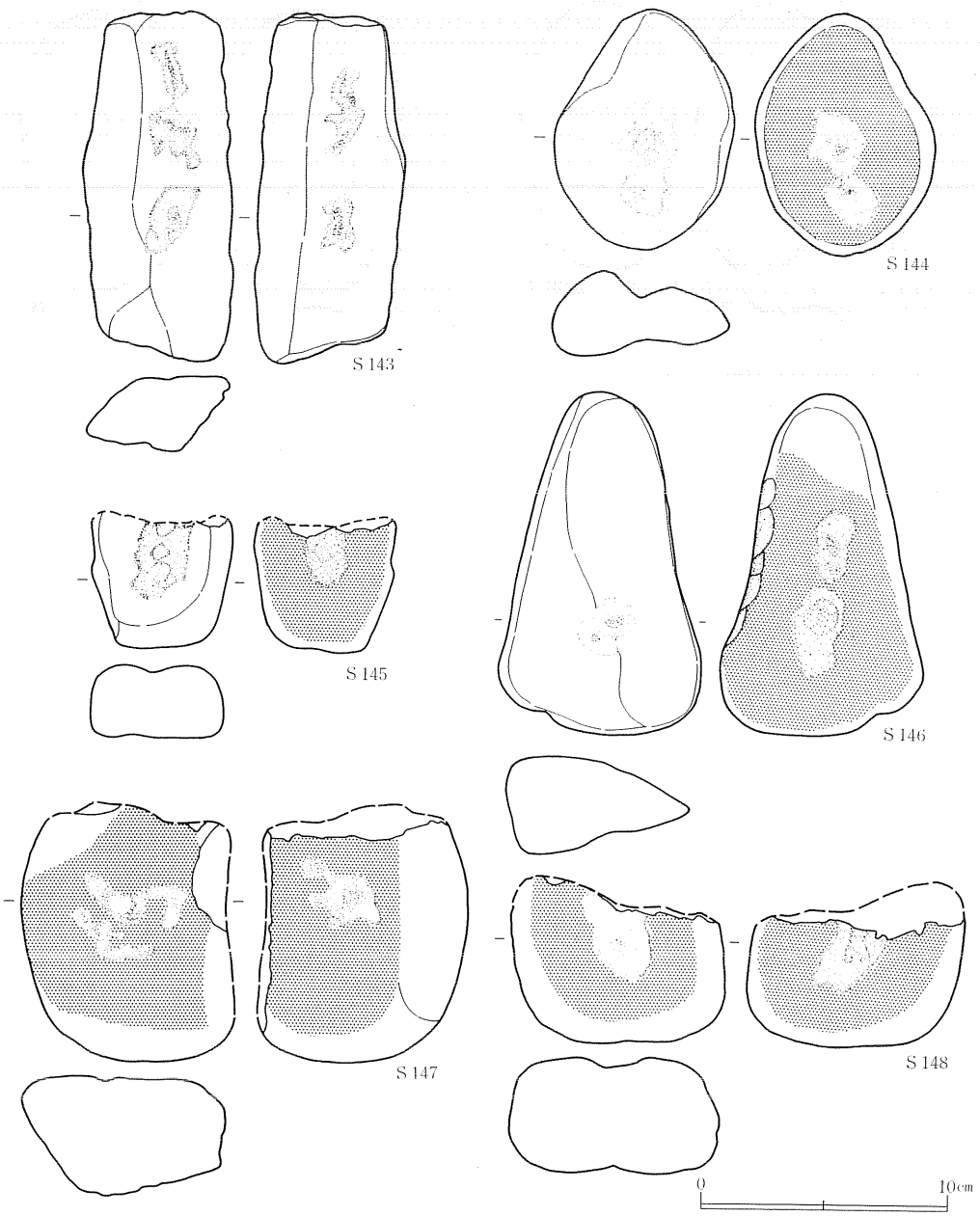
番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S130	LT 39	II	くぼみ石 — I	120	101	53	662	安山岩	34
131	ME 47		〃	77	39	14	52	〃	〃
132	MA 51	II上	〃	86	42	33	126	〃	〃
133	LR 50	II	〃 — II	69	53	40	166	〃	—
134	MC 46		〃	104	85	40	404	〃	—
135	MA 51	II上	〃	105	61	27	254	〃	—
136	LS 51		〃	106	96	40	427	〃	34

第100図　遺構外出土石器(17)



番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S137	LP 48	II	くぼみ石――II	110	63	30	225	安山岩	34
138	LR 50	II	〃	114	71	40	397	〃	〃
139	MA 49	II上	〃	130	56	21	253	〃	〃
140	LS 52	II	〃	118	70	20	200	〃	35
141	LS 50		〃	139	84	31	238	〃	〃
142	LK 52	II	〃	137	83	40	482	〃	〃

第101図　遺構外出土石器(18)



番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S143	LQ 46	II	くぼみ石――II	143	62	30	380	安山岩	—
144	MC 50		〃	98	73	31	239	〃	—
145	LG 49	II	〃	56	58	21	139	〃	—
146	MA 57	II上	〃	140	82	40	459	〃	—
147	LR 52	II上	〃	106	87	41	302	〃	—
148	LS 52	II	〃	68	88	41	330	〃	—

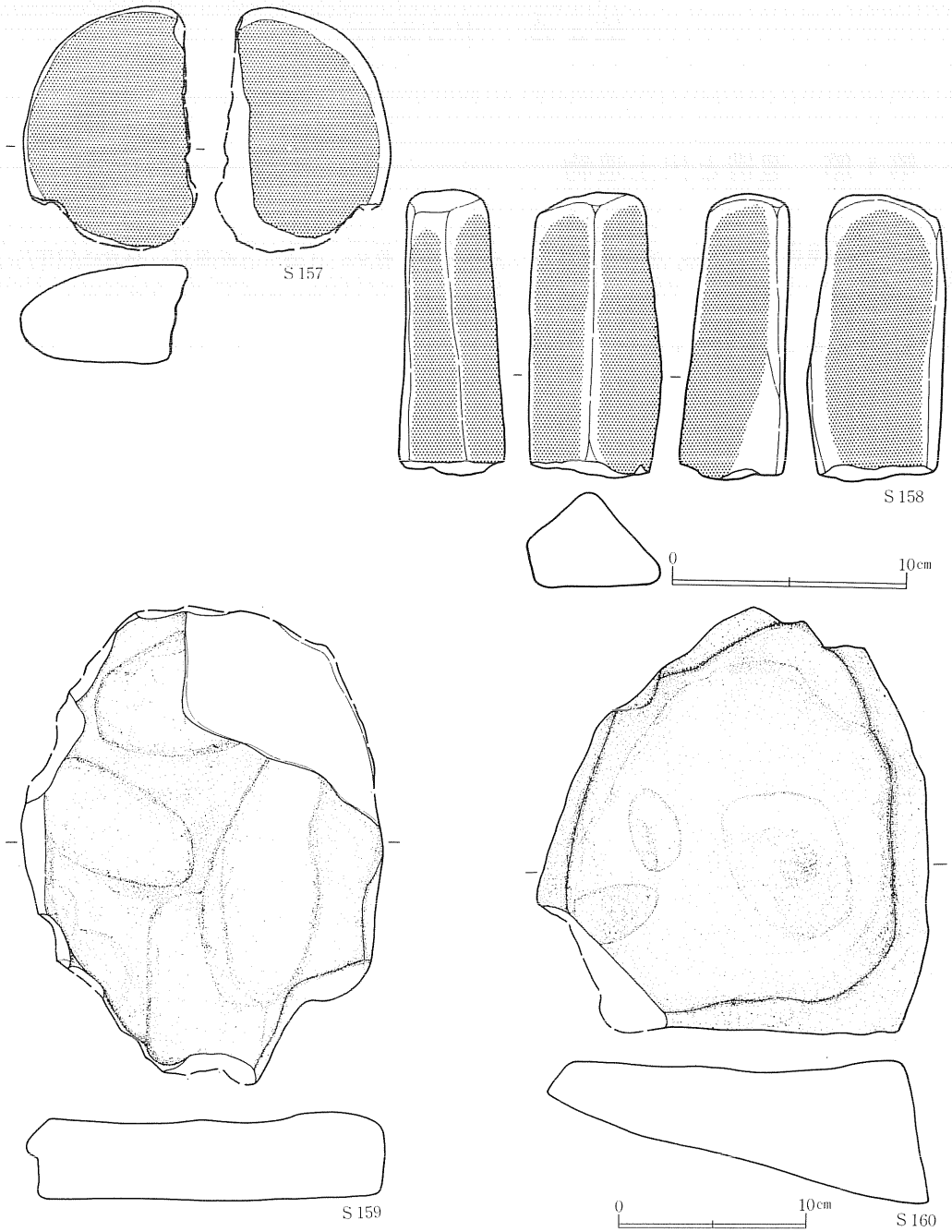
第102図　遺構外出土石器(19)

番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S149	LS　52	II	くぼみ石――III	103	60	49	306	安山岩	－
150	MB　53		〃	81	55	34	159	〃	36
151	MR　49	II	〃	84	66	54	275	〃	－
152	LS　52	II	〃	93	59	35	237	〃	36
153	MC　51	II	〃	99	39	31	160	〃	－

第103図　遺構外出土石器(20)

番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S154	表採	－	くぼみ石 ── Ⅲ	107	81	46	451	安山岩	36
155	LT 52	Ⅱ	〃	128	57	46	358	〃	－
156	MA 50	Ⅱ	〃	79	61	48	324	〃	36

第104図　遺構外出土石器(21)



番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	図版
S157	MA　51	II上	磨石	104	75	40	441		
158	LS　47		〃	122	58	45	389		
159	LL　50	II上	石皿	340	258	62	9		
160	MD　52	II	〃	301	267	102	12		

第105図遺構外出土石器(22)

第４章　平安時代

第１節　遺構と出土遺物

平安時代の遺構としては、５基の火葬墓と土坑１基である。５基の火葬墓は、調査区の中でも、台地西縁にほぼ南北に直線的に位置しており、土坑内には炭を充塡し、骨蔵器に炭とともに火葬骨を埋納したものである。

１．火葬墓

ＳＲ05(第106図、図版17・37)

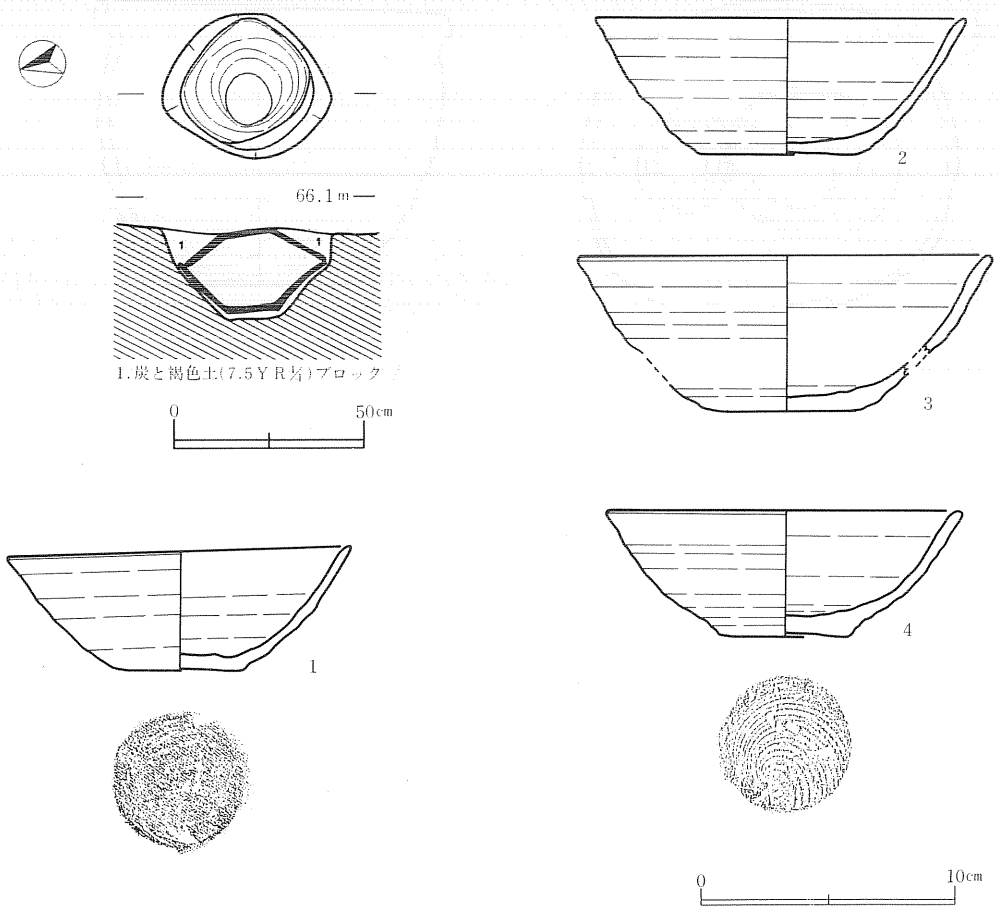
ＭＢ49グリッドの南東で確認されている。上面形が径22cm、深さ13cmの土坑に、土師器坏２個を合せ口にして埋納したものである。坏の内側からは、炭とともに骨紛がわずかに検出されている。土坑内は炭で充塡している。

骨蔵器のうち、上になっていた坏１は、口径14.6cm、底径6.1cm、器高5.4cmで、やや上げ底の底部からわずかに外に膨らみ、わずかに肥厚し外反する口縁部にいたる器形である。切り離しは回転糸切りによる。胎土は砂粒を含むが、緻密で焼成はややもろい。色調は浅黄橙色(7.5ＹＲ8/4)を呈している。下になっていた坏２は、口径16cm、底径5.2cm、器高6.1cmで、１よりもやや大ぶりの坏である。平坦な底部から外に丸く膨らみながら、わずかに肥厚し外反する口縁部にいたる器形である。胎土は肌目が細かく、焼成はもろく、色調は橙色(5ＹＲ6/8)を呈している。底部は摩滅しており切り離し方法は不明である。

ＳＲ09(第106図、図版37)

ＳＲ05より南西へ６ｍほどのＭＣ48グリッドで確認しているが、木根によって撹乱が著しく位置を捉えただけで平面図等は作図できなかった。火葬墓の形態はＳＲ05と同様土師器の坏２個を合せ口にしたものである。

上になっている坏３は、口径14cm、底径4.8cm、器高4.8cmで、上げ底ぎみの底部から緩く外傾しながら外反する口縁部にいたる器形である。切り離しは回転糸切りによる。胎土は肌目が細かく、焼成はもろい。色調は浅黄橙色(7.5ＹＲ8/4)を呈している。下になっている坏４も、口径15cm、底径4.8cm、器高5cmで、坏３とほぼ同じ器形で切り離しも回転糸切りによるものである。胎土は砂粒を含むが緻密だが焼成はもろい。色調は橙色(7.5ＹＲ7/6)を帯ている。

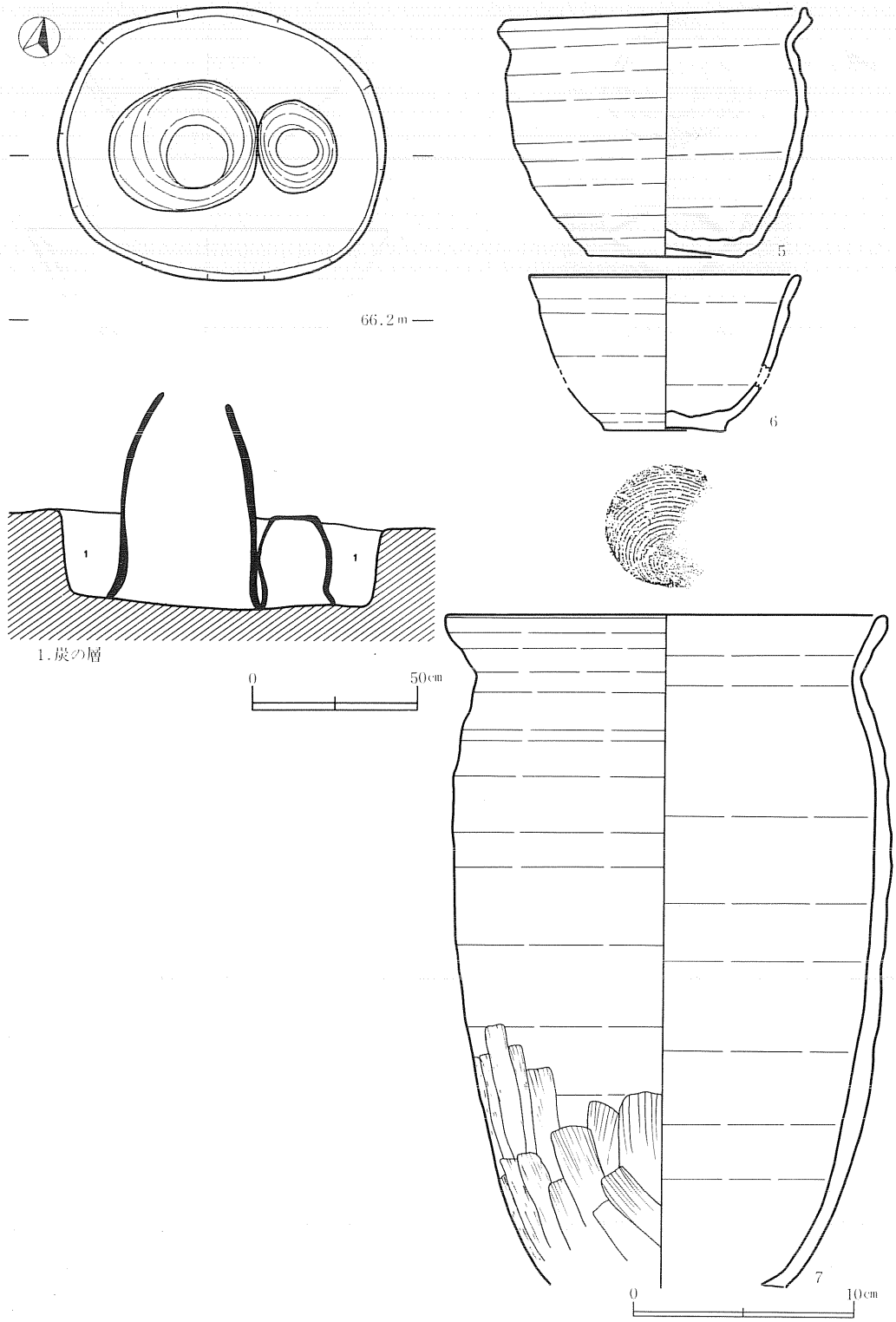


第106図　火葬墓ＳＲ05・ＳＲ09と出土土器

ＳＲ06(第107図、図版37)

ＳＲ05より北へ10mほどのＭＢ51グリッドの北西コーナーで確認されている。土坑の規模は、50cm×40cmほどの楕円形で、地山を15cmほど掘り込んでいる。土坑内の覆土には炭が充填されていて、これに大小の土師器甕がセットで埋納される。大きな土師器甕は底部が穿孔され、これを倒立させている。確認時に、この甕の底部付近に土師器坏の口縁部破片がこれも倒立した形で密着しており、同一個体の破片が甕の内部からも出土していることから、土師器坏によって、甕の穿孔部を蓋していたものと考えられる。大甕に接して、小型の土師器甕がこれも倒立して埋納されている。

甕７は、口径19.8cm、現存器高30.5cmで、これから推定すると高さ32cm、底径６cmほどになろうか。体部下半から緩く外傾しながら、体部中ほど上半にかけてはほぼ直立し、「く」の字状に鋭く屈曲する頸部、肥厚して外反する口縁部にいたる長胴の甕である。体部下半には、縦方向の粗いヘラケズリの痕跡を残しており、内面の体部上半にはヨコナデが行われる。胎土



第107図　火葬墓ＳＲ06と出土土器

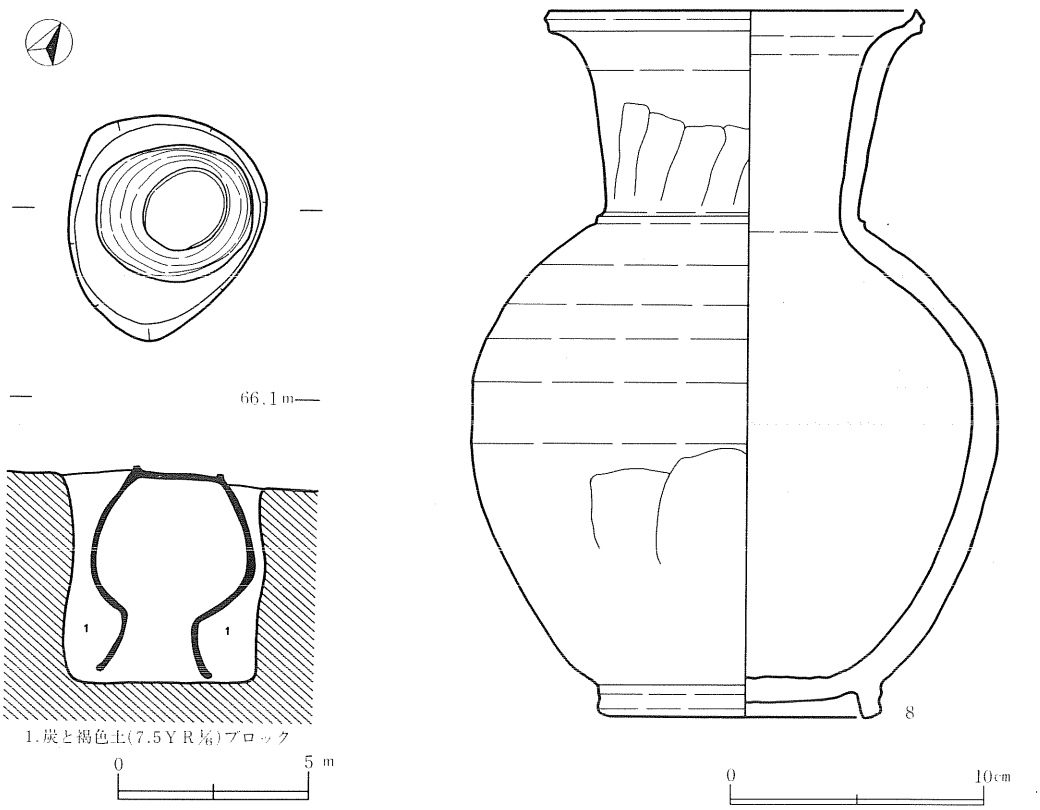
は砂粒を含むが緻密で、焼成も良い。色調は浅黄橙色(7.5Y R8/3)である。

小型の甕5は、口径13.5cm、底径6.8cm、器高11cmで、ヘラナデされ上げ底の底部から丸みのある体部、さらに「く」の字状の頸部、外面が内傾する口縁部にいたる器形である。口縁内面は直立し、口唇部は突出している。胎土には砂粒を含み、二次加熱によって剝落があり、橙色(2.5Y7/6)を呈している。

土師器坏6は、口径12cm、底径5.5cm、器高7.1cmで、上げ底ぎみの底部からわずかに4mmほど直線的に立ち上がり、丸みのある体部下半から直線的に外反する口縁部に至るもので、椀形に近い器形である。体部上半には、体部と口縁部とを意識的に画そうとする幅7mmほどの沈線がめぐる。切り離しは回転糸切りによる。胎土は緻密で、焼成も良く、色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)である。

SR10(第108図、図版38)

SR05より南東へ9mのLT47グリッドで確認されている。土坑の規模は、30cm(北西)×25cmのほぼ円形で、地山を27cmほど掘り込んでいる。土坑内には、炭がびっしりと充填されていて、中央に須恵器の壺が、東側に少し傾いて倒立した状態で埋納されている。骨蔵器内から



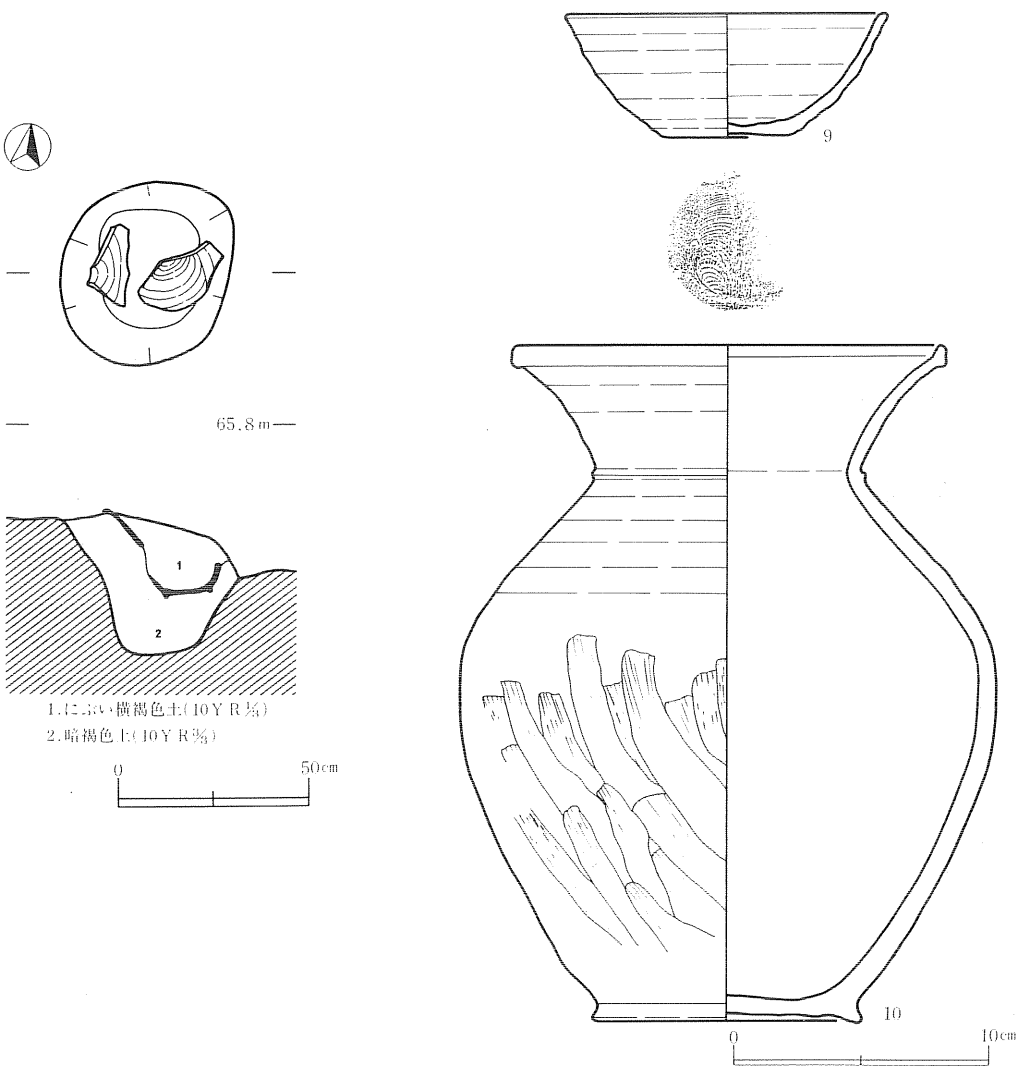
第108図　火葬墓SR10と出土土器

は炭と骨片が検出されている。

須恵器壷８は、口径14.3cm、底径11cm、器高27cmで、わずかに外に張り出した高さ１cmの高台付の長頸壷である。底部から中央部に最大径がある丸みのある体部に至り、さらに頸部との境には段を有する。頸部は直線的に外傾して、突帯のある口縁部につながる。口唇部はつまみ出しによって、突出している。頸部下半と体部下半にはヘラケズリの痕跡が認められる。胎土は白色砂粒を含むが、肌目が細かく、焼成も良い。黄灰色(2.5Y6/1)を呈する。

ＳＲ33(第109図、図版38)

ＳＲ05より南へ18mのＭＡ44グリッドで確認されており、５基の火葬墓のうちでは最も南に位置している。検出時には、木根や撹乱によって著しく破壊されており、径20cmの土坑とそ



第109図　火葬墓ＳＲ33と出土土器

の中に、須恵器の壷の底部と口縁部破片が残っているだけである。しかしながら底部の出土状況は原位置を保っており、また周辺から同一個体の破片と須恵器坏の破片が散乱して出土していて、この2個体の須恵器はほぼ完全に復原されている。このことからＳＲ33火葬墓は、本来須恵器の壷を正立させ、これに須恵器の坏で蓋をしていたものと考えられる。土坑内には炭が充塡されているが、骨片などは検出できなかった。

須恵器坏の9は、口径12.5cm、底径5cm、器高4.8cmで、上げ底の底部から緩いカーブを描いて立ち上がり、外傾する口唇部にいたる土器である。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は肌目が細かく、焼成も良い。灰黄色(2.5Y R6/2)を呈している。

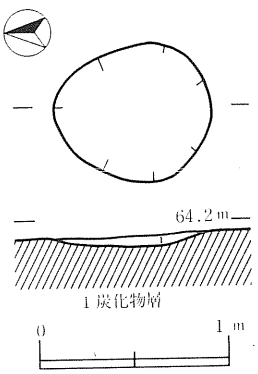
須恵器壷の10は、口径16.6cm、底径10cm、器高26.5cmで、外に張り出した高さ0.5cmの高台付の長頸壷である。底部から、丸く張り出す体部中央には外傾しながら立ち上がり、中央部からは径10.7cmの頸部に直線的にすぼまってゆく。頸部は大きく外傾し、直立する口縁部に至る。体部と頸部の境には段を有する。体部下半には、ヘラケズリ痕を明瞭に留める。胎土には3mmの白色砂粒を含むが、焼成は良好で、黄褐色(2.5Y5/3)を呈している。

2．土坑

ＳＫ27(第110図)

中央より北東側のＬＯ54グリッド、IIa層上面で炭化物の広がりとして確認しているが、掘り過ぎており、実際にはＩc層上面ですでに炭化物が認められていた。従って、確認時には土坑の底面に近い部分だけであって、その規模は径80cmの浅い窪みとして把握したものである。土坑底面から壁は一様に赤く焼けており、この場で火が使用されたものである。土坑内は、炭化物の層で、長さ3cmほどの木炭片が混入していた。

遺物は出土していない。

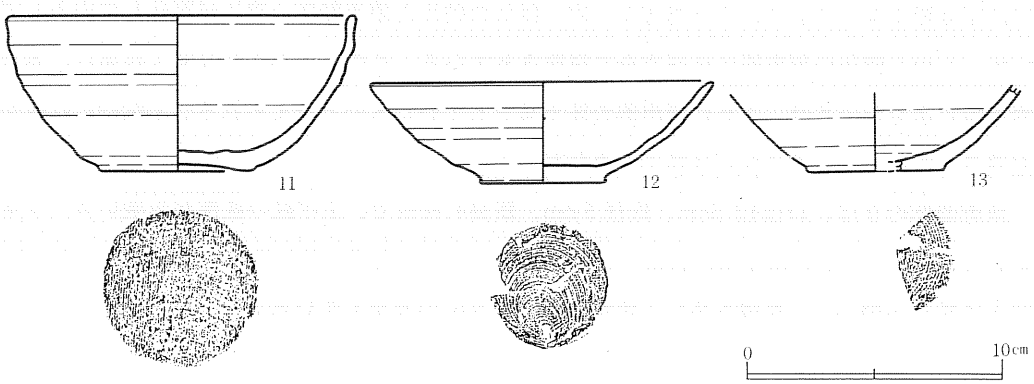


第110図　土坑ＳＫ27

第2節　遺構外出土遺物(第111図)

平安時代の遺構外出土の土器は土師器の細片が多く、形態の明確なものは第111図の土師器坏3点だけである。出土層位はＩ層からII層にかけてで、出土地域は調査区の北西部で主に火葬墓周辺である。

11は直立する口縁から湾曲しながら、上げ底の底部にいたるもので、口径13.8cm、底径6.0cm、器高6.3cmである。12は大きく外反する口縁から直線的に底部にいたる浅い坏であり、



第111図　遺構外出土遺物

口径８cm、底径4.8cm、器高1.4cmである。13は径約6.0cmの底部から立ち上がるもので、12と似た形態になるのであろう。

第５章　中世

第１節　遺構と出土遺物

当該期の遺構としては、環状の溝状遺構１基だけである。

ＳＤ14(第112図、図版19・38)

調査区中央より西北のＭＣ52･53グリッドを中心に確認されている。幅40～80cm、深さ10～20cmの溝が径5.2mの環状にめぐるもので、東側は２ｍにわたって削平されている。溝の底面は凹凸があり、西側では径20cm、深さ25cmのピットが２箇所で確認されている。

覆土は黒褐色土中に暗褐色土がブロック状に混入していて、しまりがあり炭化物も含まれる。覆土中には大小の礫が多数あり、この礫は、溝の周辺からも検出される。また数点の中世陶器も出土しており、これらと同一個体の破片が、溝の周辺グリッドから出土している。

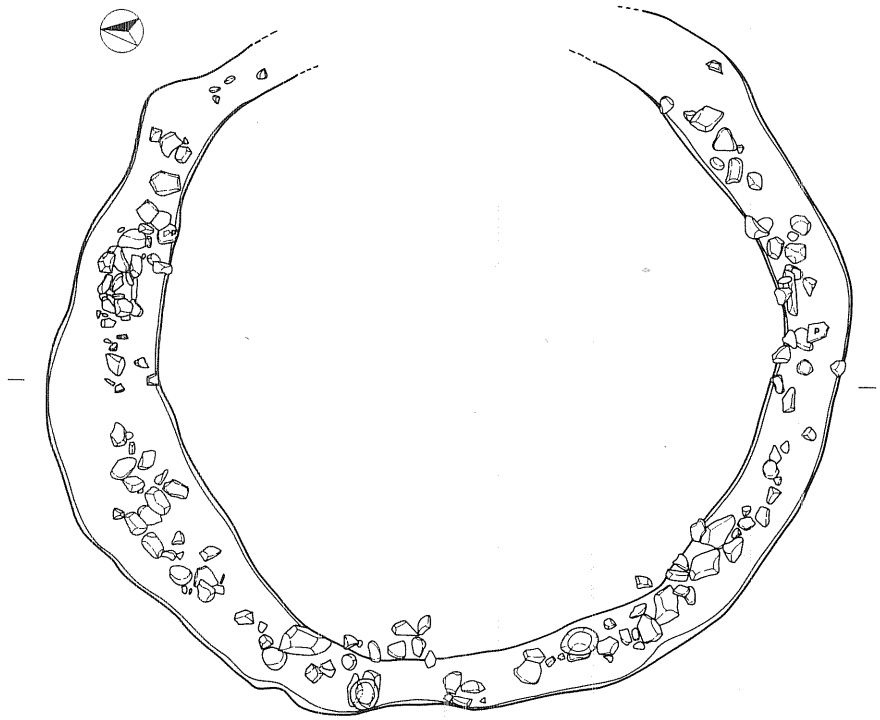
出土土器(1･2)のうち１は、口径11cm、底径10cm、器高17.5cmで、最大径は体部中央で15cmである。上げ底ぎみの底部から体部中央に外傾し、さらに口縁に向かっては内傾する。幅1.5cmで平坦な口唇は緩く外に下がっており、切り離しは回転糸切りによるもので経筒の外容器と考えられる。２は、口径24.5cmの甕形土器の大きく外反する口縁部破片で、口唇部はやや角張っている。

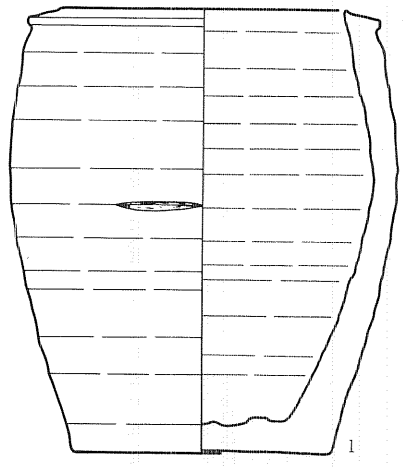
第２節　遺構外出土遺物(第113図、図版38)

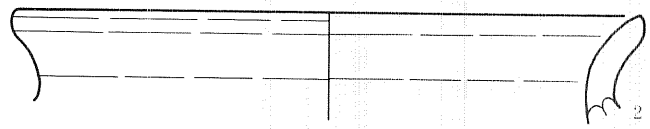
当該期の遺構外からの出土遺物は、第113図に示した２点の中世陶器である。２点ともＳＤ14周辺から出土している。

３の壺は、丸みのある口唇、外反する口縁部に短い頸部、球形の体部から底部にいたる器形で、体部には下半まで右下がりの平行叩き目がある。口径21cm、底径14.1cm、器高40.2cm、体部最大径は上半で37.2cmである。胎土は緻密で、色調は灰色から赤褐色を呈している。

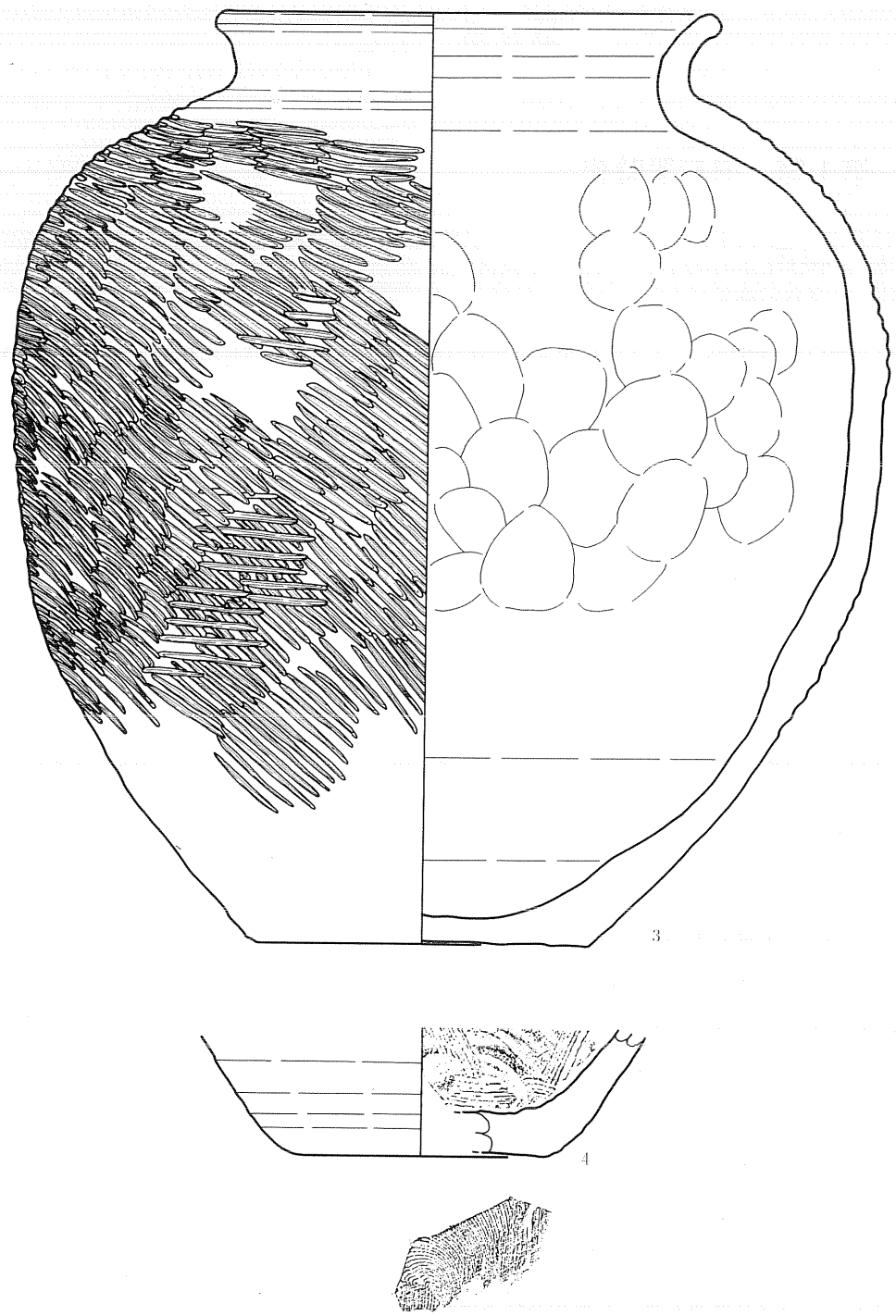
４は10.8cmほどの擂鉢の底部で、５～６条一組の卸目が間隔をおいて施されている。胎土は緻密で、色調は灰色を呈している。







第112図　溝状遺構ＳＤ14と出土土器



第113図　遺構外出土遺物

第6章　まとめ

第1節　旧石器時代

1．AB区

(1)　石器群の構造

AB区の石器群は、ナイフ形石器と台形様石器を主体とし、それに、彫器、掻器が組成する。素材の形を大きく変えないナイフ形石器においては、長さ6cm以上、厚さ0.8cm以上の縦長剥片が目的剥片として選択され、基部に細部加工を施すことによって整形される。製品は、素材の形状と大きさに規定されることから、長さと幅において、ばらつきが認められる。一方、台形様石器においては、細部加工の段階で折断加工と急斜度加工を駆使することによって、製品の規格化を図っており、目的剥片の選択は、長さにさほど左右されない。むしろ、平坦加工の技術をもたないことから、長さよりも厚さに選択性が認められる。その他の石器においては、剥片剥離作業の過程で生じる剥片を適宜選択しており、掻器には厚手の大形の剥片や盤状剥片が選択されている。

これらの目的剥片を生産する剥片剥離技術は多様であり、盤状石核や分割礫を石核素材に用いて、剥片剥離作業が行われている。石核の大きさに限定のある場合には主として台形様石器の目的剥片が生産されるが、石核が大形の場合には、ナイフ形石器の目的剥片もあわせて剥離される。特に後者の場合、同一個体においてそれが認められており、一連の作業の中で、ナイフ形石器と台形様石器が製作されている。

したがって、本石器群の構造は、分割による多様な石核に対応した多様な剥片剥離技術をその技術基盤とし、適宜、目的剥片の選択を行いながら目的剥片の形状を保持するナイフ形石器と、目的剥片の形状を細部加工技術によって修正する台形様石器の2者を主として製作したものであるといえる。

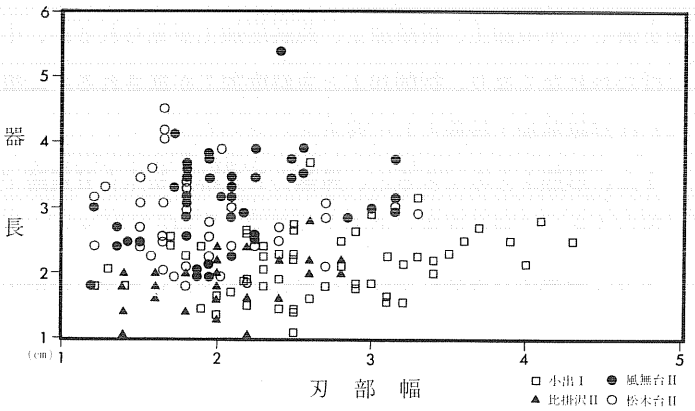
(2)　編年的位置付け

本石器群の編年的位置付けを行うにあたっては、本石器群において特徴的にみられた台形様石器に着目してみたい。近年、台形様石器についての研究はさかんであり多くの論考がみられるが、ここでは佐藤宏之氏の分類に大枠では準ずることにする。(註1)

本石器群の台形様石器は、長幅比が2：1から1：2となるような寸づまりの縦長剥片又は横長剥片を素材とするが、より縦長指向である。製品及び素材は、風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡・此掛沢Ⅱ遺跡に比してより刃部幅が広い(第114図)。細部加工技術の違いから、さらに細

別されるが、すべてが佐藤氏によるIII類のヴァリエイションと考えられよう。

秋田県下では、本遺跡の他にも風無台I遺跡(註2)、風無台II遺跡(註3)、松木台II遺跡(註4)、地蔵田B遺跡(註5)、下堤G遺跡(註6)、此掛沢II遺跡(註7)、米ヶ森遺跡(註8)が知られており、それぞれの保有する台形様石器には型式学的な差異が認められる。各遺跡で出土している台形様石器は、風無台I遺跡、風無台II遺跡、



第114図　台形様石器長幅比

松木台II遺跡では佐藤分類によるI・III類が、地蔵田B遺跡ではI・II類が、小出I遺跡、下堤G遺跡、此掛沢II遺跡、米ヶ森遺跡ではIII類が認められる。

県下の遺跡を検討する前にまず他地域における様相を概観すると、立川ロームIX層段階において、武蔵野台地ではI類が盛行し、下総台地、北関東ではII類が卓越する。続く、立川ロームVII層段階では、全体的に台形様石器は衰退し、先行する型式をわずかにとどめるだけとなる。一方、北陸地方では、III類の広範な分布が認められるという状況がある。

風無台II遺跡・松木台II遺跡、地蔵田B遺跡の台形様石器は、I類とII類において、関東地方との強い類縁関係が認められることから、これらを立川ロームIX層段階に併行するものと考えたい。したがって、県下の台形様石器を保有する石器群の中では最古に位置することになる。これに後続する石器群として、小出I遺跡の石器群があげられる。その理由としては、III類における型式変遷をそこに捉えうるからである。III類の変遷をみてみると、風無台II遺跡では素材となる剥片の打面を錯向剥離か平坦剥離か折断によって除去し、打面と相対する側に急斜度加工を施すが、松木台II遺跡では、これに加えて打面をそのまま残置するものが見られるようになる。小出I遺跡ではそれが定形化して4a類となり、数量的にも安定することになる。そして、この4a類が、此掛沢II遺跡をはじめとする米ヶ森型台形石器へと変遷をとげるものと思われる。米ヶ森型台形石器の生産は、かなりシスティマティックに行われるが、風無台II遺跡から小出I遺跡を経て此掛沢II遺跡に至る間に、技術的な変遷も認めることができる。すなわち、風無台II・松木台II遺跡では、円盤状石核から横長・幅広剥片を剥離して台形様石器に仕上げるが、素材形状が多様であることから製品の長幅分布におけるばらつきも大きい。続く小出I遺跡では、素材が縦長剥片指向であることから、長さにおけるばらつきが大きくなり、此掛沢II遺跡では、連続して同形の小形剥片を剥離するために細部加工技術を最小限にとどめても、

製品は規格的である。

細部加工技術について検討してみると、風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡・地蔵田Ｂ遺跡では各類を通じて平坦加工、折断加工、急斜度加工が見られるが、小出Ⅰ遺跡においては、平坦加工は行なわれなくなり、折断加工と急斜度加工が施される。此掛沢Ⅱ遺跡においては、急斜度加工だけが細部加工技術として残る。

また、形態からみてみると、風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡では、Ⅰ類については梯形・撥形が指向され、基部の作出が明瞭であるが、Ⅲ類については、方形が指向され刃部の保持が主体となる。地蔵田Ｂ遺跡におけるⅡ類については、菱形・撥形が指向され、やはり基部の作出は明瞭である。後続する小出Ⅰ遺跡では、Ⅲ類が卓越し、細部加工技術においては先行型式の技術を引き継ぐが、形態的には、より刃部の保持が顕著となり、刃部幅が大きい。このことは、Ⅰ・Ⅱ類における装着方法及び機能が、Ⅲ類とは全く異質であったことを予測させる。

また、こうした台形様石器の製作技術の変遷は、ナイフ形石器の製作技術と不可分な関係にある。風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡は、ナイフ形石器を保有せず、剝片の供給は台形様石器のために行われる。しかし、続く小出Ⅰ遺跡では、ナイフ形石器の製作が台形様石器の製作と同一工程で行われることから、全体がより縦長剝片指向になる。おそらく、ナイフ形石器製作の参入が、先行する石器群の技術基盤に変容をもたらしたものだと予測される。さらに、後続する此掛沢Ⅱ遺跡では、同一個体にあってもナイフ形石器と台形様石器は、それぞれの石核が明瞭に分離されていることから、ナイフ形石器と台形様石器の長幅分布は、明らかに異なるまとまりとして顕現する。

こうした技術基盤の変化は、ナイフ形石器と台形様石器の２極構造(註９)あるいは二項性(註10)のあり方が決して一律ではないことを示唆しているように思われる。秋田県下においては他地域とは異なって、米ヶ森型台形石器は安定的なあり方を示すが、共伴するナイフ形石器の型式学的相違を考慮すれば、そこにはある程度の存続期間が予測されるのである。したがって関東地方では、立川ロームⅦ層段階に衰退する台形様石器が、秋田・岩手においては米ヶ森型台形石器へと形態変化を遂げてさらに存続すると考えるわけである。この時期、ナイフ形石器の型式が、関東では二側縁加工が、東北では基部加工が中心となるという、地域性の顕現する時でもあり、その中で米ヶ森型台形石器も独自の成立をみたのであろう。

また、台形様石器が米ヶ森型台形石器へと形態変化を遂げたことは、ナイフ形石器との機能分化が明瞭になったことであり、その背後には、狩猟形態上の変化も予想されるのである。

こうした台形様石器の機能分化にともなって２極構造が変容し、ナイフ形石器と台形様石器の両者を同一個体から製作し使用する此掛沢Ⅱ遺跡や下堤Ｇ遺跡のような遺跡が残されるものと思われる。

小出Ⅰ遺跡の台形様石器は、型式学的にも技術的にも、風無台Ⅱ遺跡・松木台Ⅱ遺跡から此掛沢Ⅱ遺跡へと変化を遂げる過渡的様相を示す資料と考えられ、米ヶ森型台形石器の成立に関与する石器群として評価することができよう。尚今回触れることのできなかった松木台Ⅲ遺跡(註11)・風無台Ⅰ遺跡を含む県下の編年については、別稿をもって詳細を論じたいと思う。

註1　佐藤宏之「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻第3号　日本考古学会　1988（昭和63年）

註2　秋田県教育委員会　『七曲台遺跡群発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第125集　1985（昭和60年）

註3　註2に同じ

註4　註2に同じ

註5　秋田市教育委員会　『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1986（昭和61年）

註6　秋田市教育委員会　『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1983（昭和58年）

註7　秋田県教育委員会　『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第114集　1984（昭和59年）

註8　協和町教育委員会　『米ケ森遺跡発掘調査報告書』　1977（昭和52年）

註9　註1に同じ

註10　田村隆　「二項的モードの推移と巡回－東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相－」『先史考古学研究』　第2号　阿佐ケ谷先史学研究会　1989（平成元年）

註11　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』　秋田県文化財調査報告書第150集　1986（昭和61年）

2．C区

(1)　石器群の構造と遺跡の構造

C区の石器群は、槍先形尖頭器の最終調整段階のポイントフレイクによって特徴づけられており、石器群の構造の全容は不明と言わざるを得ない。しかし、共伴するナイフ形石器や、二次加工のある剥片は、槍先形尖頭器の製作工程とは独立した工程をもって製作されたと予測されることから、二つの異なる石器製作工程からなる石器群構造をもっていたと思われる。また、本遺跡では、槍先形尖頭器以外の石器が製作されておらず、他器種の組成も顕著ではないことから本遺跡が短期間の狩猟を中心としたキャンプサイトであったことも窺われる。

本遺跡を占拠した単位集団の規模は明らかではないが、台地中央部をとり囲むように環状に配列されたブロックは、集団の構成を示唆するものであり、石器製作の行われているC1・C2・C6・C7ブロックが、それらの核を成していたものと推測される。

本遺跡でみられたような槍先形尖頭器の製作址は、山形県弓張平B遺跡(註1)、群馬県御正作遺跡(註2)、静岡県広野北遺跡(註3)でも確認されており、地域を越えて共通した様相を呈している。このことは、槍先形尖頭器の製作と使用に関する行動が、地域的に限定されずに広く列島内で共通していたことを予測させる。

(2) 編年的位置付け

東北地方においては槍先形尖頭器を有する遺跡の発掘例が少なく、本石器群の年代的な対比を困難なものにしているが、石刃素材または剝片素材の石器を組成する点で、山形県越中山A′遺跡(註4)にその類例を求めることができる。しかし、本石器群の槍先形尖頭器は、最大幅が胴下半部にある木葉形の形態を持ち、それは、山形県弓張平B遺跡のものに近い。したがって越中山A′→小出Ⅰ→弓張平Bという変遷が予測されるが、これについては、資料の増加を待ってあらためて検討したい。

註1　山形県教育委員会　『弓張平遺跡　第1・2次調査報告書』　1978（昭和53年）

註2　大泉町教育委員会　『御正作遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』　1984（昭和59年）

註3　平安博物館　『静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』　1985（昭和60年）

註4　加藤稔　「東北日本における中石器文化に関する覚書」　『東北考古学の諸問題』　寧楽社　1976（昭和51年）

第2節　縄文・弥生時代

1．遺物について

当該期の遺物について土器を中心に、概観してみる。

Ⅰ群土器：1類土器は条間のある縄文が施され、胎土に繊維を含まないなど、早稲田貝塚第4類あるいは赤御堂式に並行するものである。

2類土器は、撚糸側面圧痕文を中心に刺突文などが施されるもので、花積下層式に並行するものであろう。

3類土器は、維を多量に含み、結束のない羽状縄文が施されるもので、縄文は0段多条の2段の原体(ＬＲ・ＲＬ)によるもので、長七谷地貝塚第Ⅲ群の相当するものと考えられる。

4・5類土器は、長七谷地貝塚第Ⅳ群土器に相当するが、4ｂ類の条の交差する土器は、長七谷地第Ⅳ群ａ類に、4類は同貝塚第Ⅳ群ｂ類に相当する。

6類の網目状撚糸文の施される土器のうち6ｃ類、7類の組紐回転文の施される土器は、県内でも、これまで出土例のないもので、長七谷地貝塚など東北北半には見られない土器である。一方の東北南半では、組紐回転文を中心とするものに福島の宮田貝塚第Ⅲ群土器などがあり、大木2式に見られるものである。6ｃ類土器の文様構成をとる土器については明確ではないが網目状撚糸文の存在などから、大木2式に並行するのかもしれない。

Ⅱ群土器は文様の特徴から中期の大木9式の段階のもので、竪穴住居跡ＳＩ20、フラスコ状土坑ＳＫＦ19・25・30などもこの時期に比定できる。

Ⅲ群土器のうち1類は、大洞Ｂ・ＢＣ式の土器である。2・3類土器は大洞Ａ・Ａ´式に位置付けられる。

Ⅳ群土器のうち、2類土器は県内では宇津ノ台遺跡出土土器に類似し、天王山式に並行するであろう。1類土器は2類土器に先行するものである。

2．遺構について

Ⅰ群土器の時期の遺構については、ＳＫ04・ＳＫＦ24が、Ⅱ群土器の時期の遺構にはＳＩ23・ＳＫＦ19・25などがあげられる。Ⅲ群土器の時期の遺構は確認されていない。

縄文時代の小出遺跡は、早期から前期の前半にその中心があることがわかる。この時期には前述の土器に伴って、石鏃・縦長の石匙・掻器・削器・ピエス・エスキーユなどの剝片石器、くぼみ石を中心とする礫石器などが存在する。こうした豊富な遺物群に比べて遺構は土坑とフラスコ状土坑が各1基確認されているだけである。これらから当該期の本遺跡は居住域ではなく、生産性のある遺跡であったことが窺える。

第3節　平安時代

平安時代の遺構としては、5基の火葬墓が調査された。確認地域は、台地西縁に沿った地域で、ほぼ南北に連なっている。火葬墓の特徴としては、骨蔵器として須恵器、土師器のそれぞれのくみあわせによるものでり、須恵器と土師器が一緒に使用されることがないこと、墓坑内は炭で覆われていることである。

県内におけるこうした火葬墓の分布は、庄内昭男氏によってまとめられている。それによると、県内では7遺跡例あり、9世紀前半～10世紀前半期に位置付けられており、小出Ⅰ遺跡の火葬墓は骨蔵器に使用される須恵器・土師器などから10世紀前半と考えられるものである。

第4節　中　　世

中世の遺構としては、ＳＤ14がある。径5.2mの環状の溝状の遺構で、環状の中央部にはなんらの施設も確認できなかったが、出土した中世陶器には経筒の外容器があり、この遺構が中世の墳墓であったことがわかる。三辻利一氏の分析によれば、経筒は遺跡より、約1.5ｋｍ西側に位置する大畑窯跡の産出であることが判明している。吉岡康暢氏によれば大畑窯跡は須恵器系中世陶器(珠洲系中世陶器)の窯跡であり、13世紀に位置付けられている。県内の中世墳墓については、これまで調査例が多くないが、河辺郡河辺町の上祭沢遺跡の調査では、3基の墳墓が検出されている。県内における須恵器系中世陶器を使用する経塚との関連性のあるものは、20余例を数え、県内中世の葬制が相当明らかになりつつある。

参考文献

八戸市教育委員会　『長七谷地遺跡発掘調査報告書－長七谷地２・７・８号遺跡－』
1980・1981（昭和55・56年）
青森県教育委員会　『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
1980（昭和55年）
福島県相馬郡小高町教育委員会　『宮田貝塚－昭和48年７月発掘調査報告－』
1975（昭和50年）
庄内昭男　「秋田県における古代・中世の火葬墓」　『秋田県立博物館研究報告第９号』
秋田県立博物館　1984（昭和59年）
吉岡康暢　「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」　『紀要』第14号　石川県立郷土資料館
1985（昭和60年）

南外村教育委員会　『大畑窯跡』1974（昭和49年）

秋田県教育委員会　『高速交通関連整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
－上祭沢遺跡・駒坂台Ⅰ遺跡・駒坂台Ⅱ遺跡』　秋田県文化財調査報告書第195集
1990（平成2年）

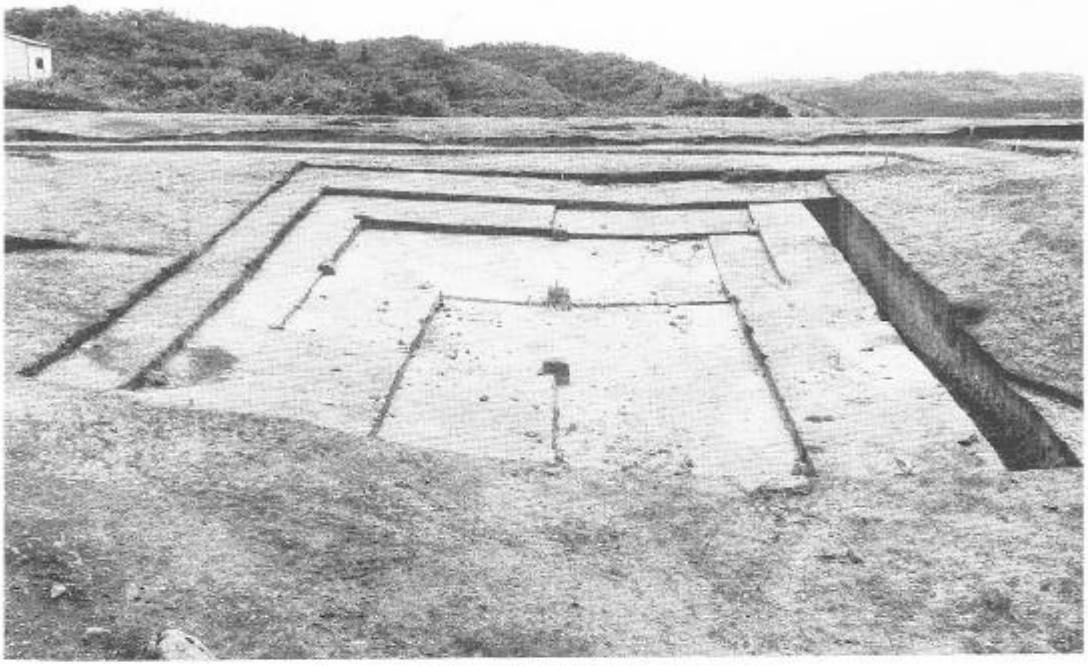
遺跡航空写真

1　**調査前**（北西▷南東）

2　**調査前**（北▷南）（手前が小出Ⅱ遺跡）

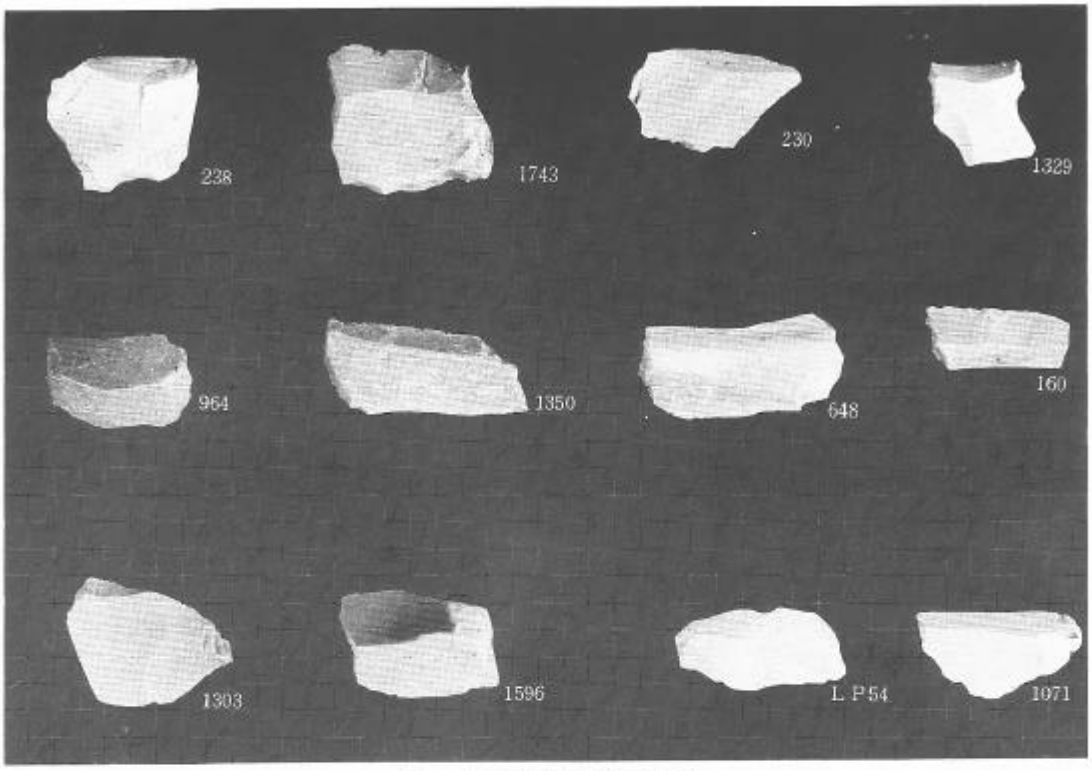
1　**調査終了後**（北▷南）（手前が小出Ⅱ遺跡）

2　**調査終了後**（南東▷北西）（プレハブが小出Ⅱ遺跡）

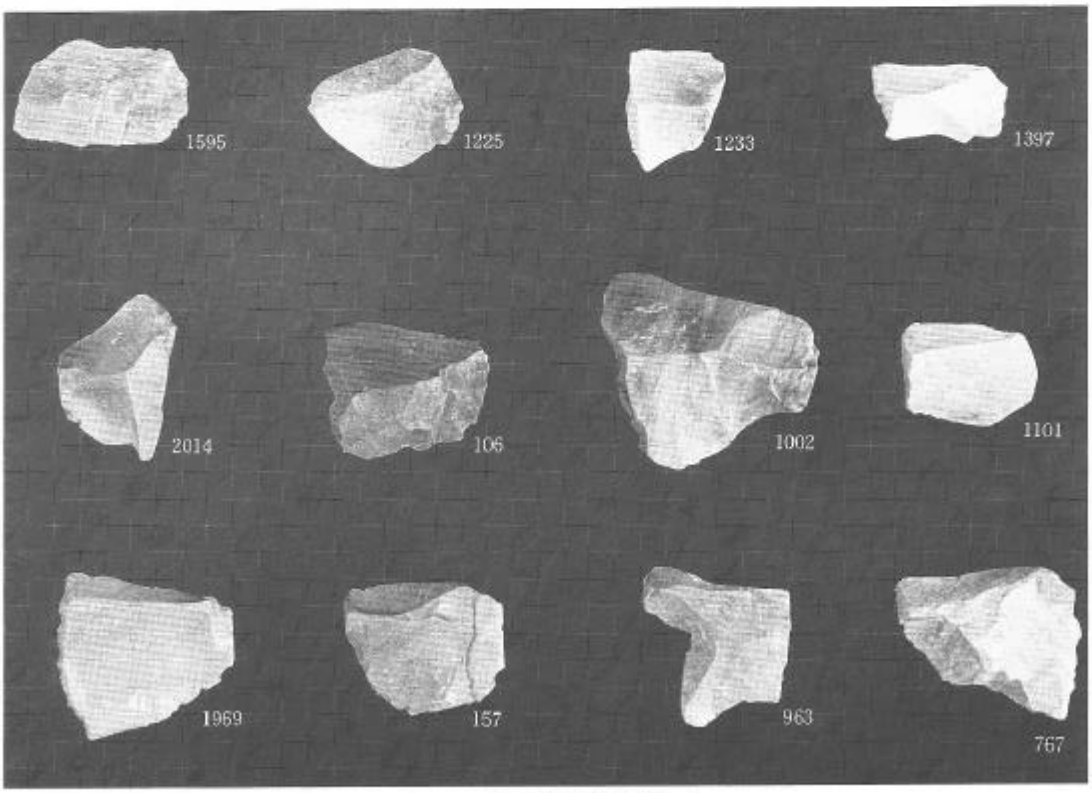


1　ＡＢ区旧石器調査終了後（北▷南）

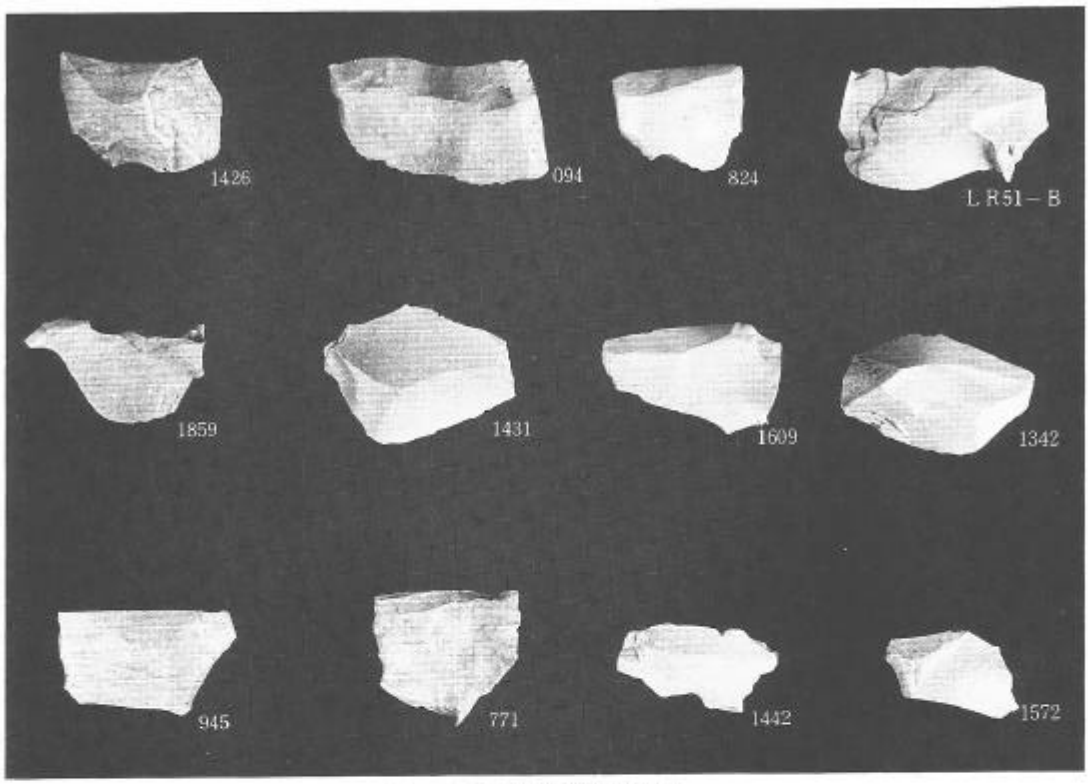
2　ＡＢ区旧石器出土状況（東▷西）



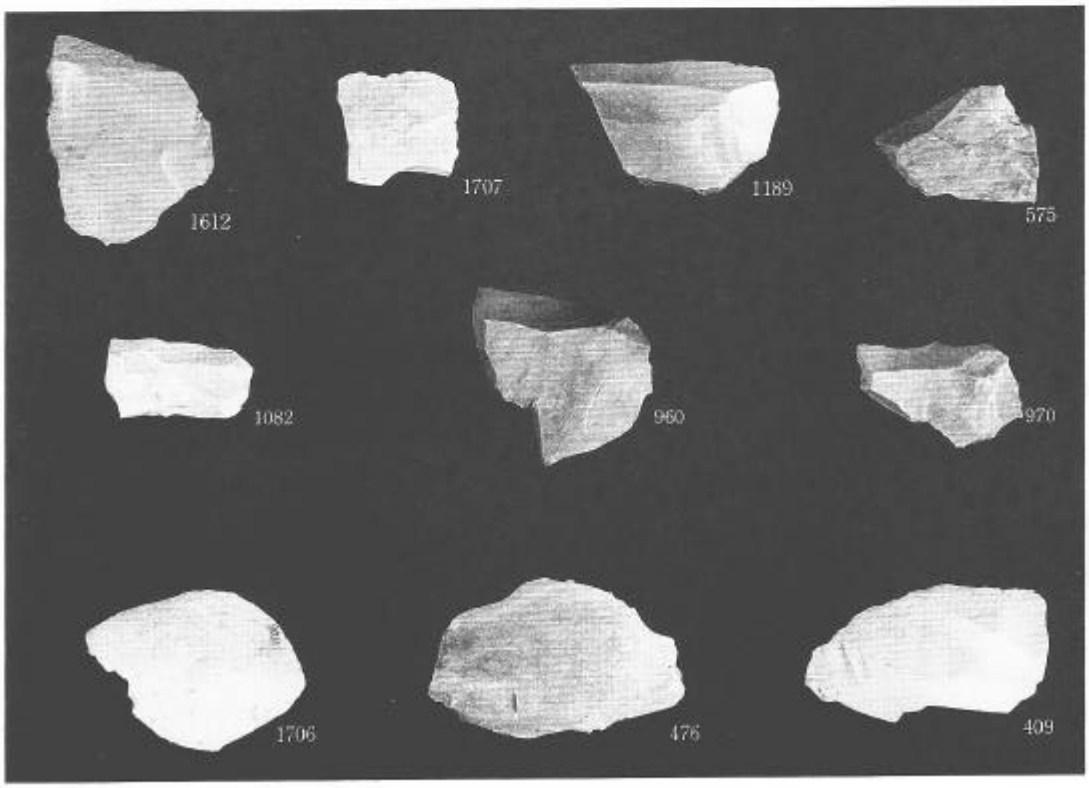
1　ＡＢ区台形様石器(1)



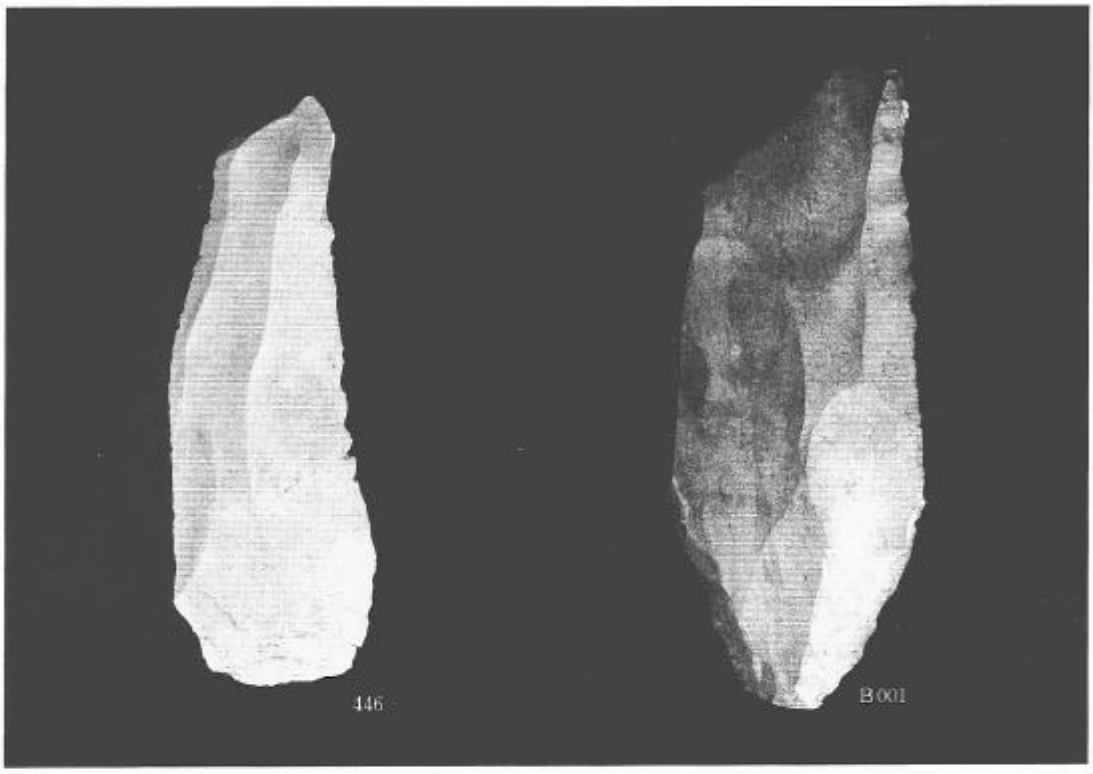
2　ＡＢ区台形様石器(2)



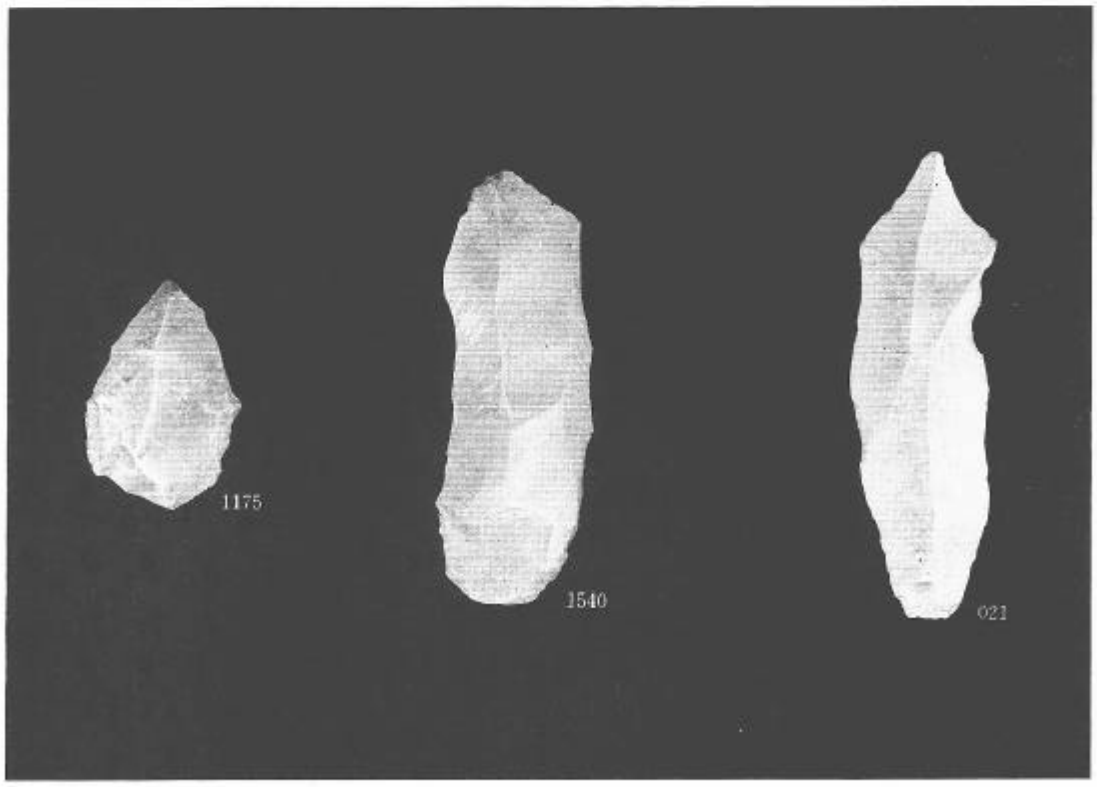
1　ＡＢ区台形様石器(3)



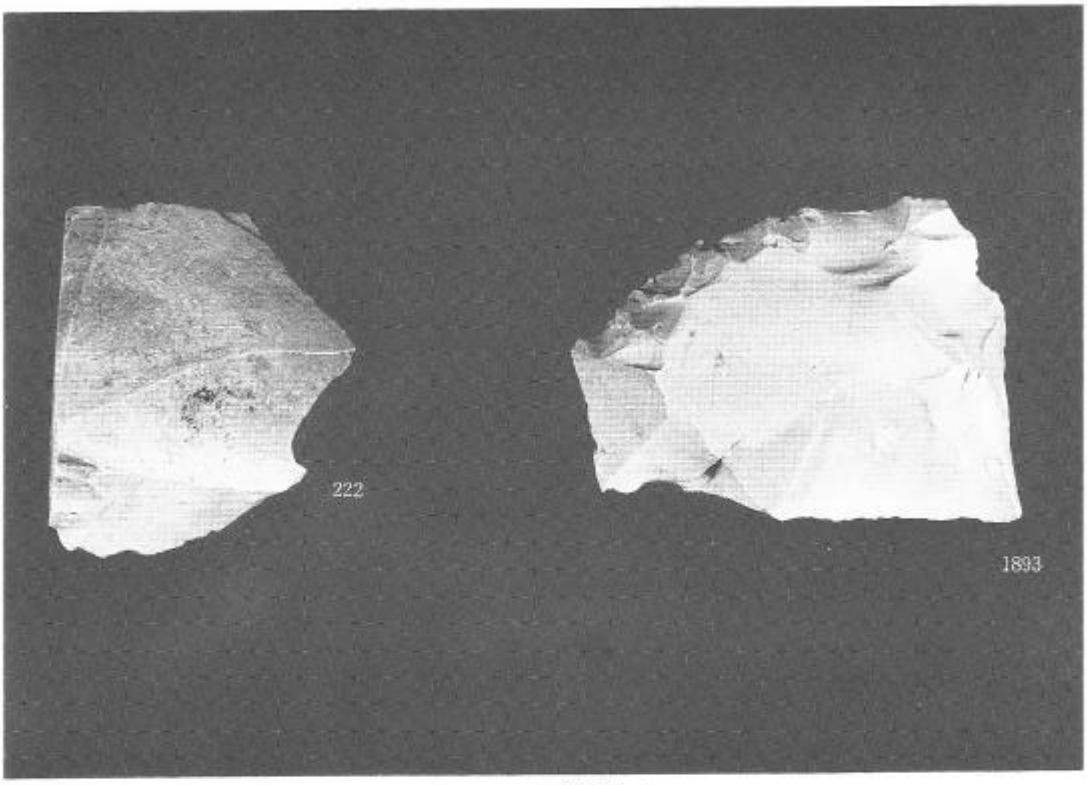
2　ＡＢ区台形様石器(4)



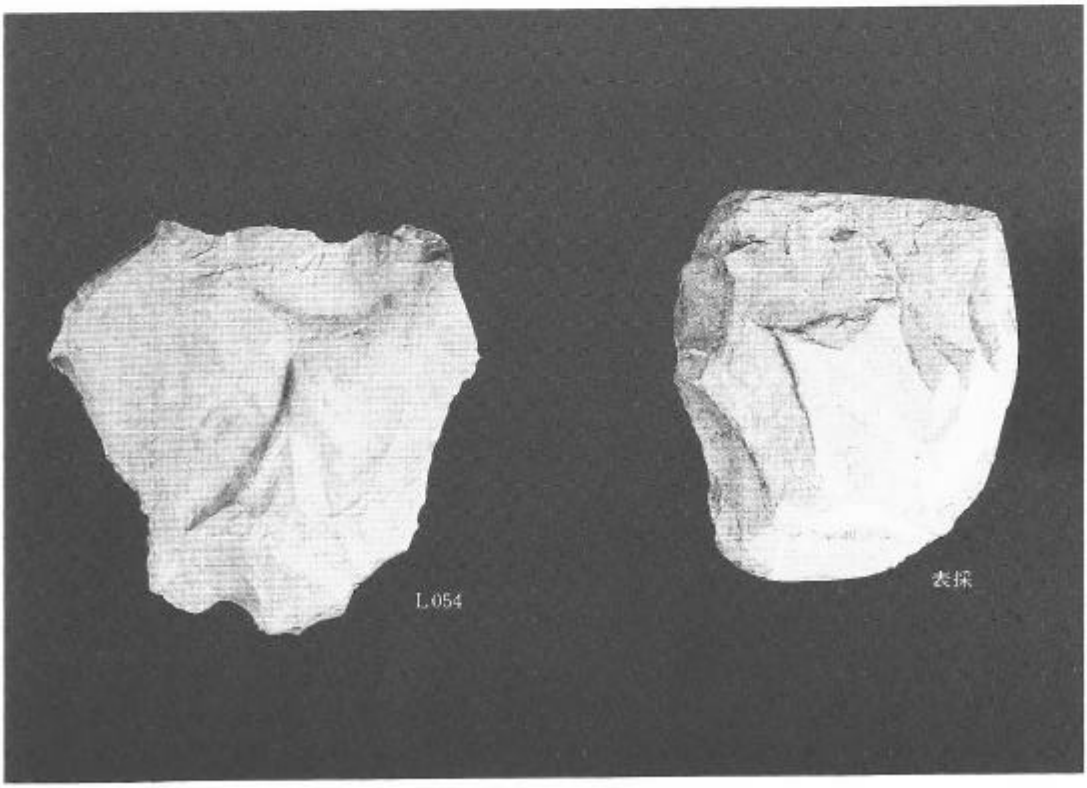
1　ＡＢ区ナイフ形石器(1)



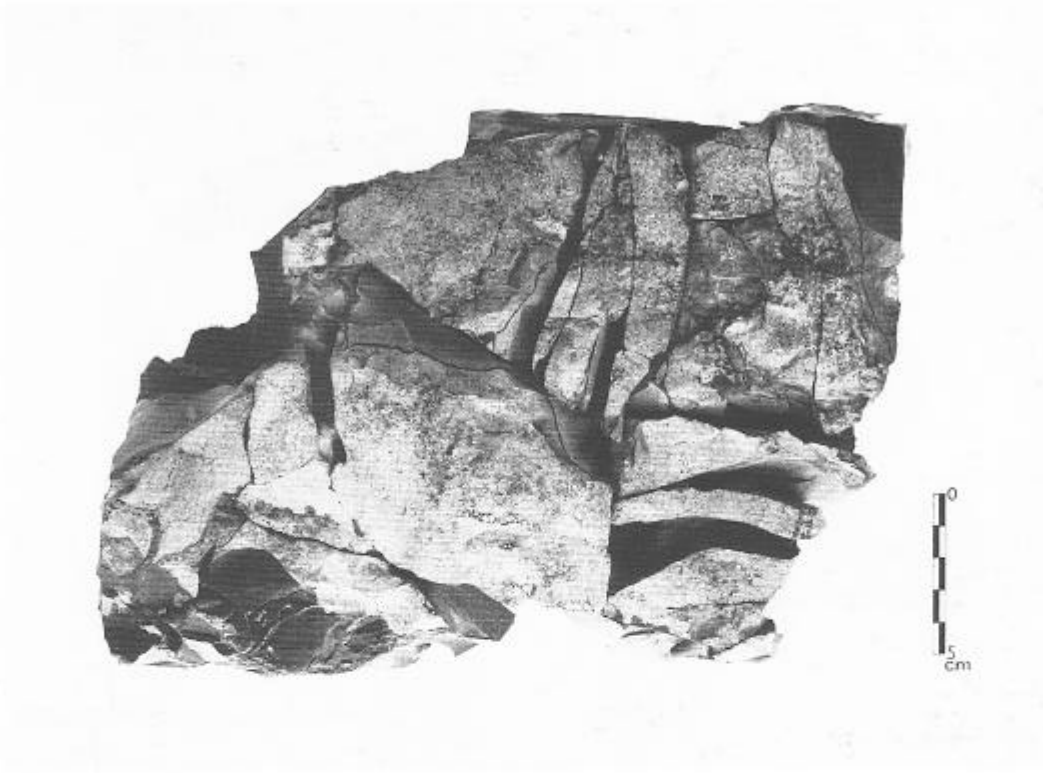
2　ＡＢ区ナイフ形石器(2)



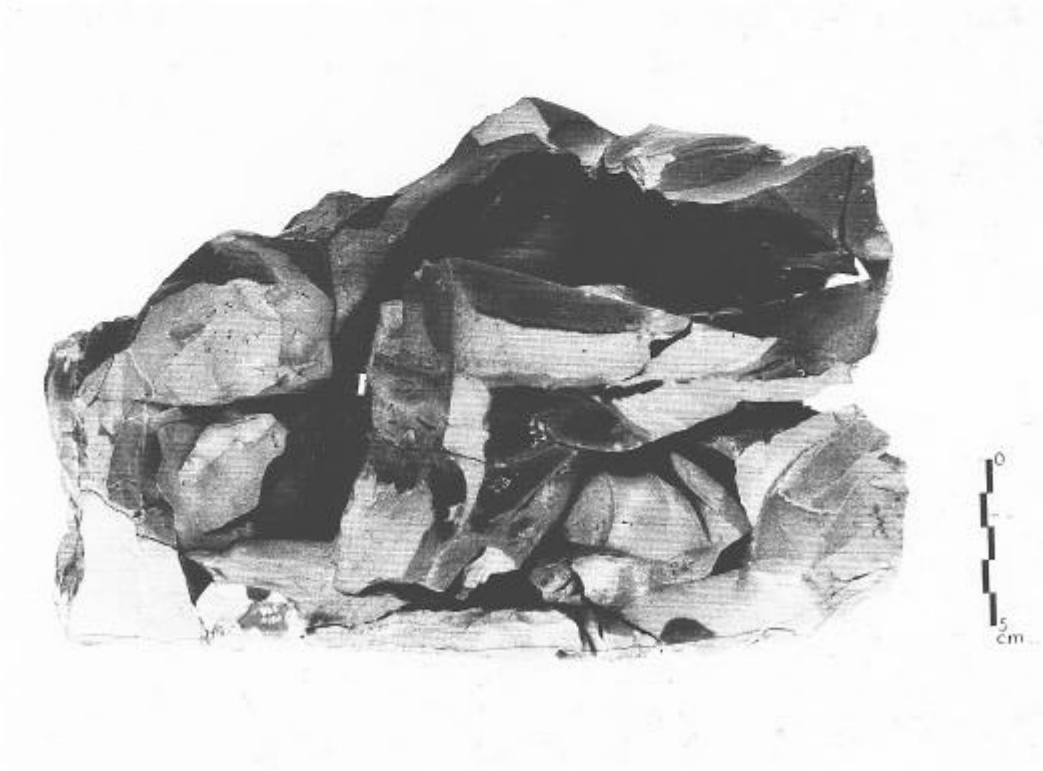
1　ＡＢ区掻器(1)



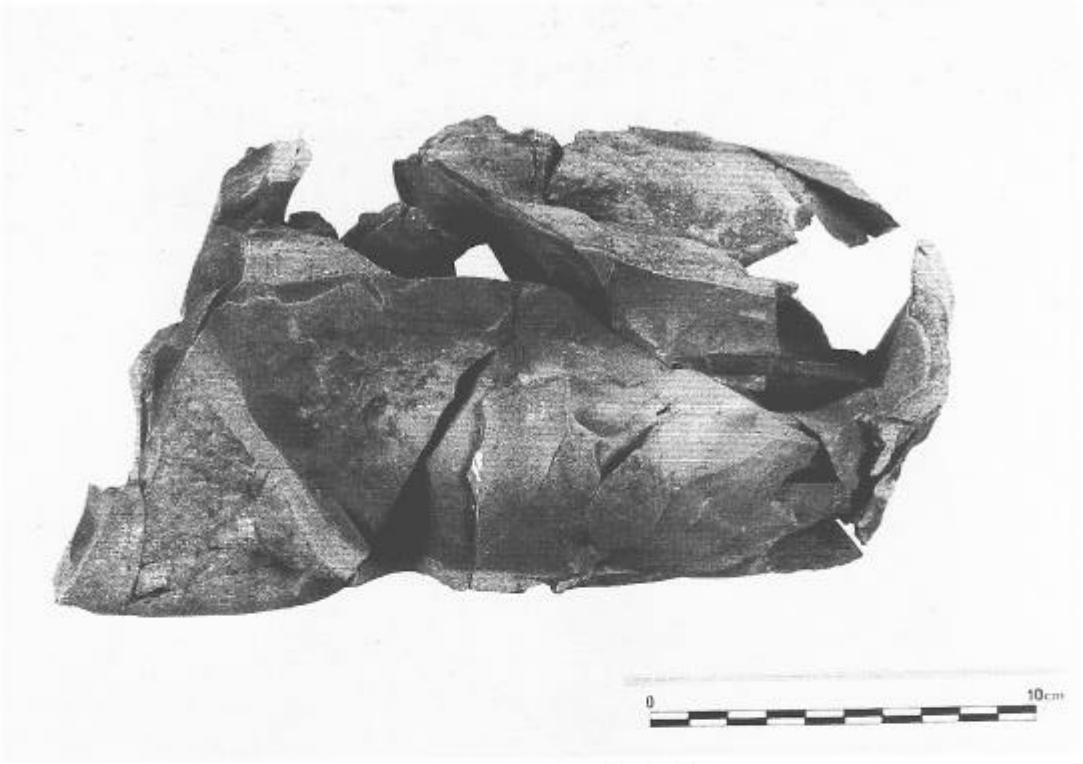
2　ＡＢ区掻器(2)・局部磨製石斧



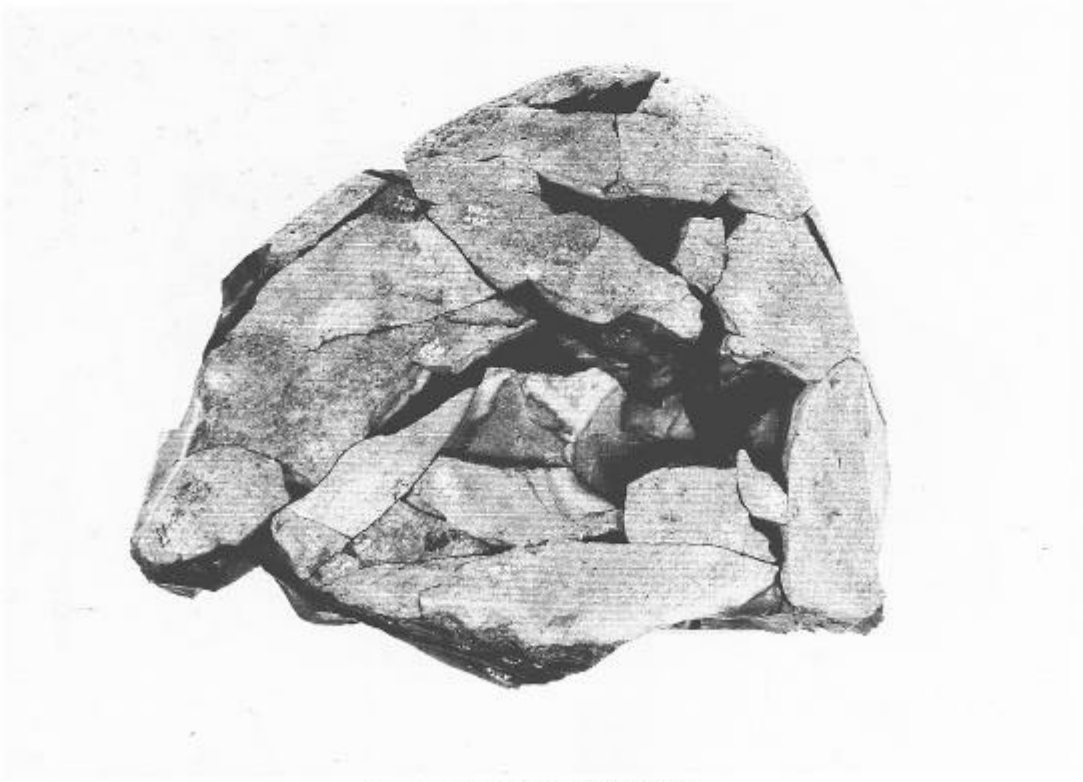
1　ＡＢ区個体No.３接合資料



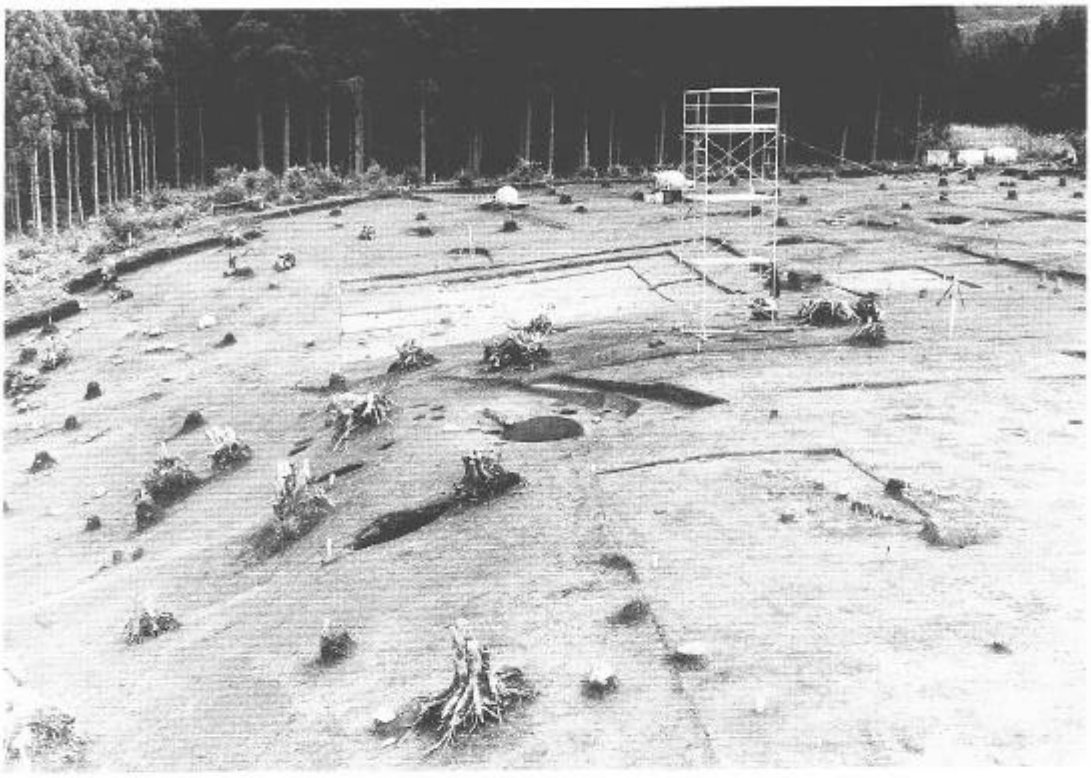
2　同　　上



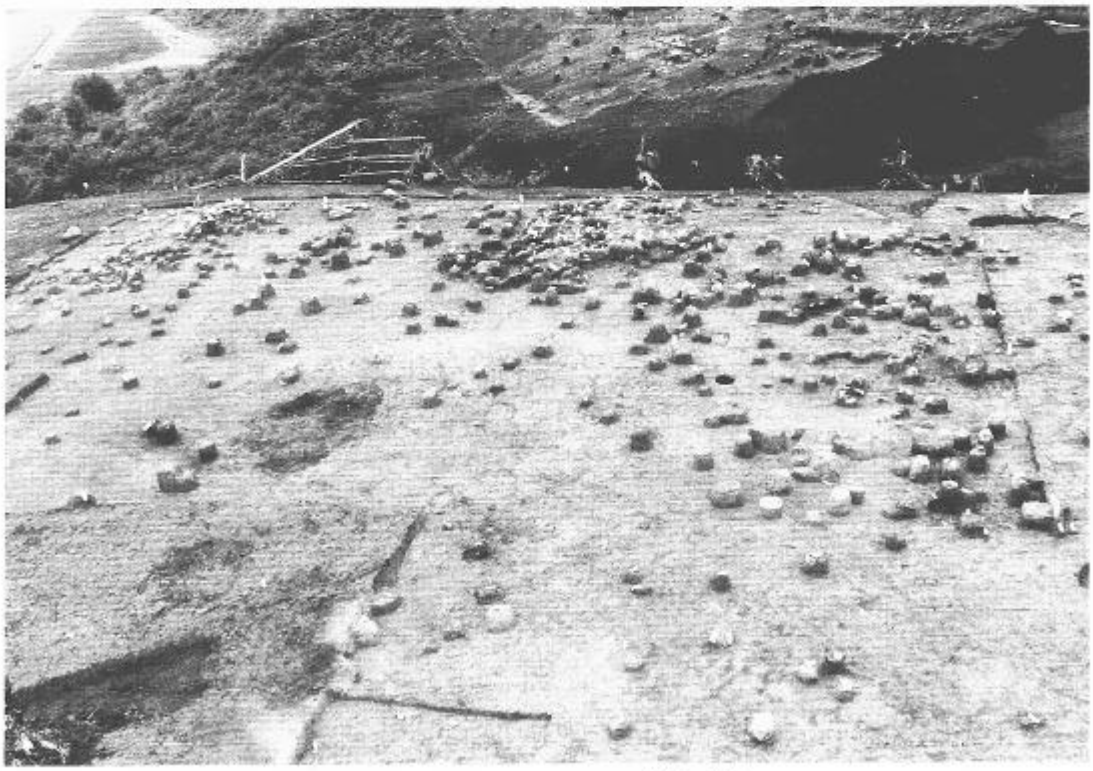
1　ＡＢ区個体№４接合資料



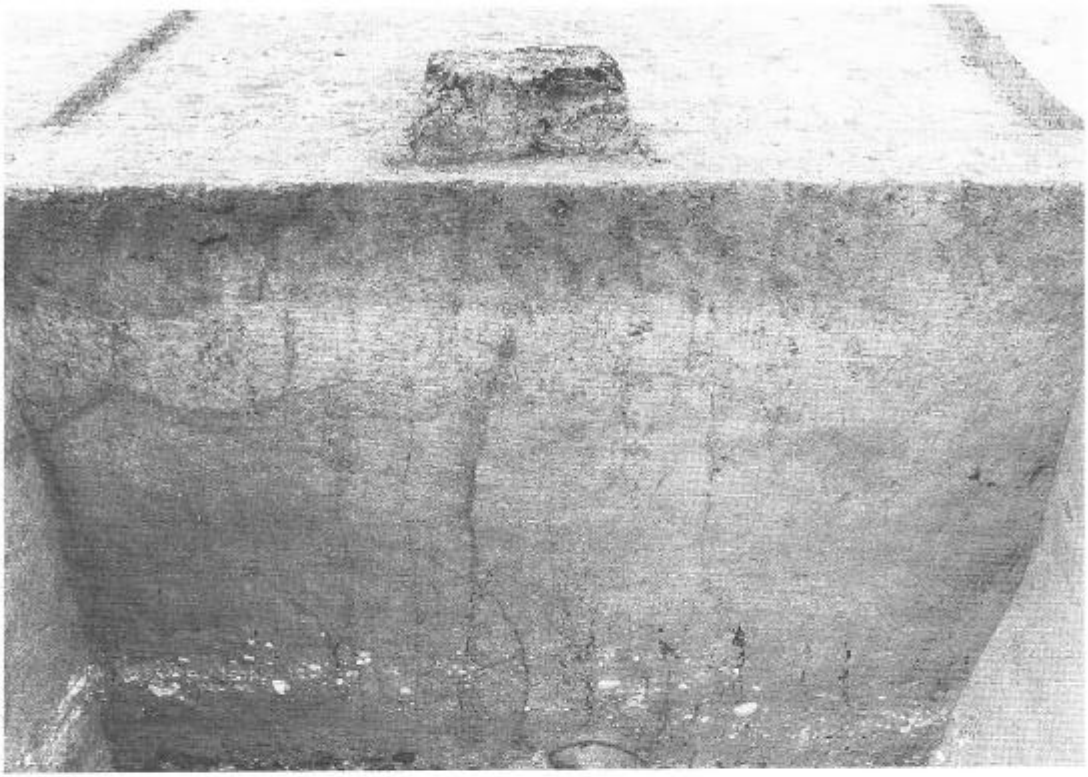
2　ＡＢ区個体№６接合資料



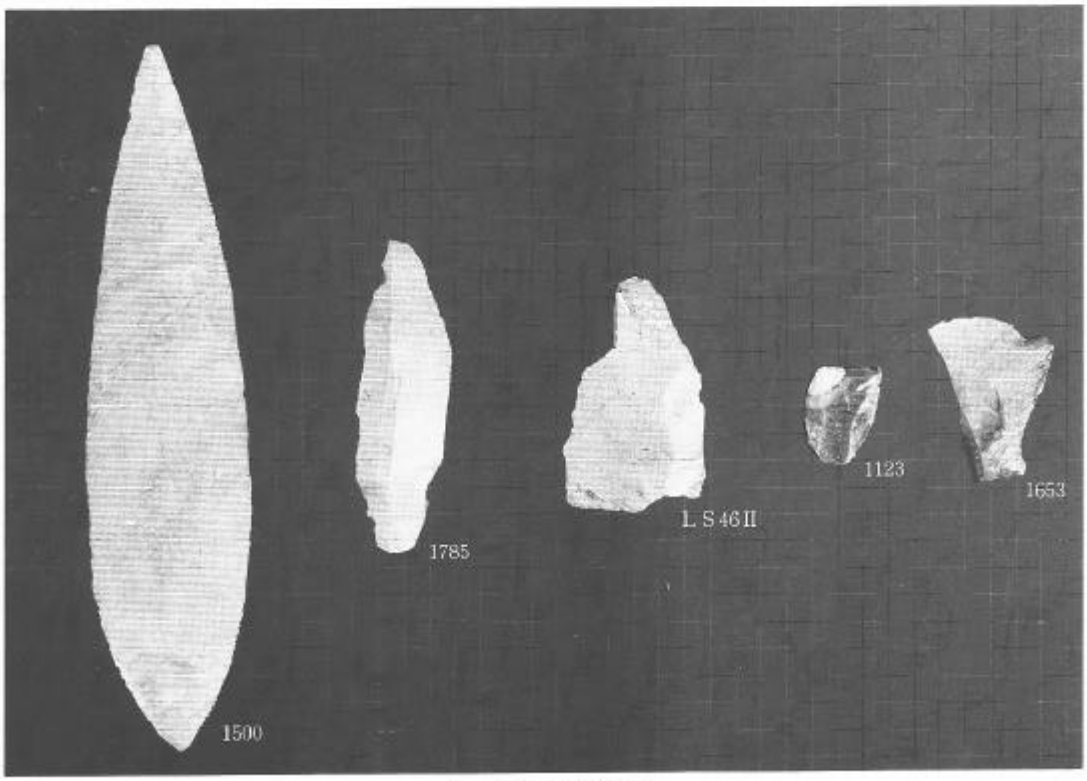
1　C区旧石器出土状況(1)（西▷東）



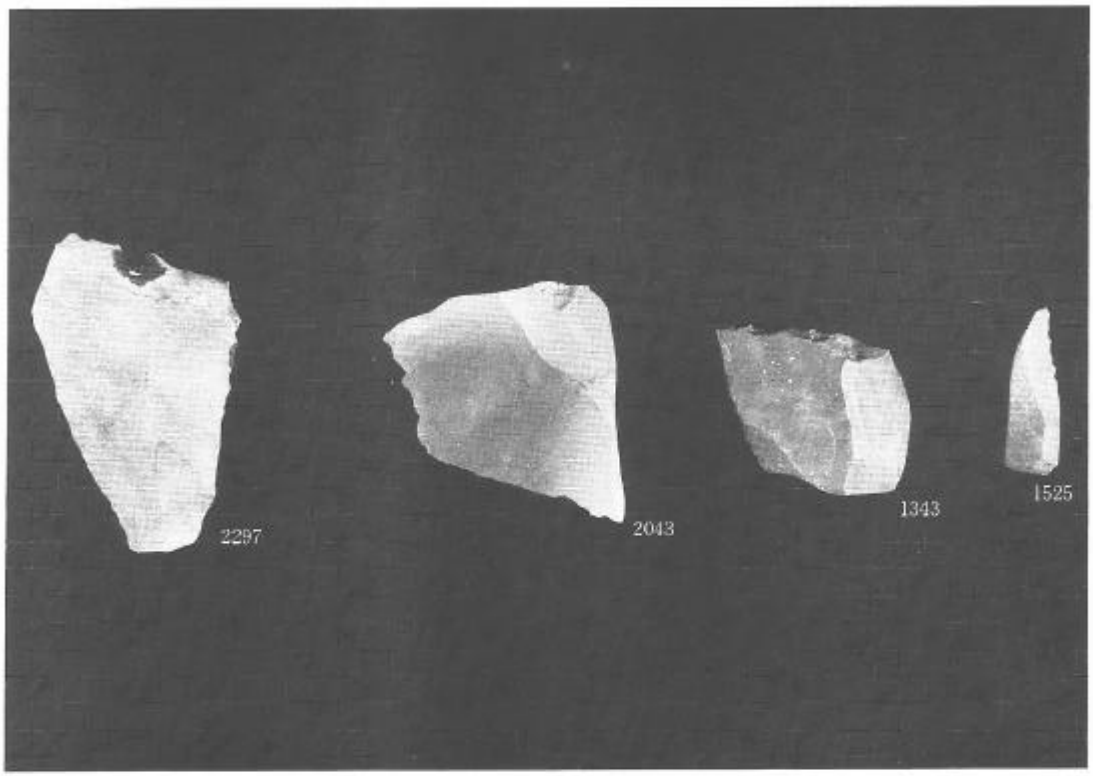
2　C区旧石器出土状況(2)（南▷北）



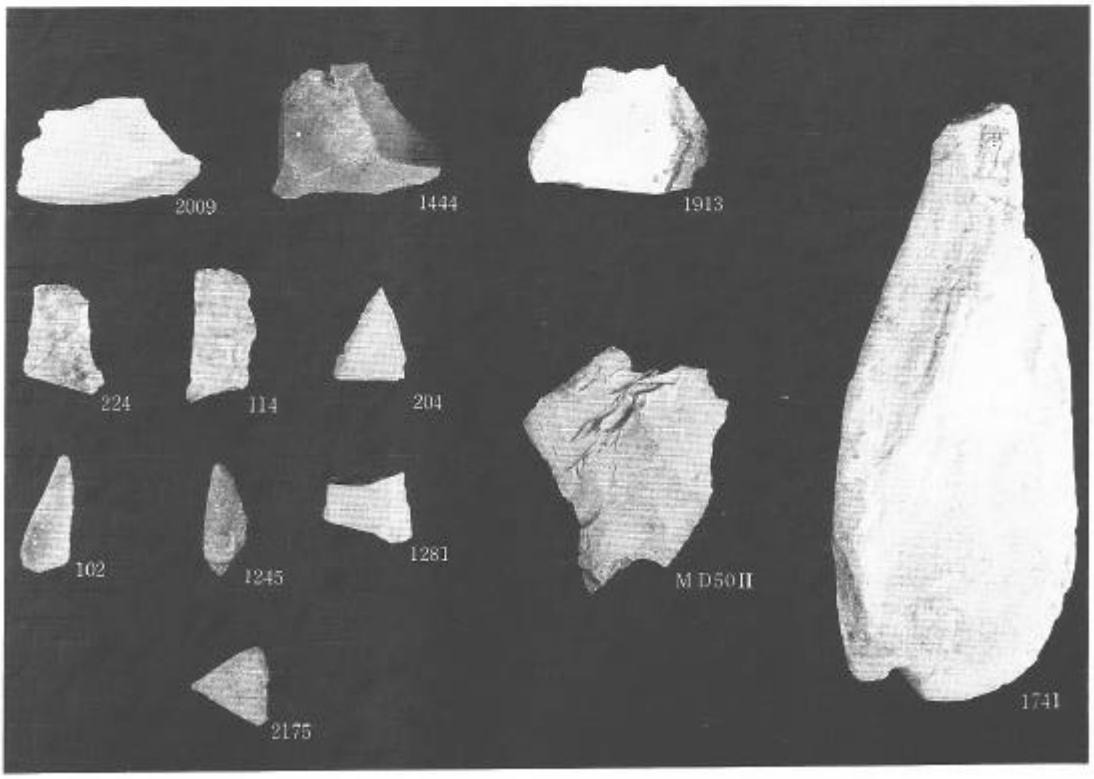
1　C区土層断面



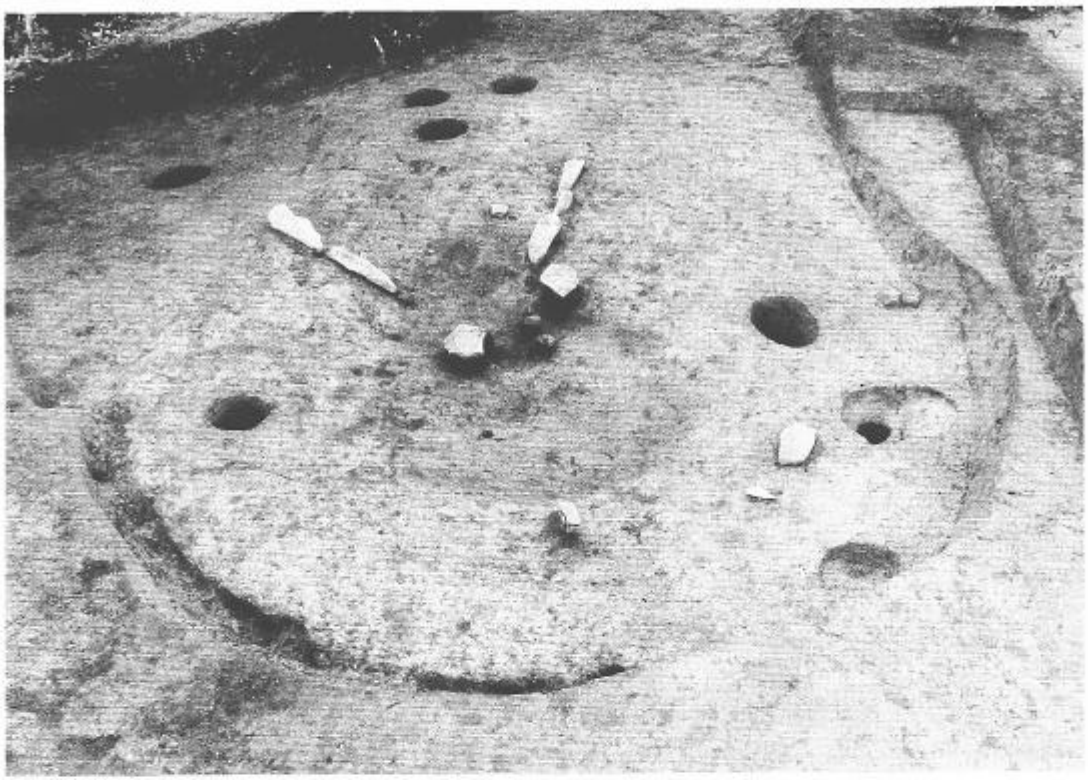
2　C区旧石器(1)



1　C区旧石器(2)

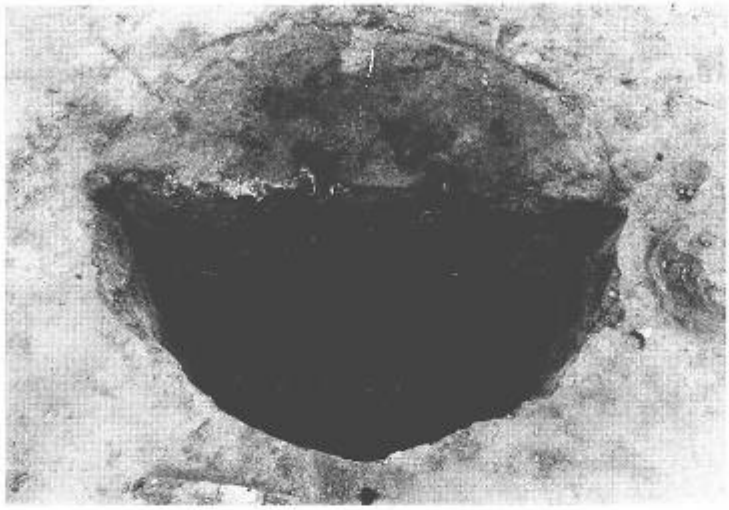


2　C区旧石器(3)

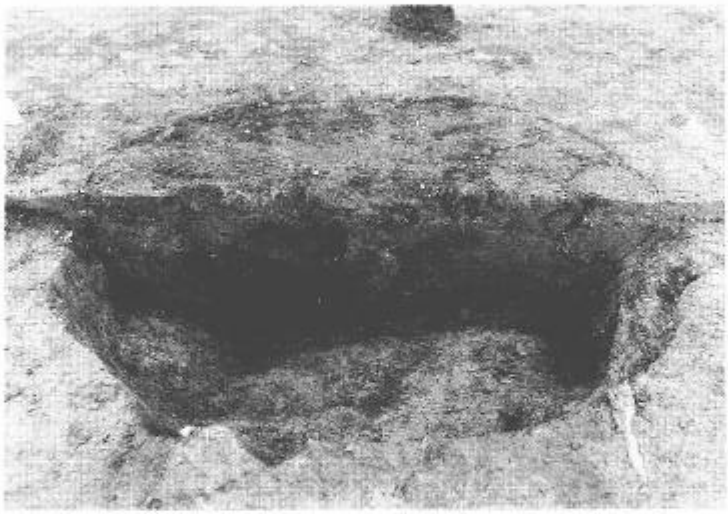


1　竪穴住居跡ＳＩ23（西▷東）

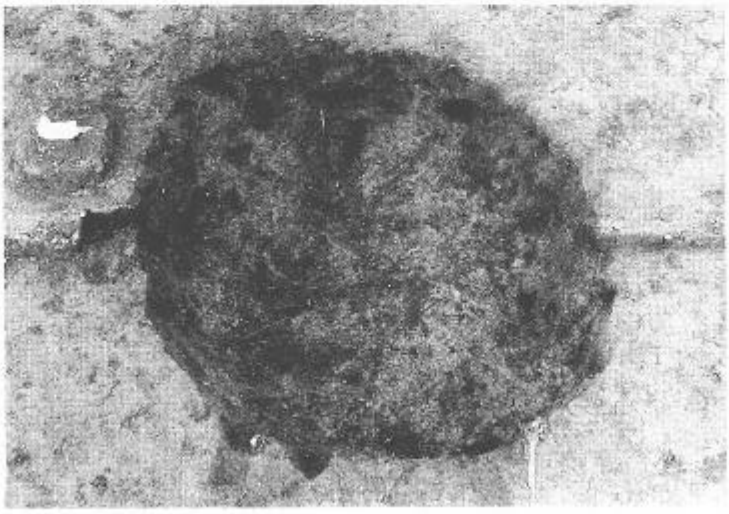
2　竪穴住居跡ＳＩ23とフラスコ状土坑ＳＫＦ30（西南▷北東）



1　土坑ＳＫ35土層断面（西▷東）

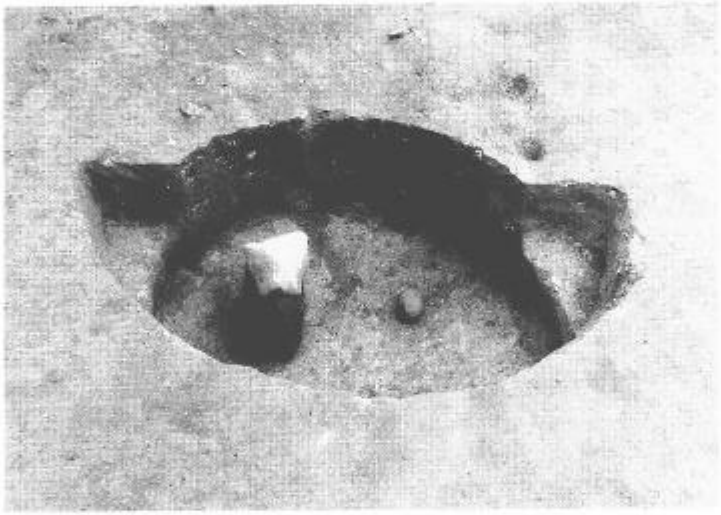


2　土坑ＳＫ37土層断面（東▷西）

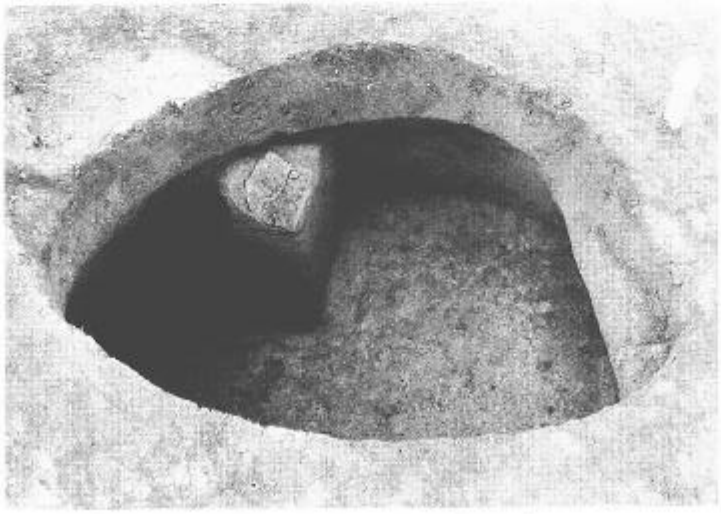


3　土坑ＳＫ37（東▷西）

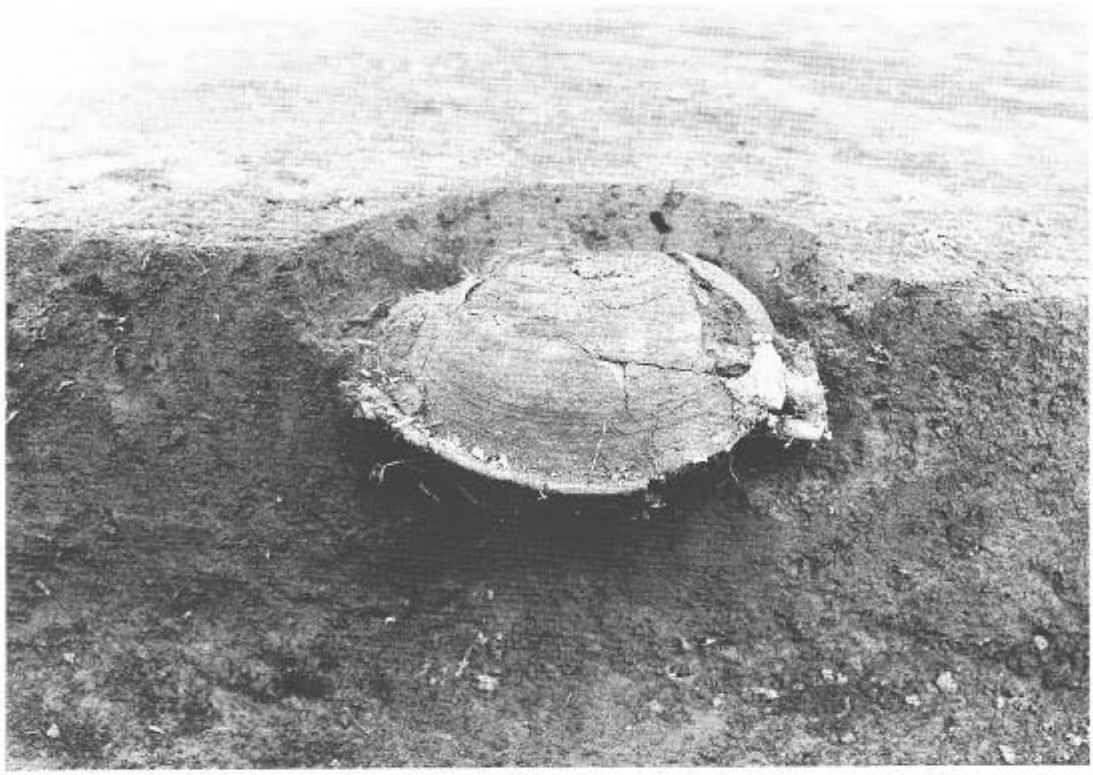
1　フラスコ状土坑ＳＫＦ19土層断面（西▷東）



2　フラスコ状土坑ＳＫＦ24（西▷東）

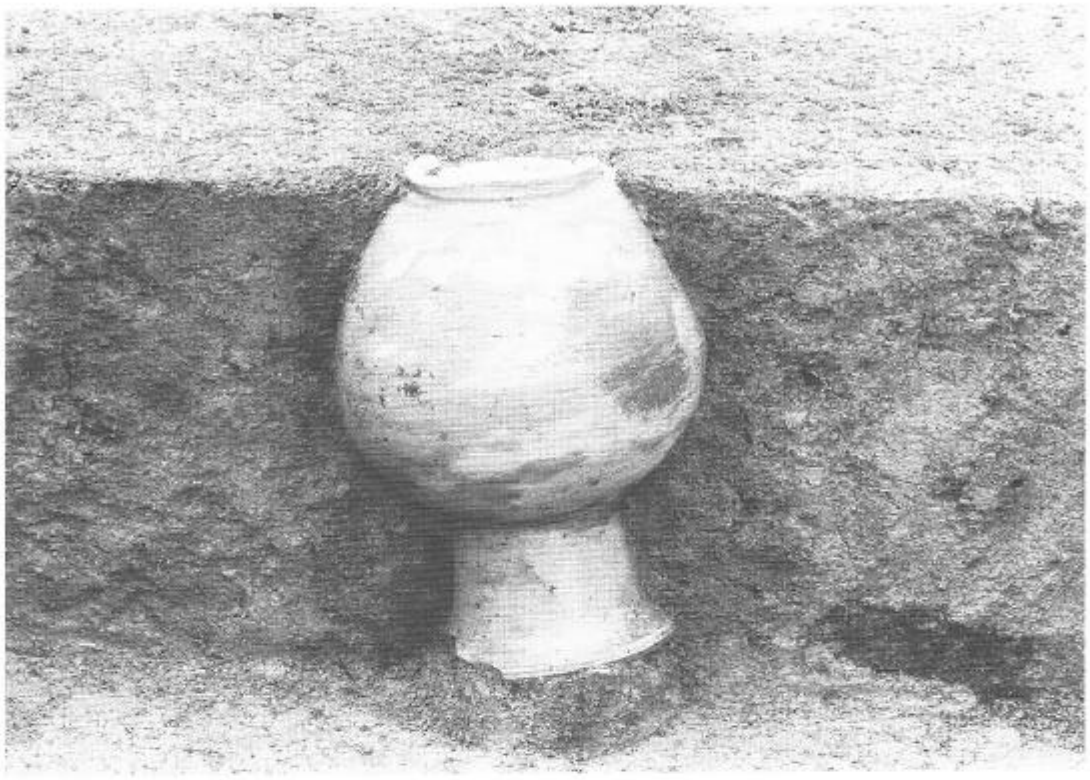


3　フラスコ状土坑ＳＫＦ25（東▷西）

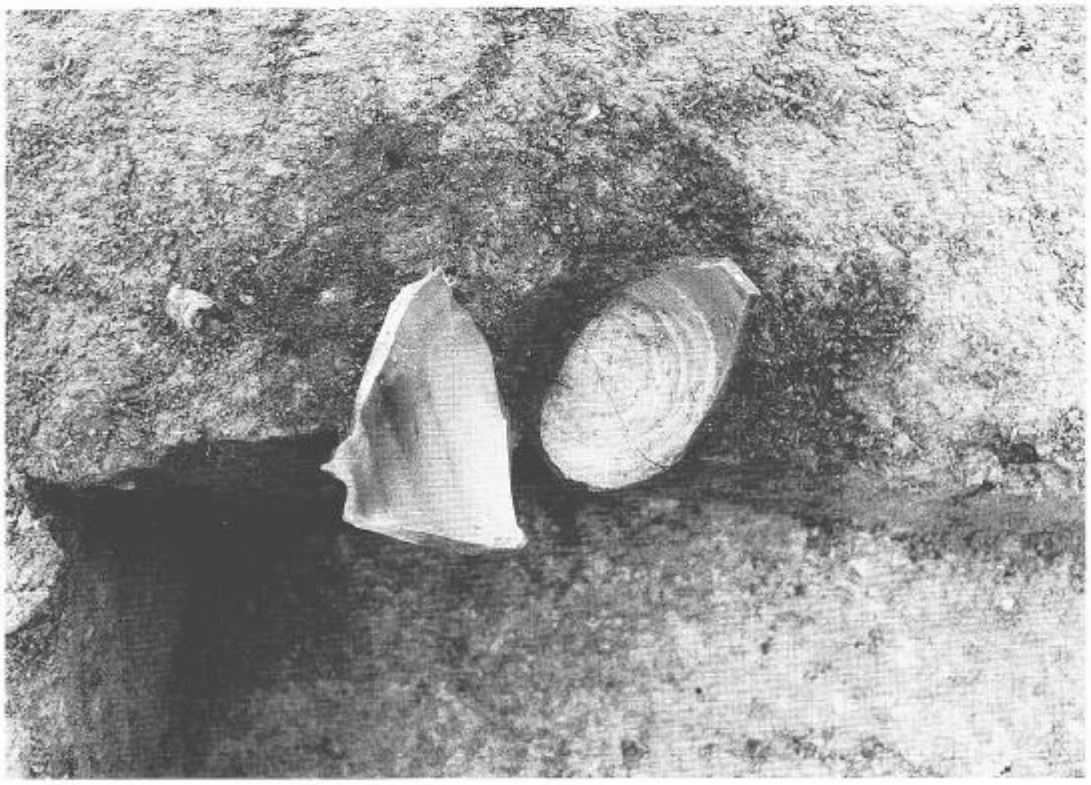


1　火葬墓ＳＲ05（西▷東）

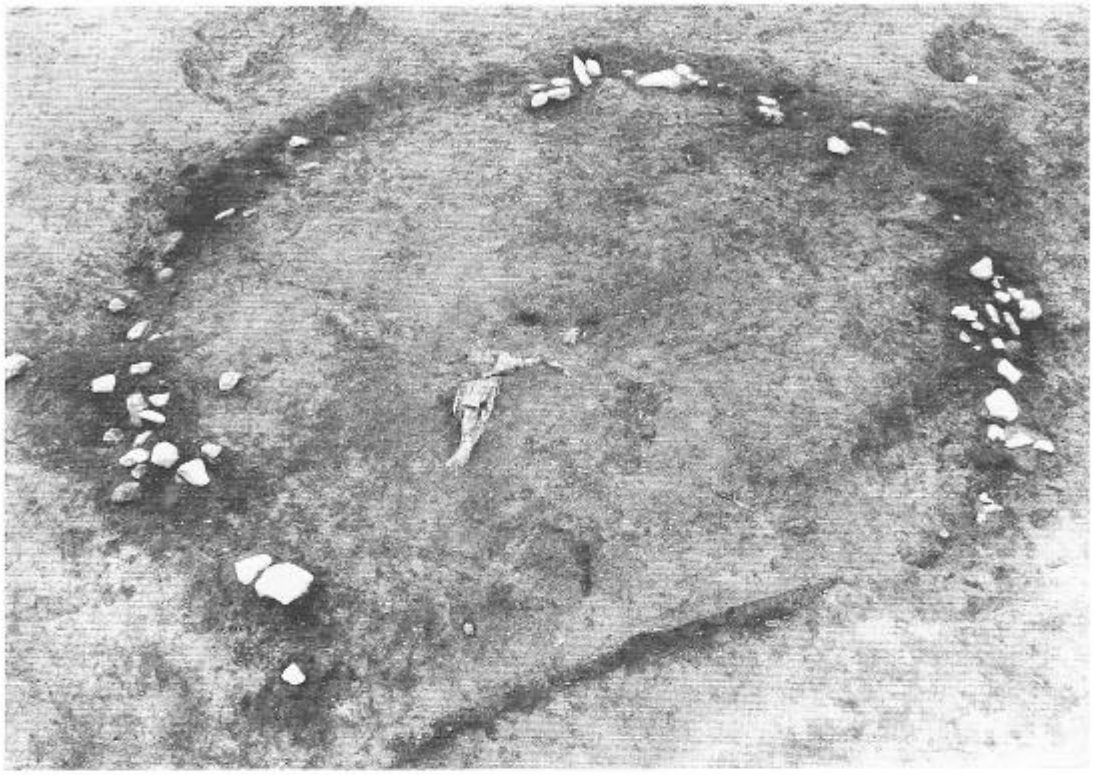
2　火葬墓ＳＲ06（東▷西）



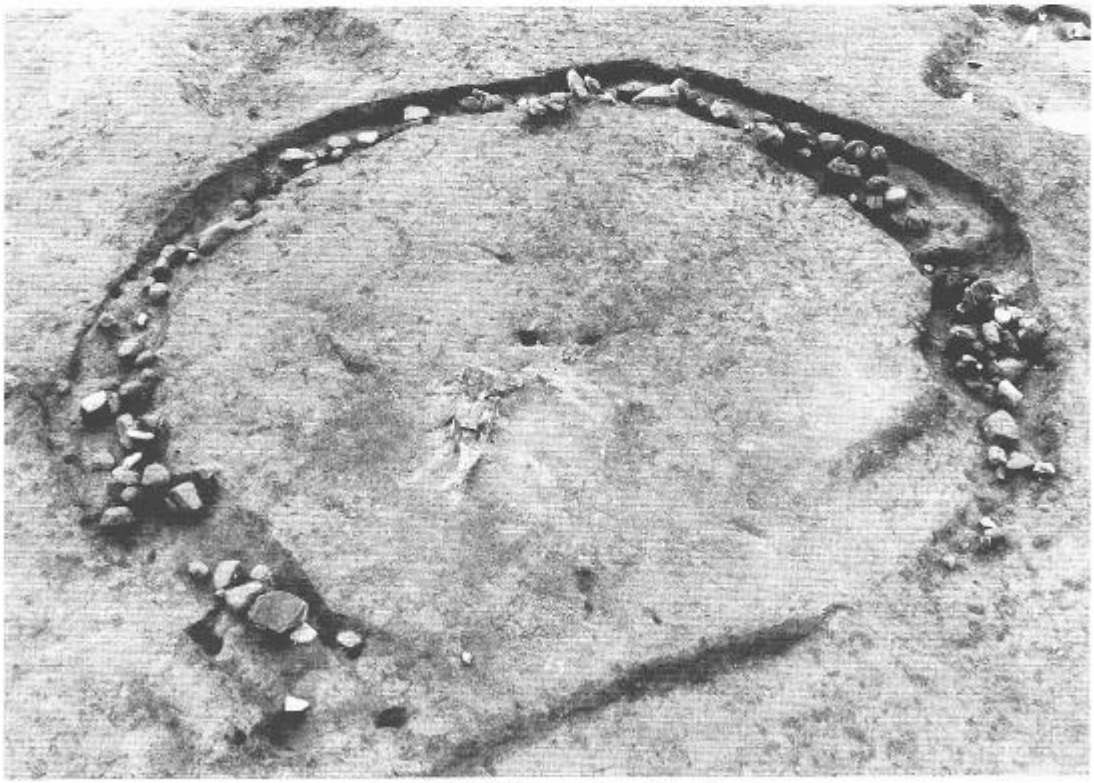
1　火葬墓ＳＲ10（北▷南）



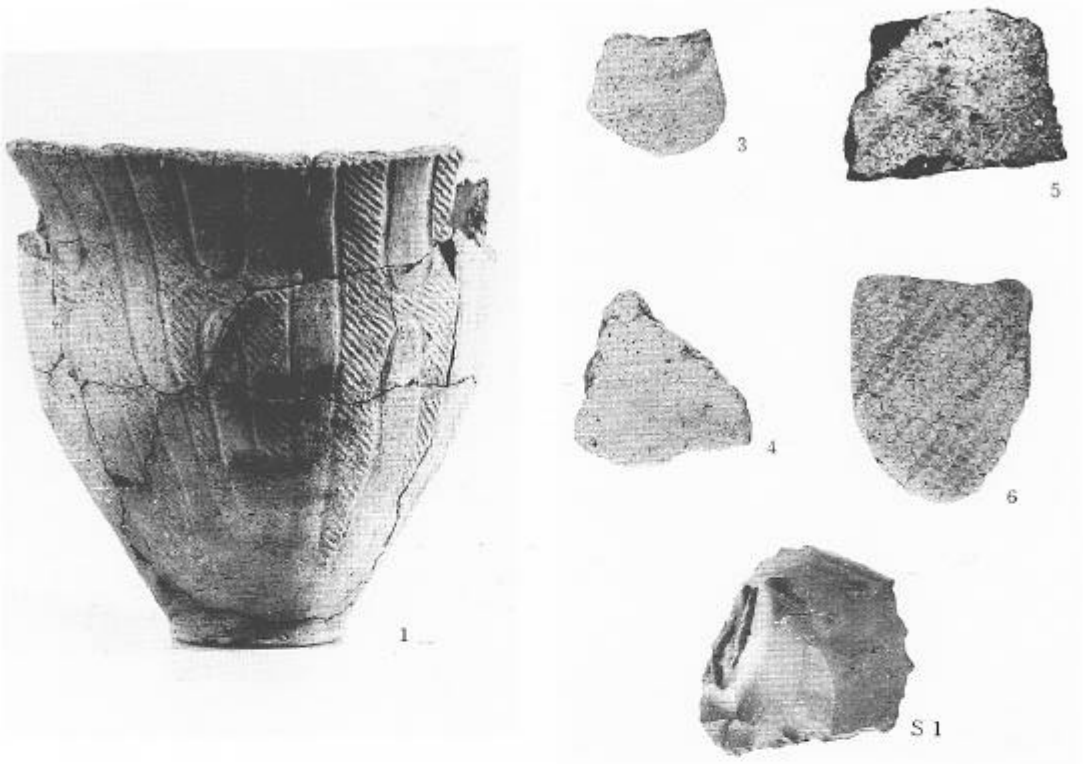
2　火葬墓ＳＲ33（真上）



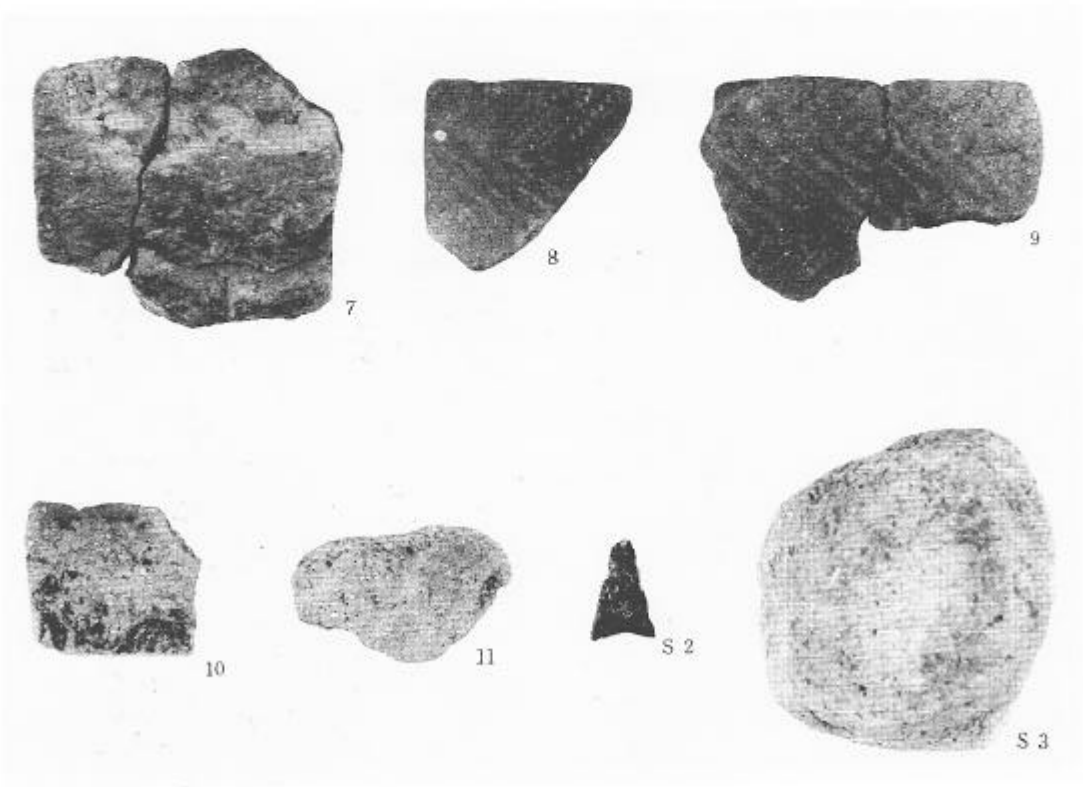
1　溝状遺構ＳＤ14確認状況（東▷西）



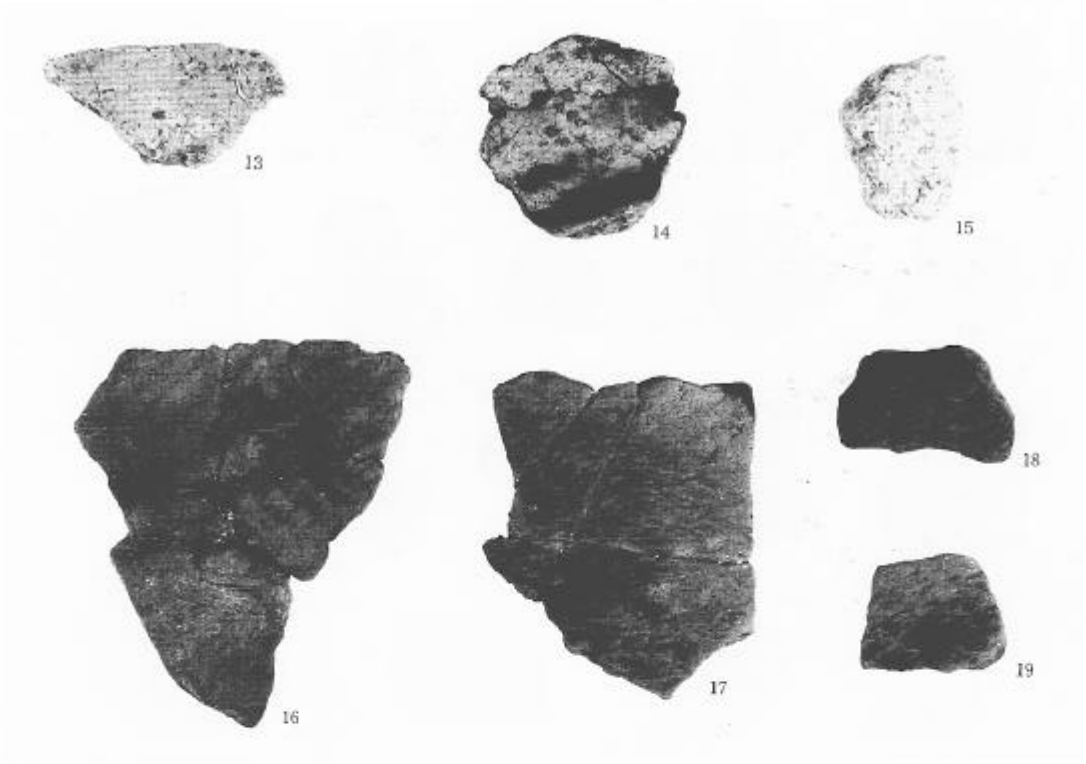
2　溝状遺構ＳＤ14（東▷西）



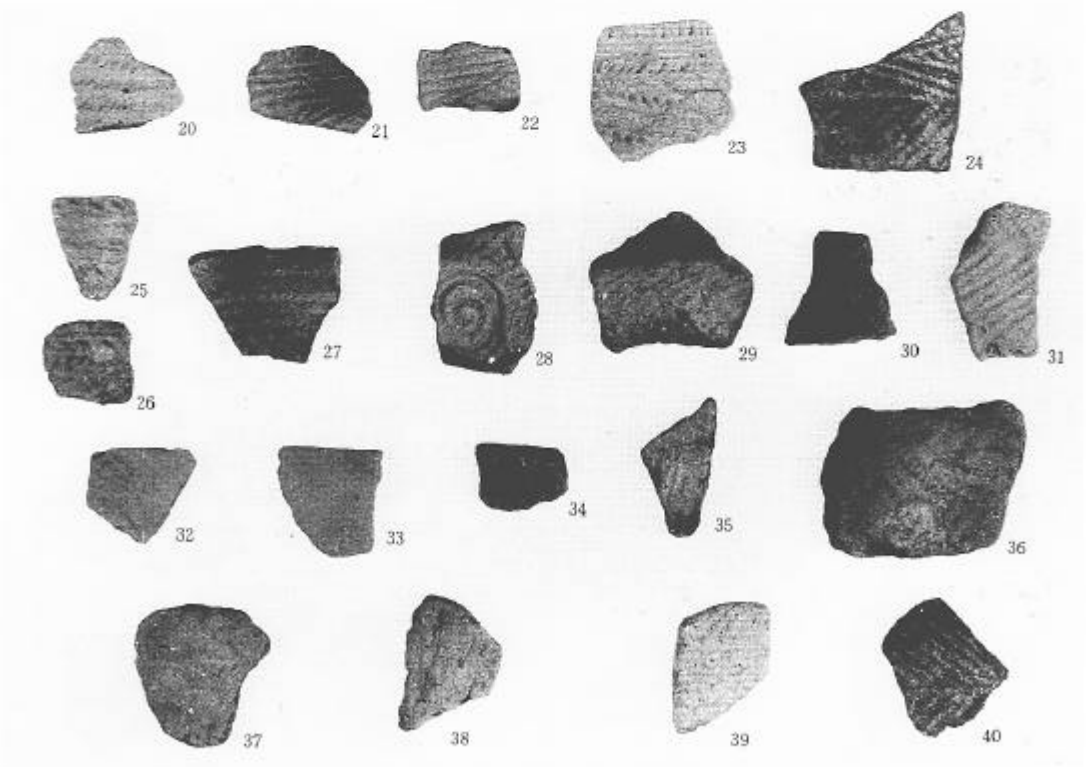
1　竪穴住居跡S I23出土遺物



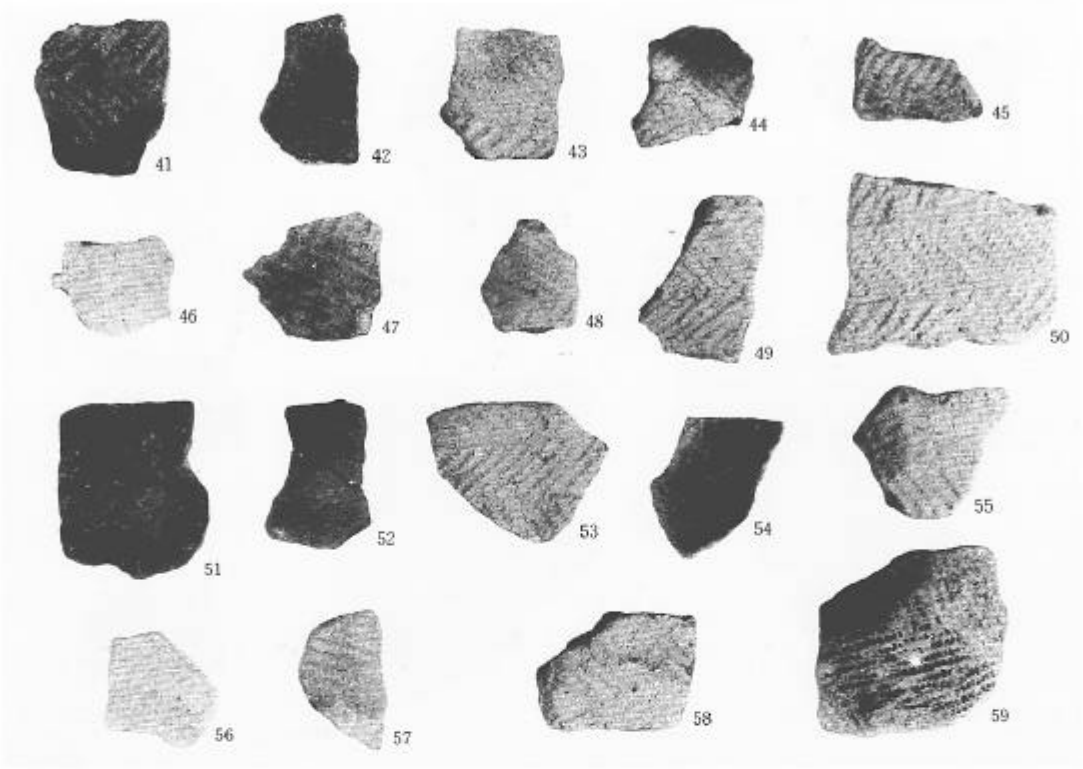
2　土坑S K04・S K24出土遺物



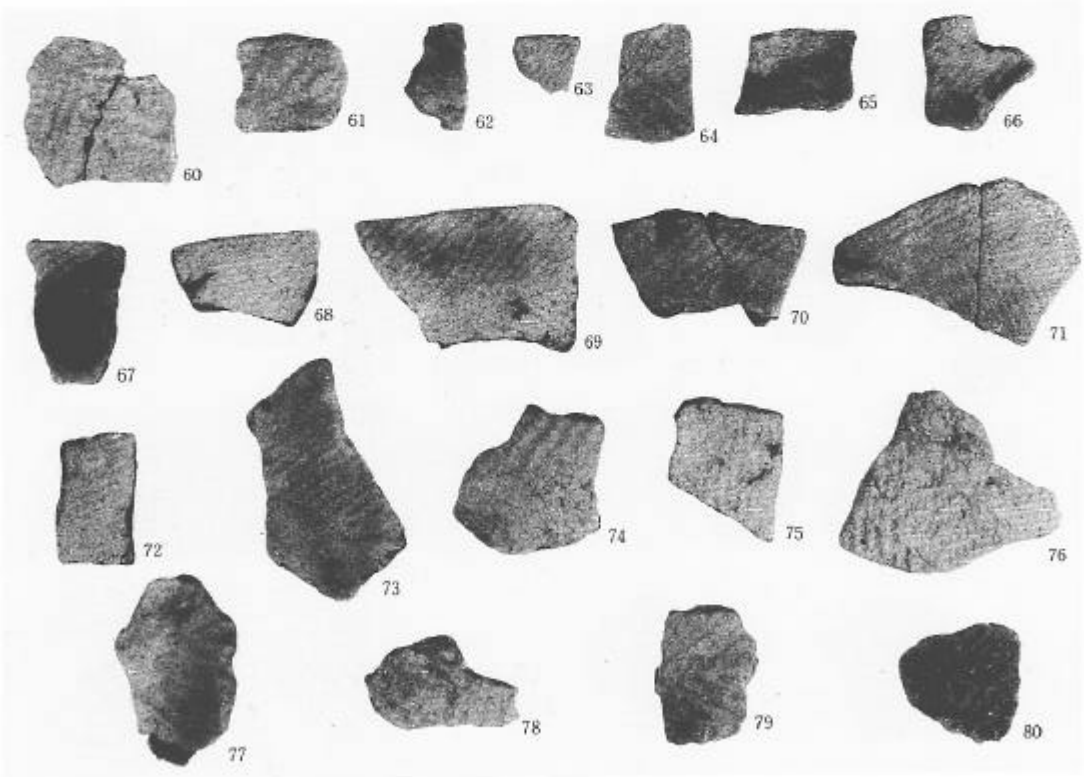
1　フラスコ状土坑出土遺物



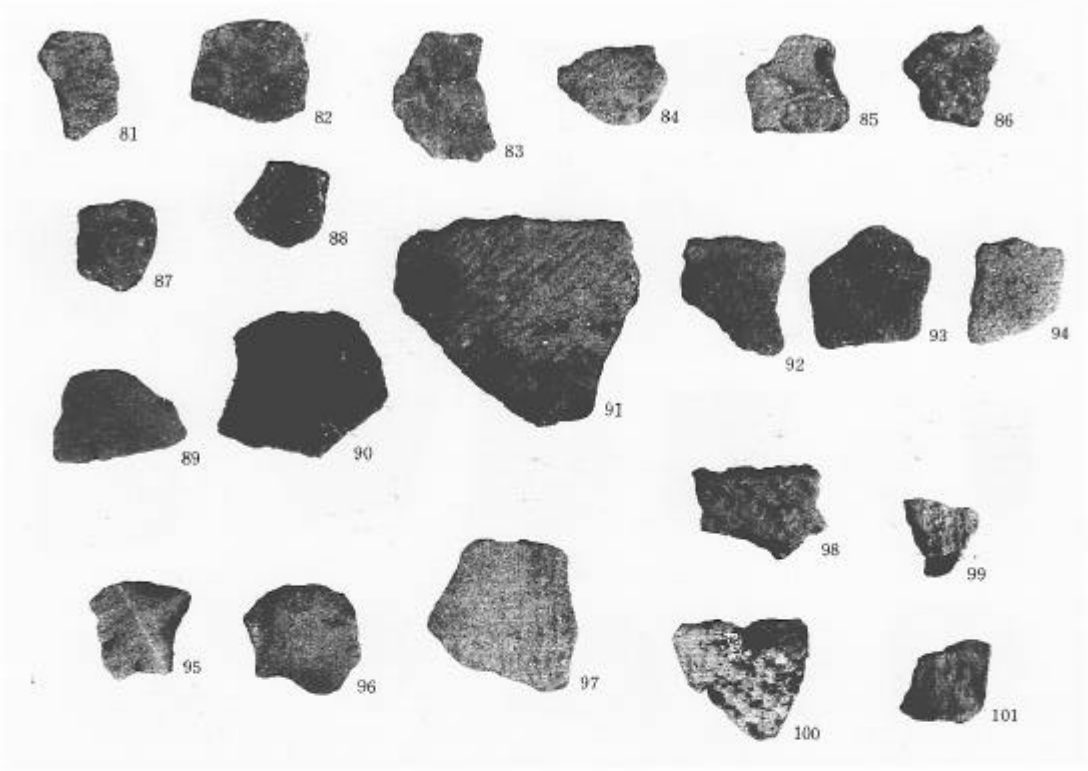
2　遺構外出土土器(1)



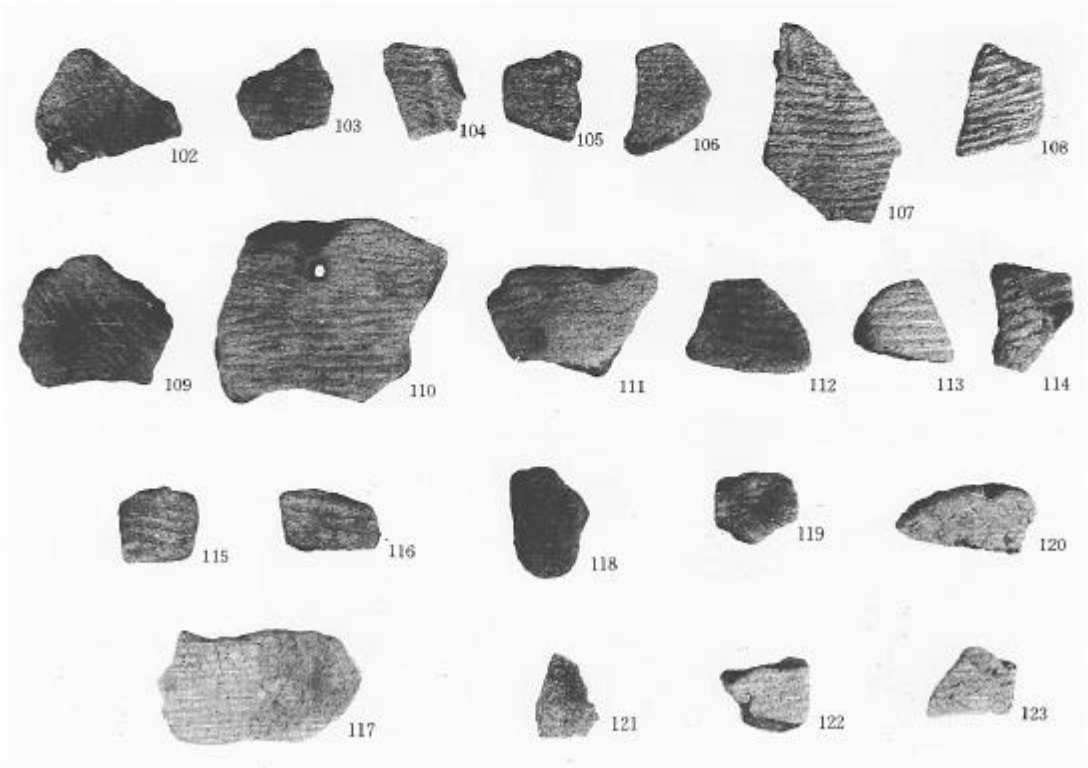
1　遺構外出土土器(2)



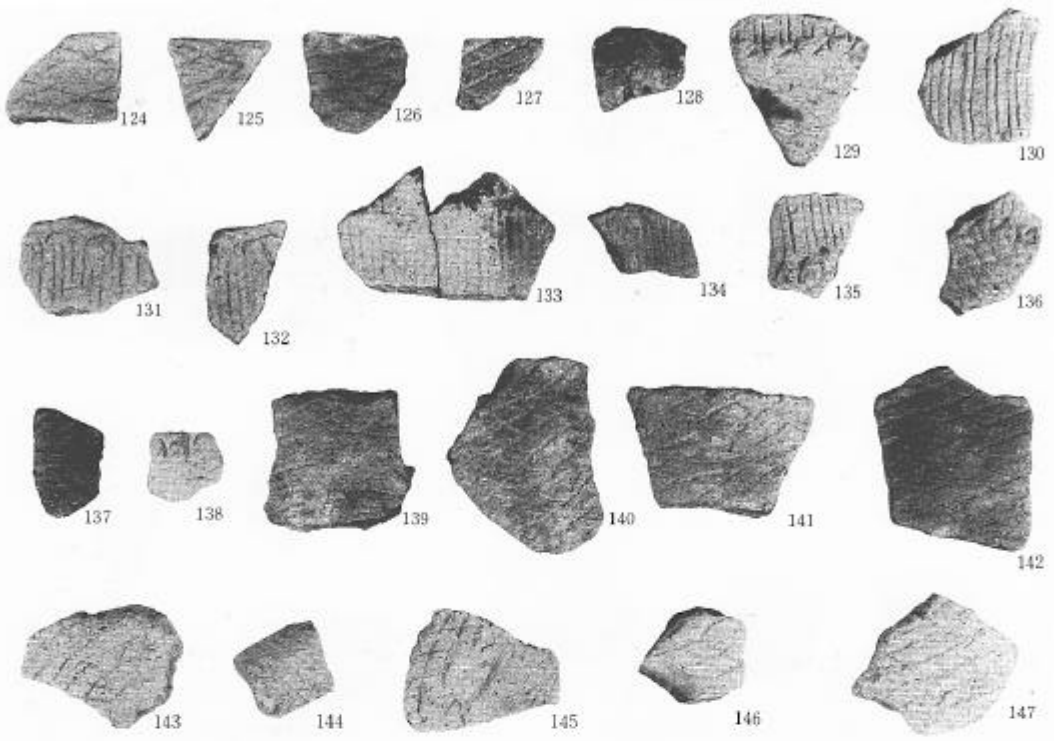
2　遺構外出土土器(3)



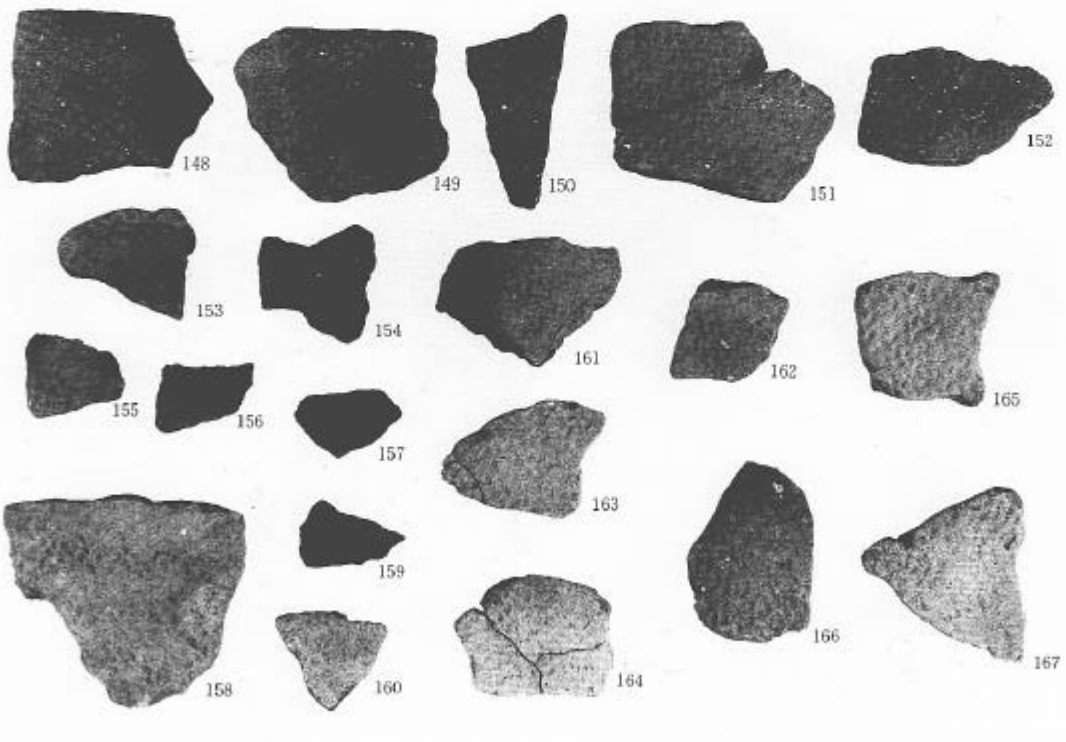
1　遺構外出土土器(4)



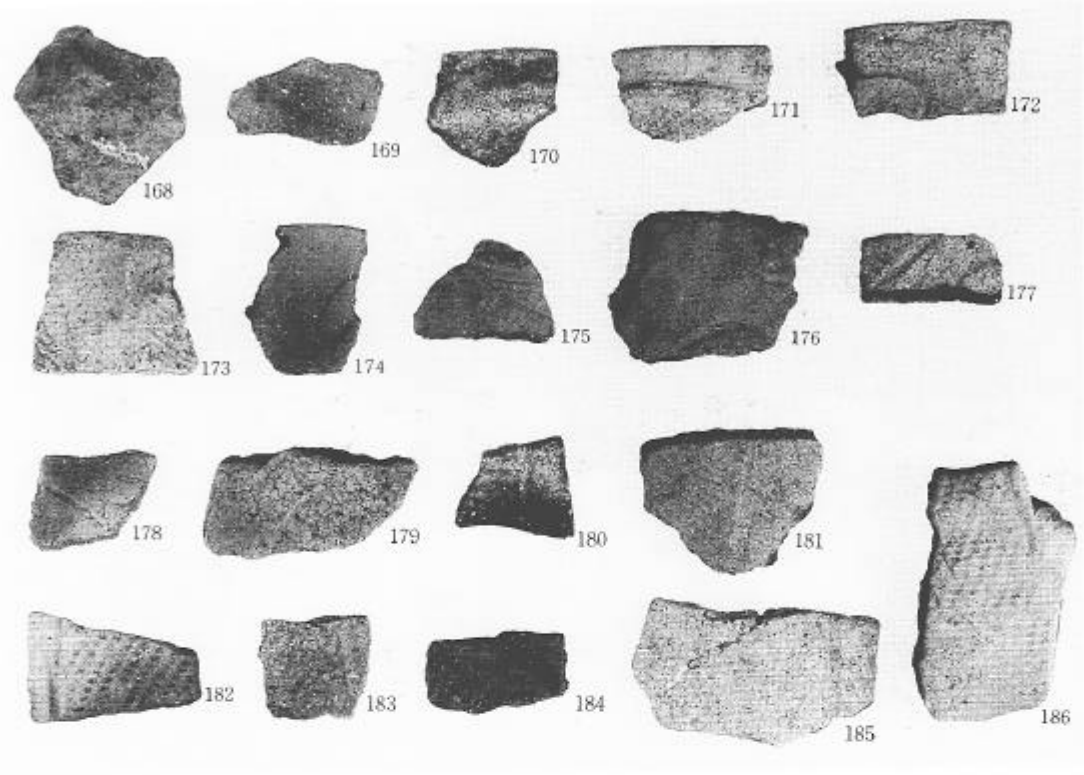
2　遺構外出土土器(5)



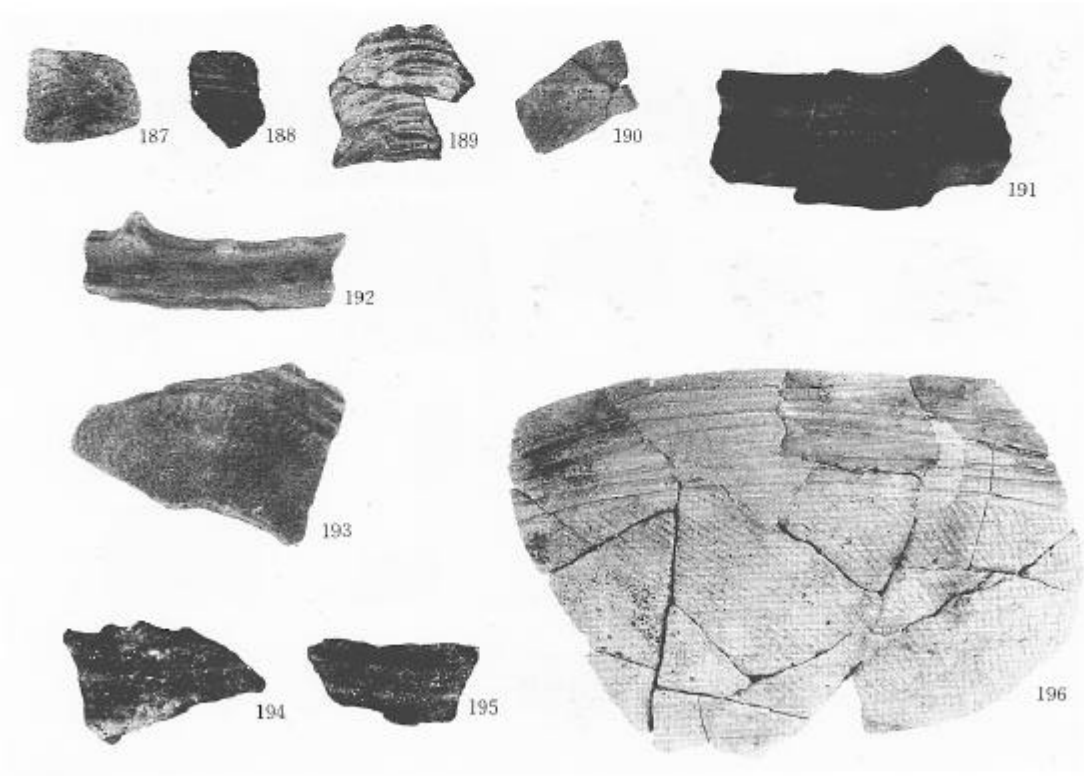
1　遺構外出土土器(6)



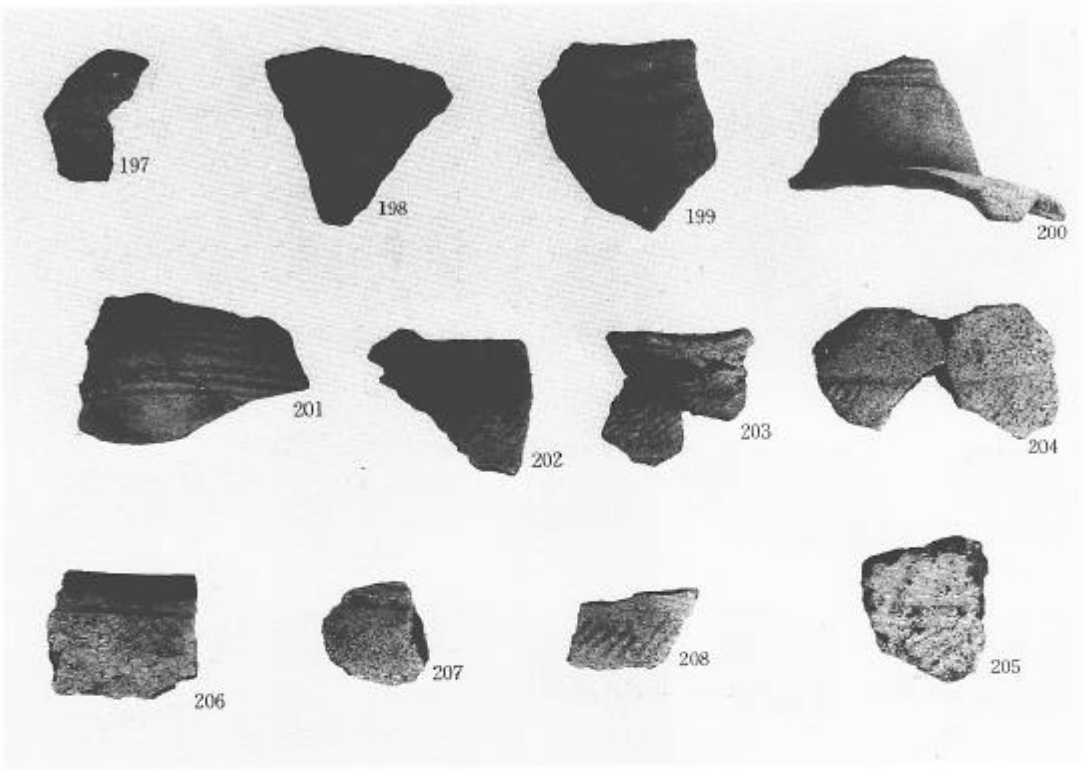
2　遺構外出土土器(7)



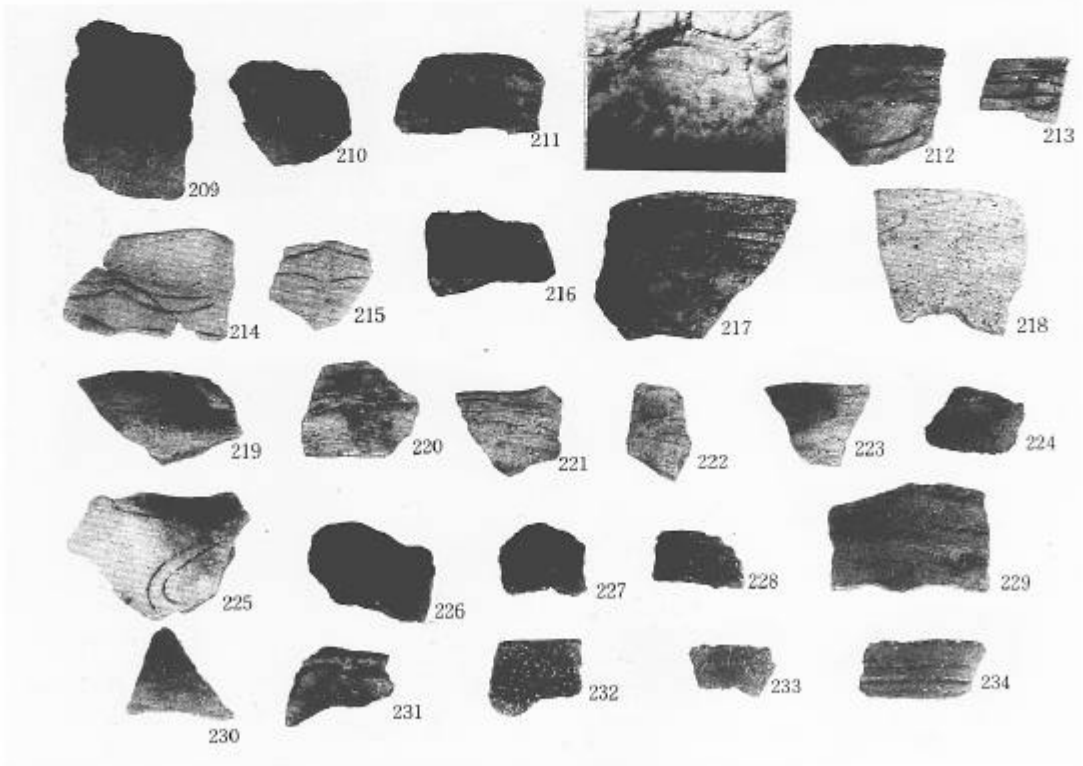
1　遺構外出土土器(8)



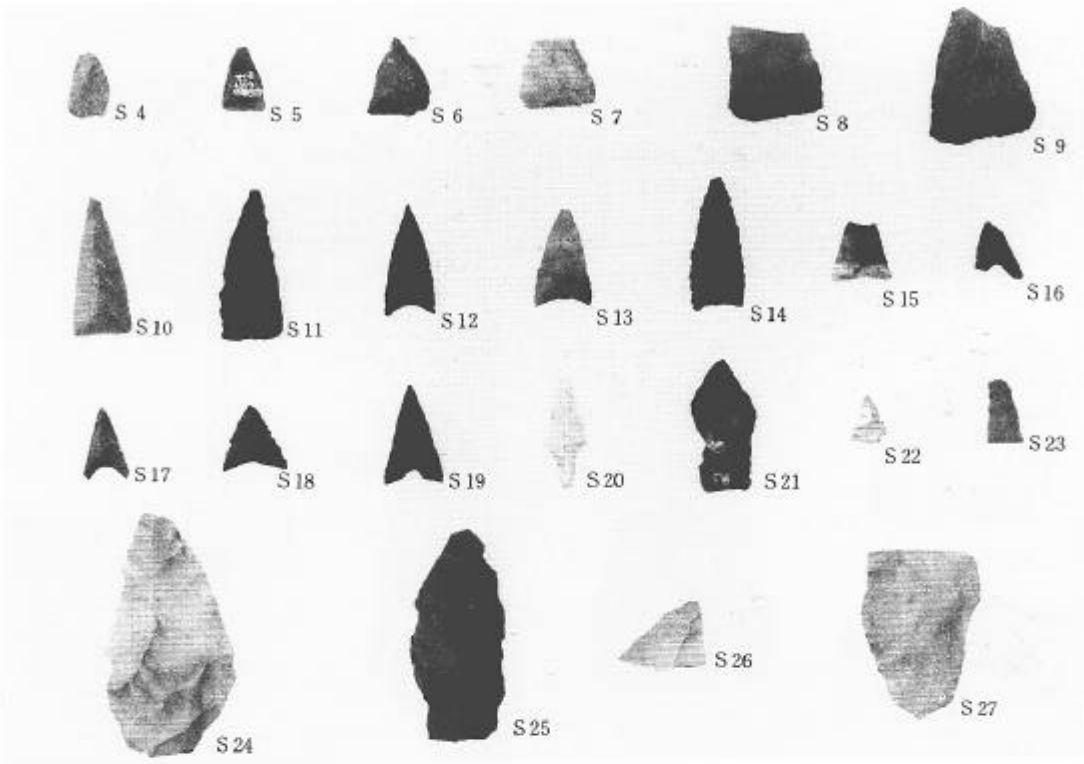
2　遺構外出土土器(9)



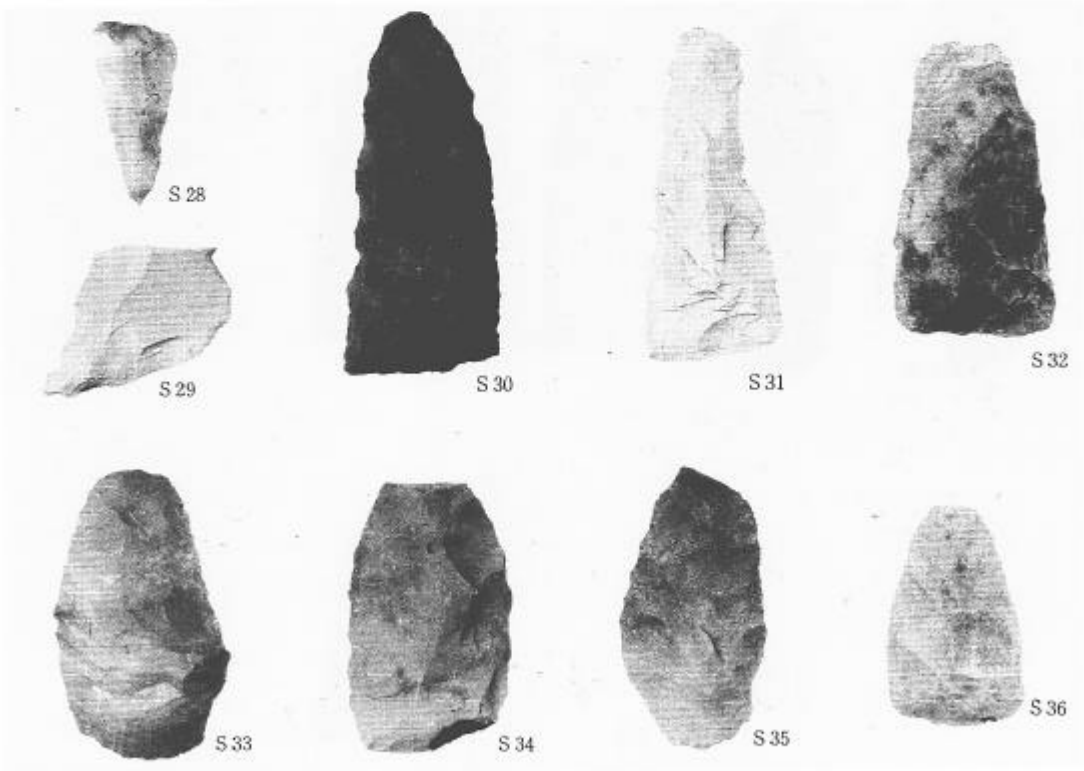
1　遺構外出土土器(10)



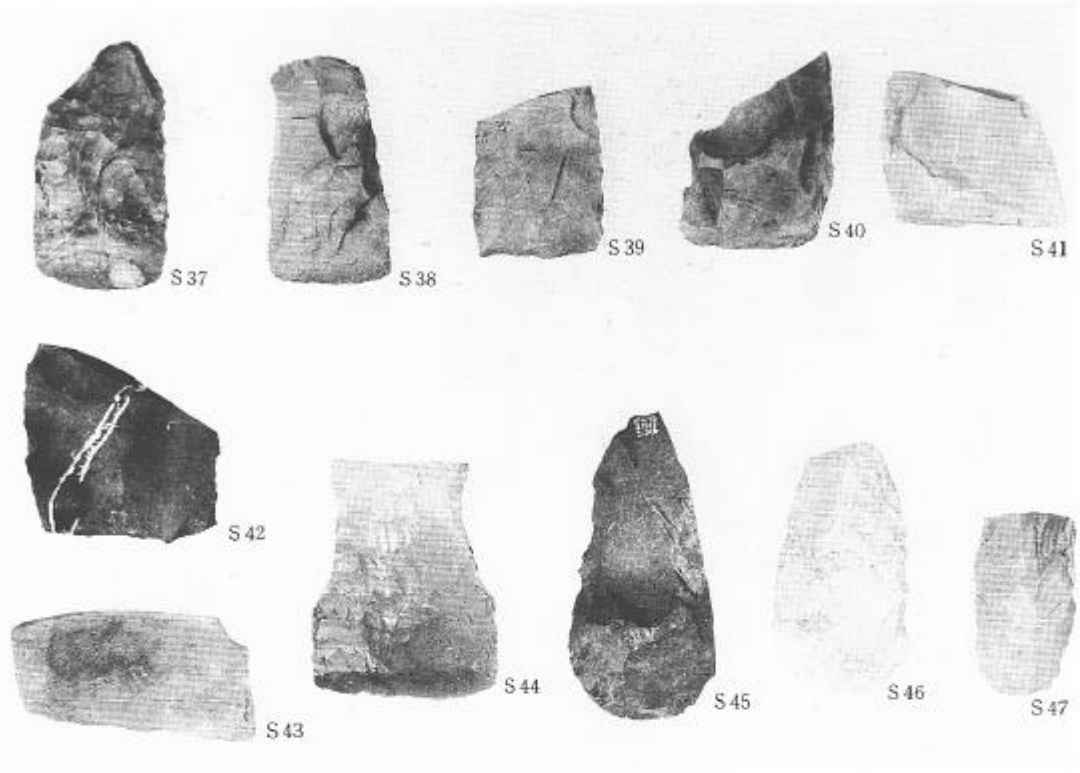
2　遺構外出土土器(11)



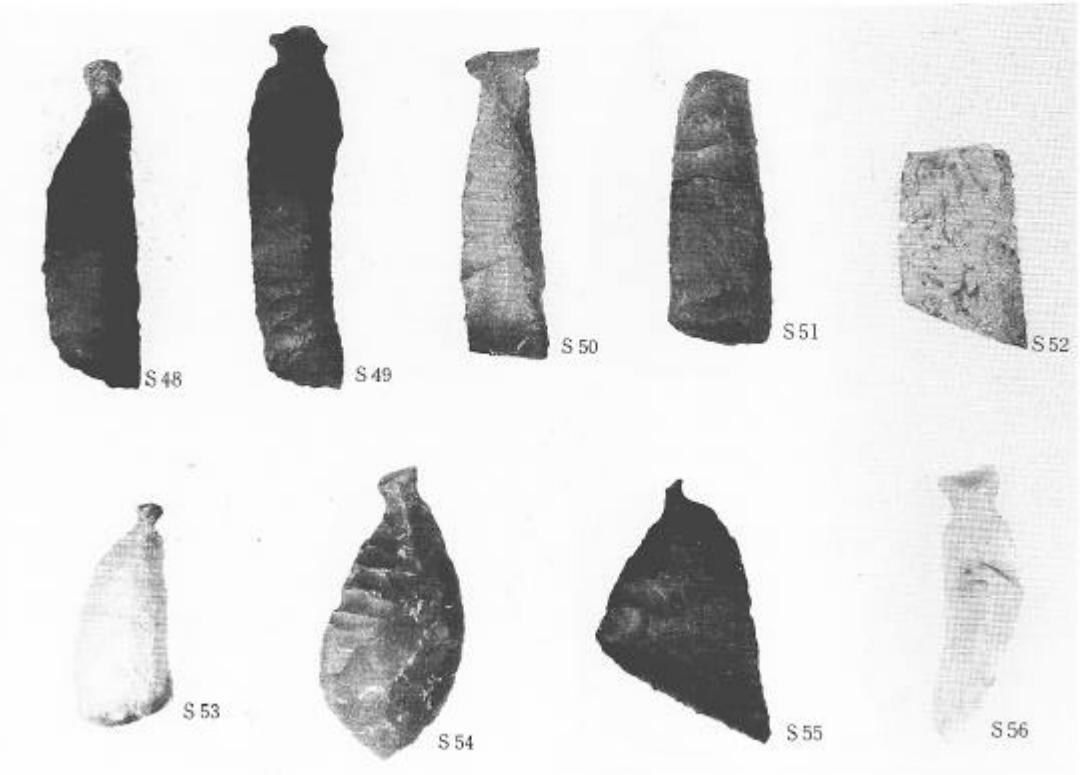
1　遺構外出土石器(1)



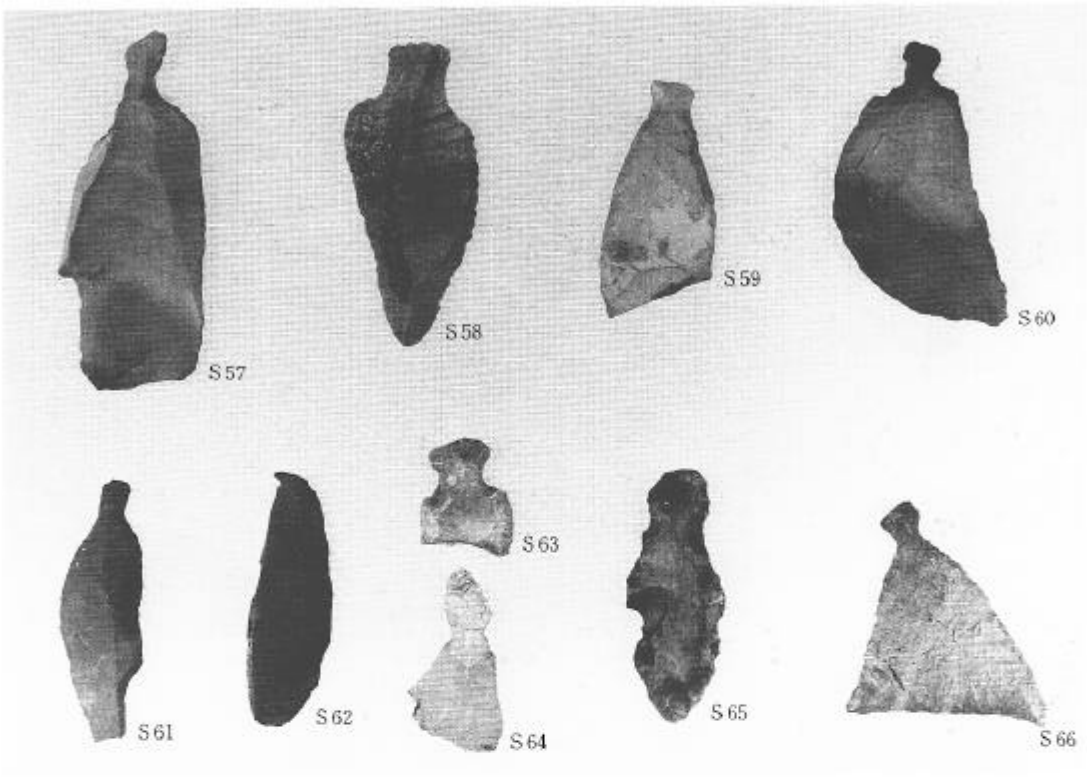
2　遺構外出土石器(2)



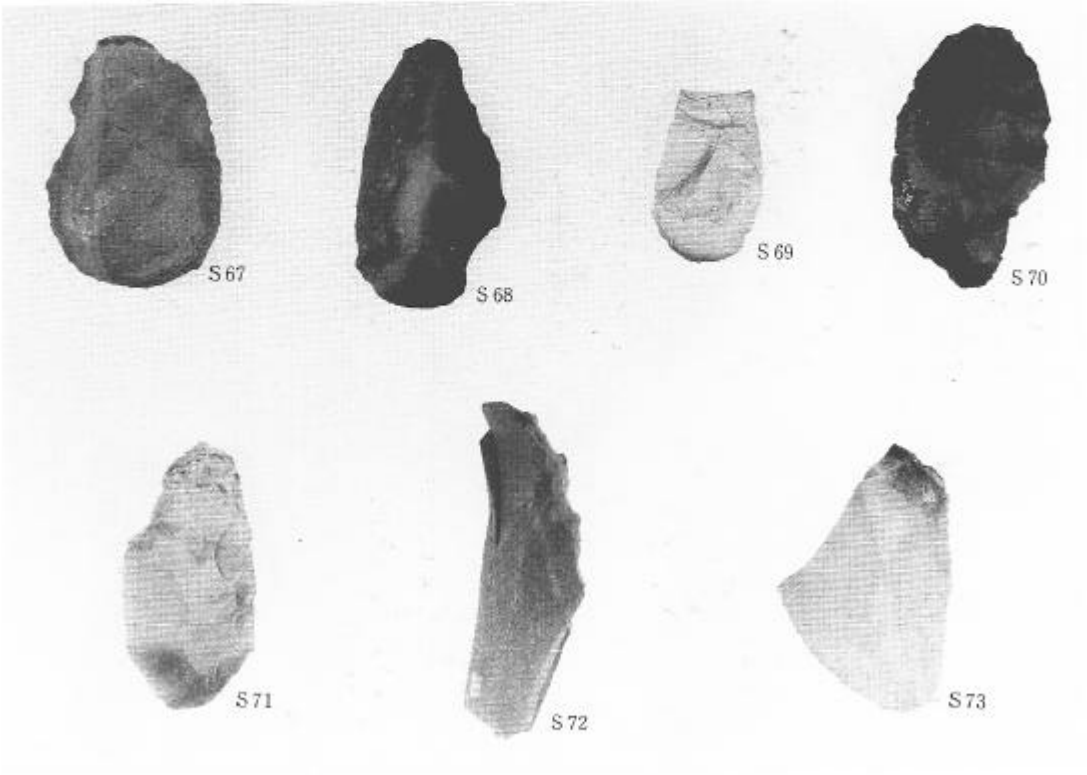
1　遺構外出土石器(3)



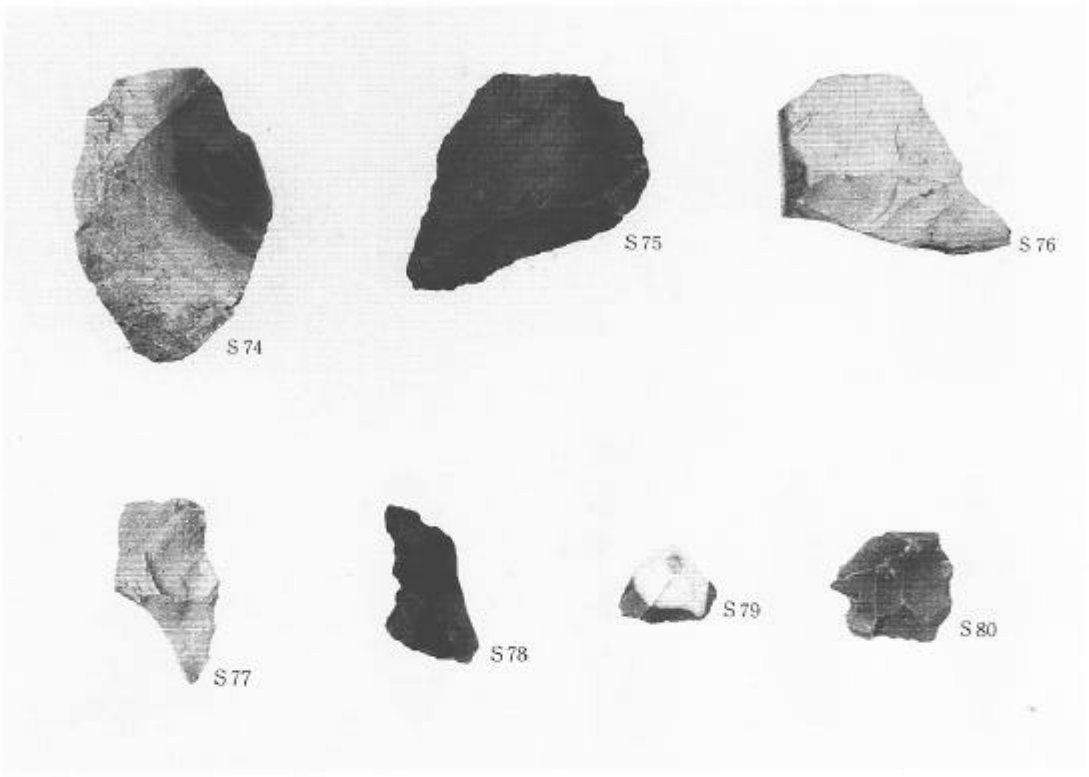
2　遺構外出土石器(4)



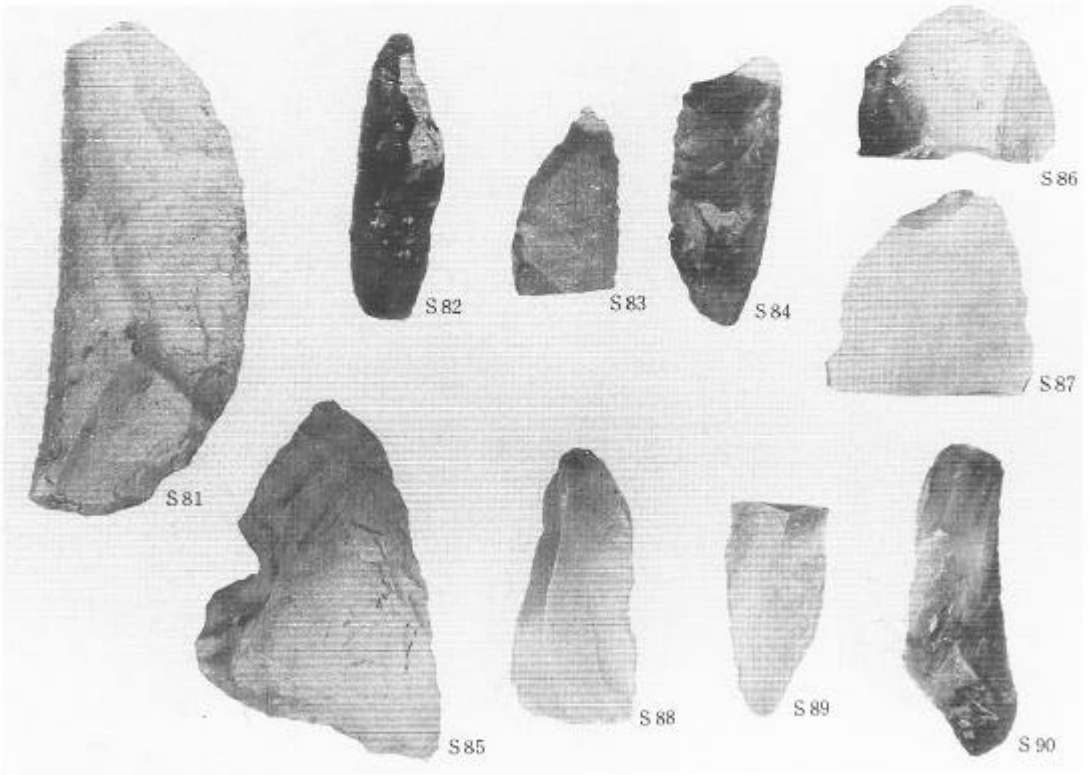
1　遺構外出土石器(5)



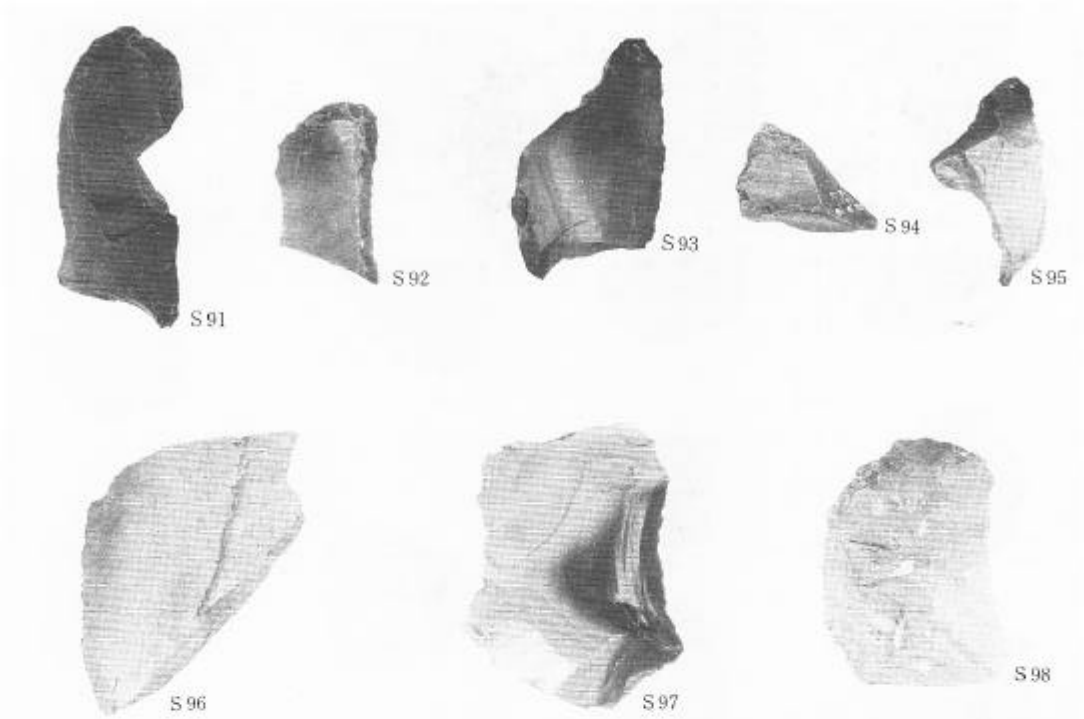
2　遺構外出土石器(6)



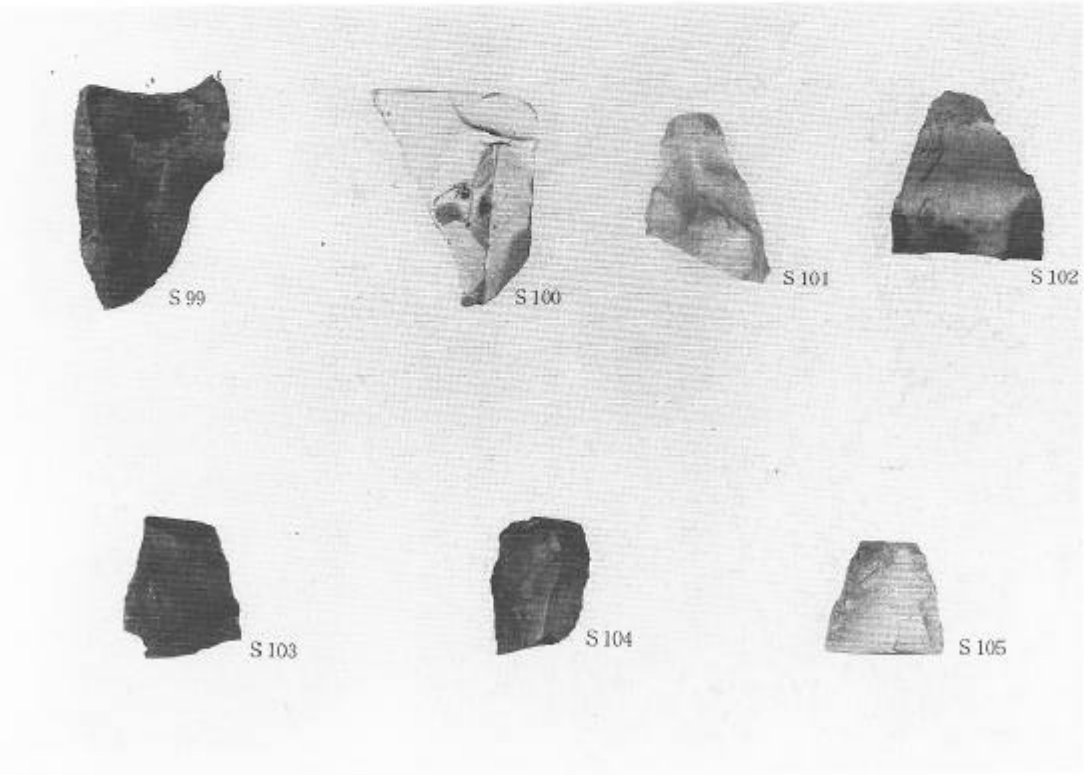
1　遺構外出土石器(7)



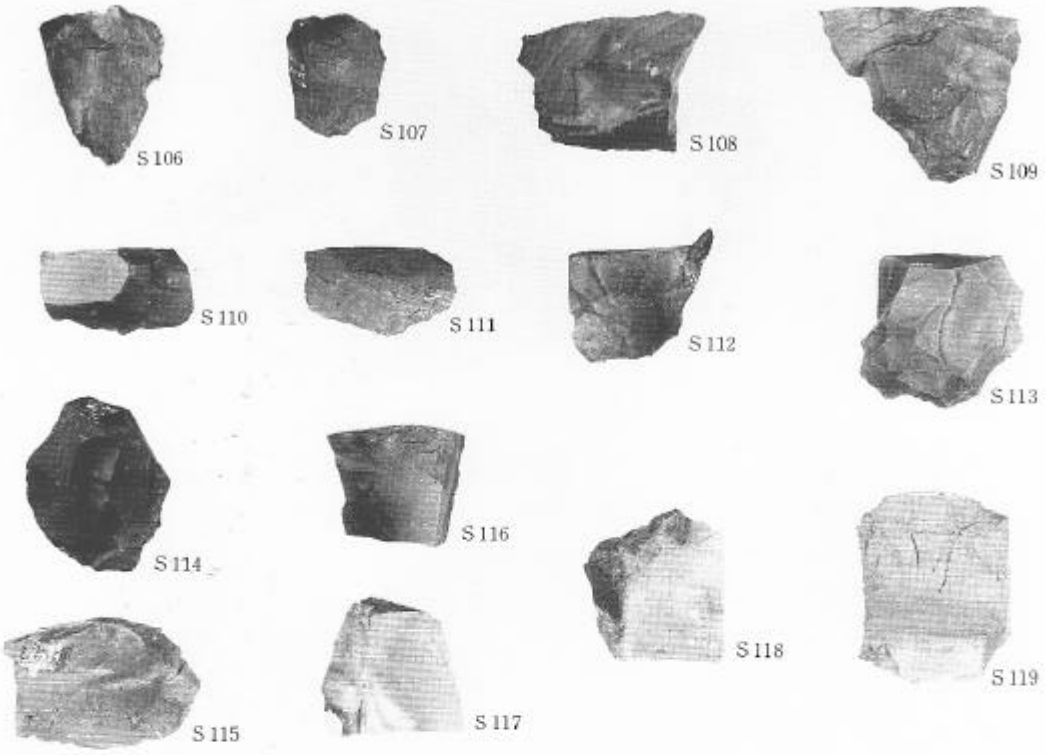
2　遺構外出土石器(8)



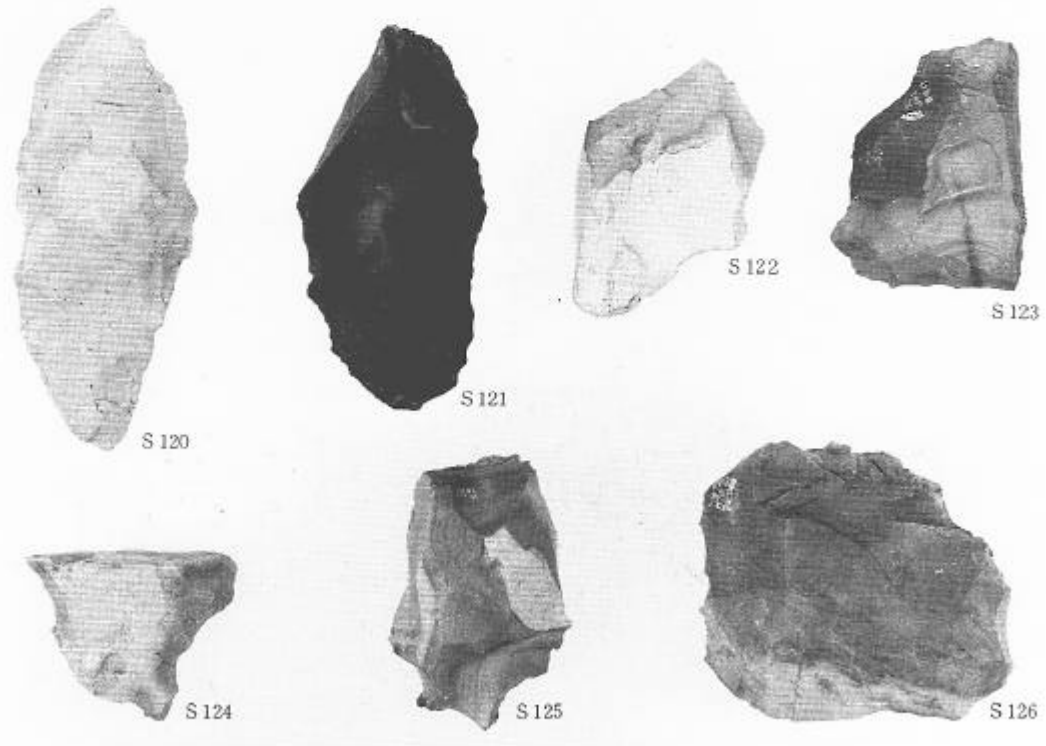
1　遺構外出土石器(9)



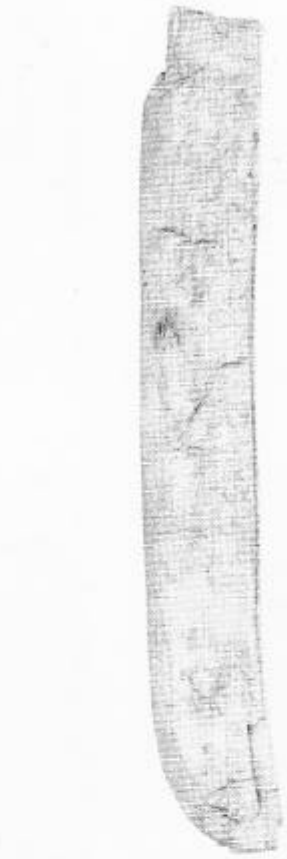
2　遺構外出土石器(10)



1　遺構外出土石器(11)

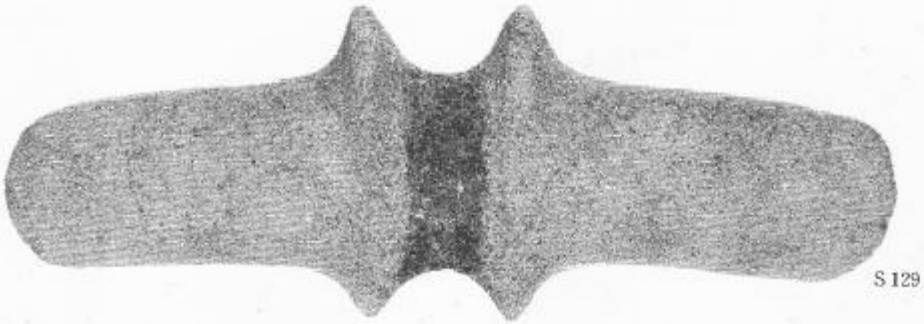


2　遺構外出土石器(12)



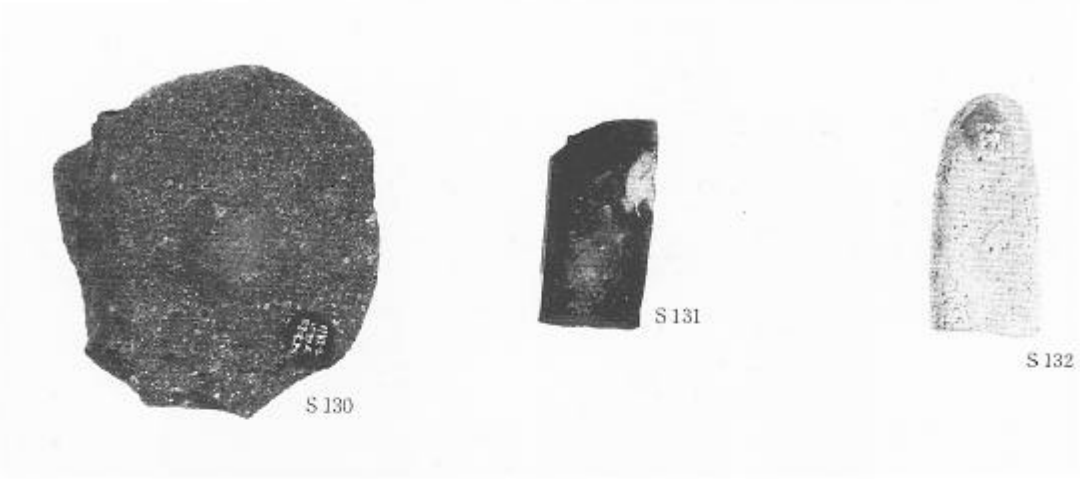
S 127

S 128



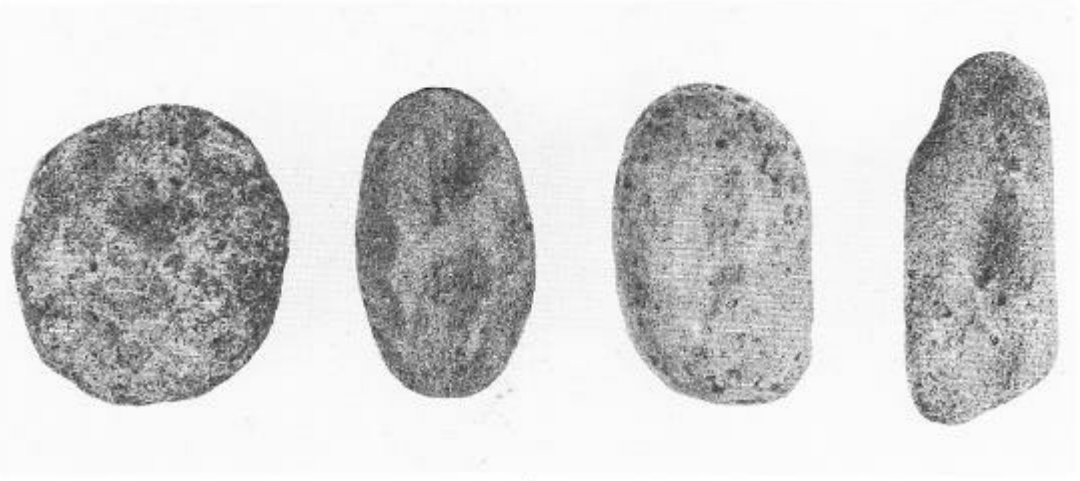
S 129

遺構外出土石器(13)・石製品

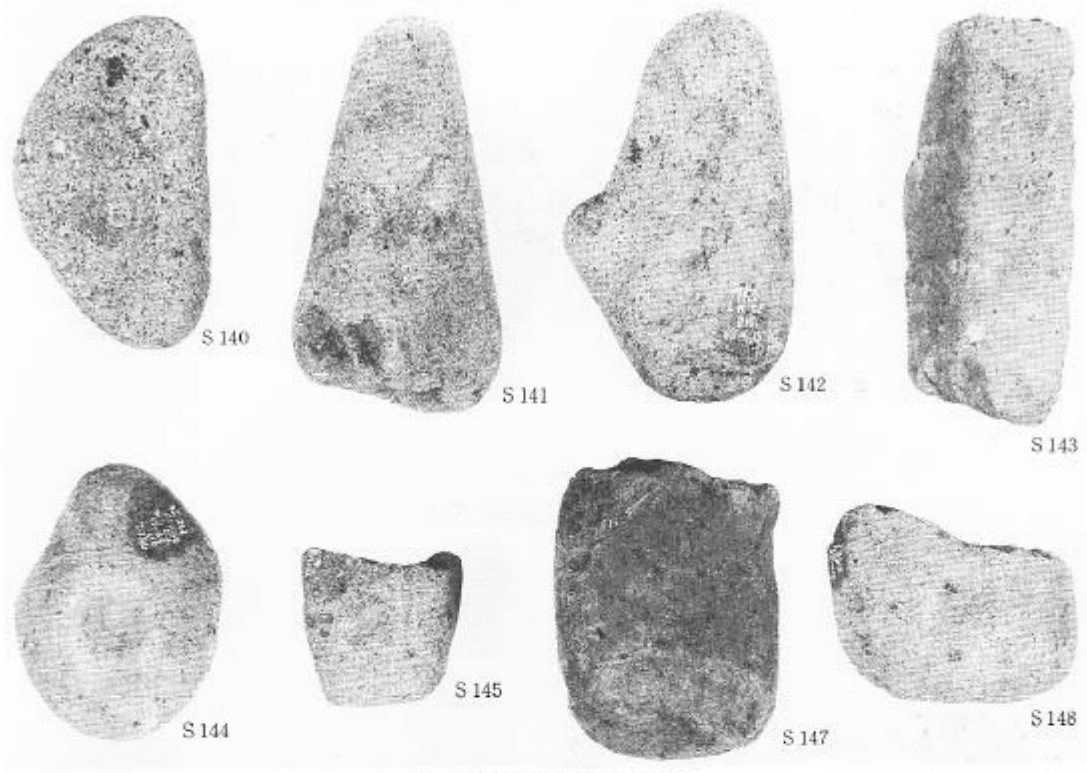


1　遺構外出土石器(14)

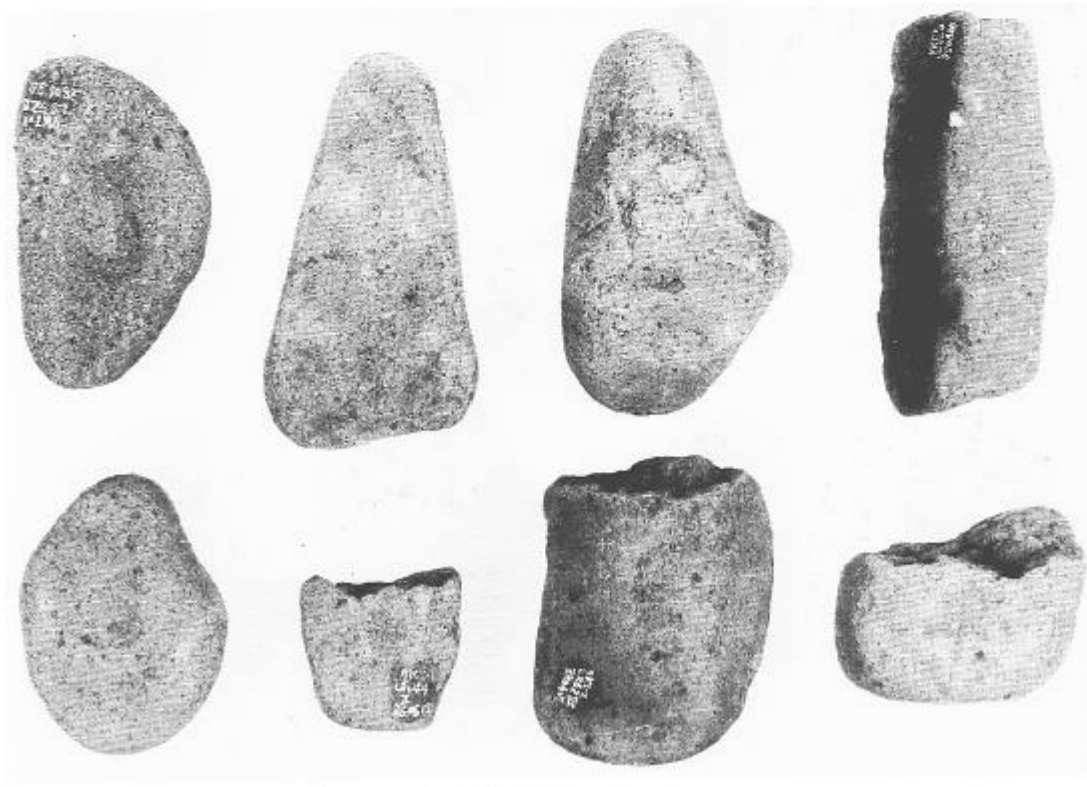
2　遺構外出土石器(15)



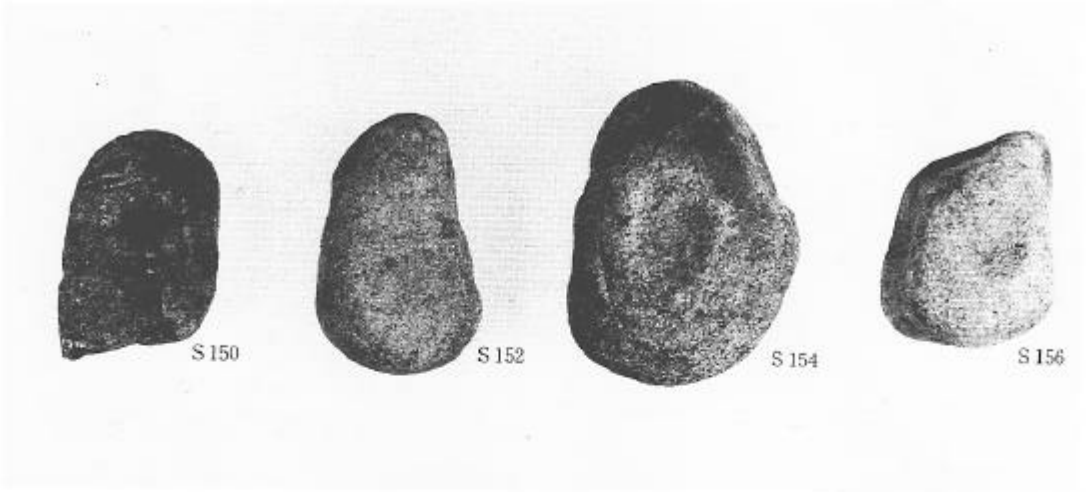
3　同上裏面



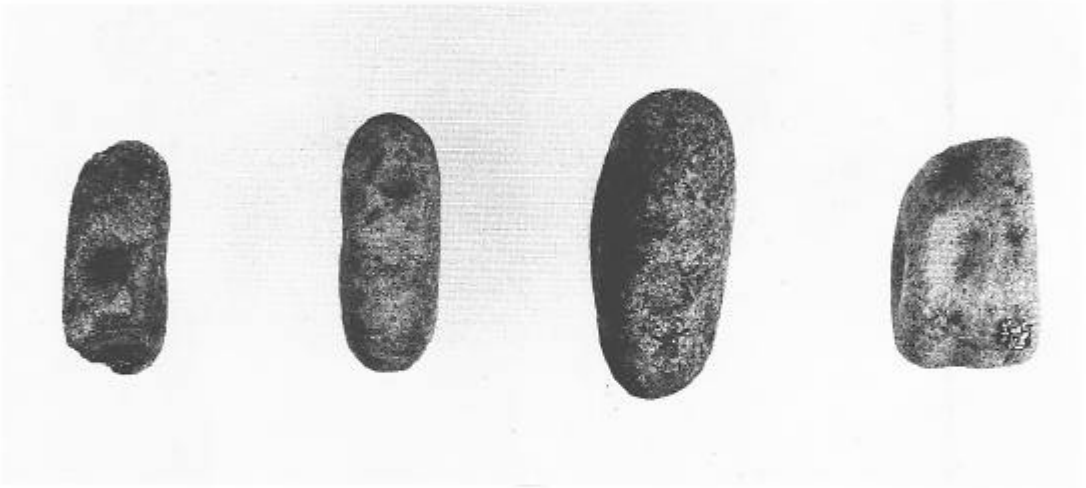
1　遺構外出土石器(16)



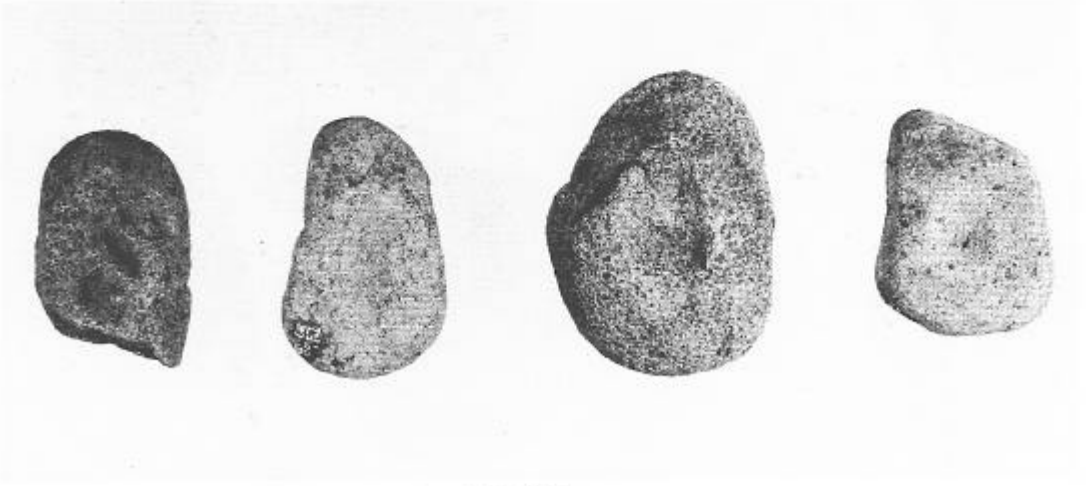
2　同上裏面



1　遺構外出土石器(17)

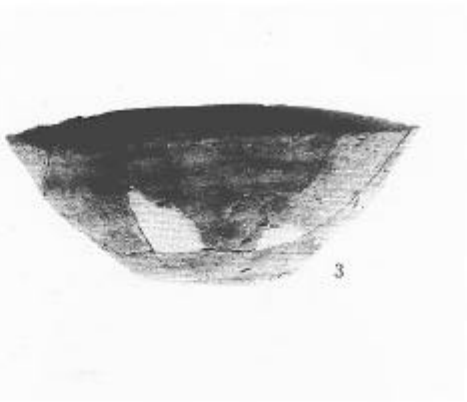


2　同上側面



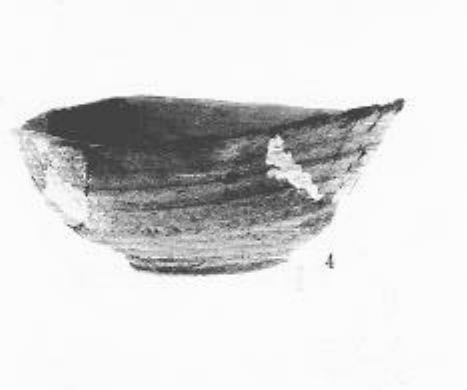
3　同上裏面

1　火葬墓ＳＲ05出土土器



3　火葬墓ＳＲ09出土土器

2　火葬墓ＳＲ05出土土器



4　火葬墓ＳＲ09出土土器

5　火葬墓ＳＲ06出土土器

6　火葬墓ＳＲ06出土土器

1　火葬墓ＳＲ10出土土器

2　火葬墓ＳＲ33出土土器

3　溝状遺構ＳＤ14出土土器

4　遺構外出土中世陶器

小出II遺跡

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の立地

調査の範囲は、小出Ｉ遺跡に隣接する東から流れ込む小沢地(最低地で標高51m)と、その北側の斜面から平坦部(標高62m)を含む3,400㎡である。このうち北側の平坦部1,100㎡については、昭和62年度の調査範囲であり、昭和63年度の調査範囲は、南側の斜面と低地部を含む2,300㎡である。本遺跡と小出Ｉ遺跡とを画する小沢は、調査区域東側の平坦部、標高65mに端を発しており、これによって押し流された角礫が、遺跡の低地に露出している。また平坦部は、小出Ⅲ遺跡とをこれも沢によって北側で画されており、東側から突出する平坦部の西端に当たる。

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

調査は、小出Ｉ遺跡の南北基線を延長して４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、グリッド呼称も小出Ｉ遺跡からの通しで行っている。調査範囲内におけるグリッドは、南北で63～93ラインまで、東西ではＬＰ～ＭＯラインまでの範囲である。遺構の作図、遺物の取り上げ等も小出Ｉ遺跡と同様であるが、ＳＷ17(炭窯)に関しては高低差のある斜面に構築されていたため、平面図作成の際には遣り方測量を採用している。

２．調査の経過

調査は、北側の平坦部(1,100㎡)を昭和62年度に、南側の斜面と低地(2,300㎡)を昭和63年度に調査している。

昭和62年度

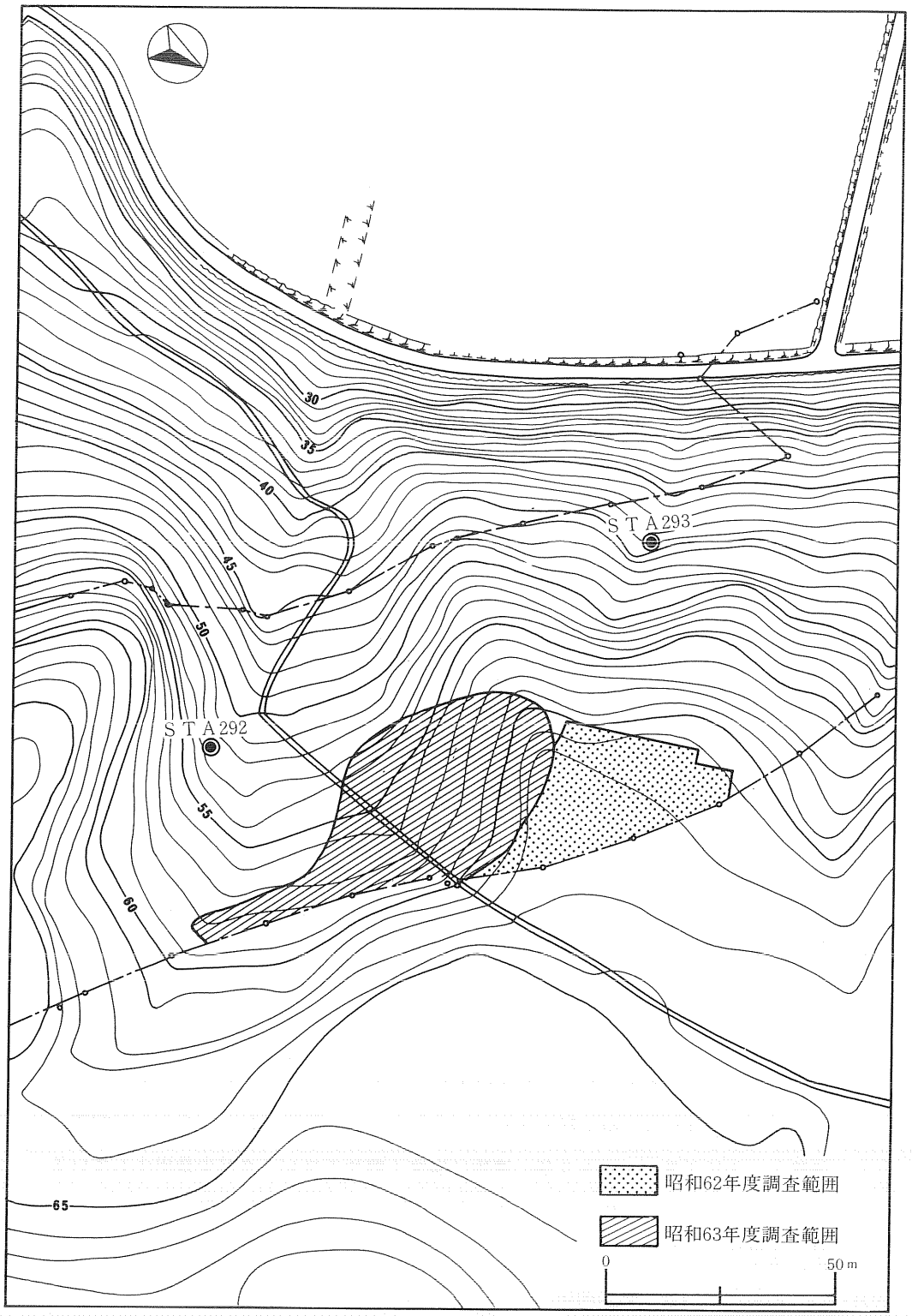
10月13・14日　発掘機材の搬入と、トレンチ設定部分の下草の刈り払いを行う。

10月15日　低地に設定したトレンチより土師器片、フレイクが出土する。また平坦部のトレンチ調査では、縁辺部のみに漸位層が残り、中央部はすでに削平されていることが判明している。遺構は、土坑５基、ピット５基。遺物は縄文土器片とフレイクが少量出土している。

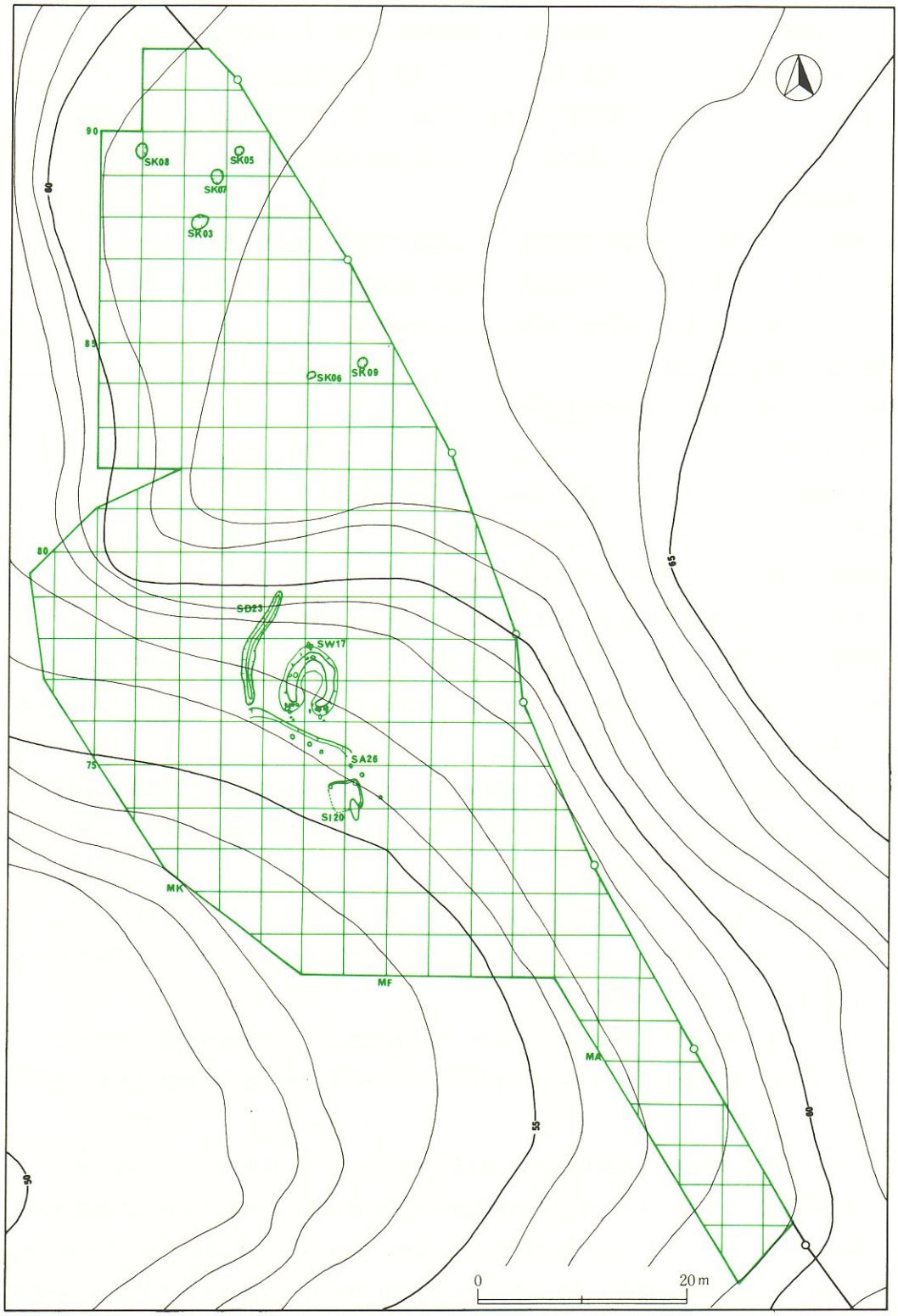
10月26日　グリッド杭の打設作業を開始する(委託業務)。また平坦部西側斜面の調査のための刈り払いを継続して行っている。

10月28日　西側斜面の表土除去開始。

10月29日　ＭＫ86グリッドで、土師器甕が倒立した状況で検出される(ＳＲ01)。中から白色の


30
35
40
45
50
55
60
65
S T A293
S T A292
昭和62年度調査範囲
昭和63年度調査範囲
0
50m

第1図　調査範囲図


90
85
80
75
SK08
SK05
SK07
SK03
SK06
SK09
SD23
SW17
SA26
SI20
MK
MF
MA
0
20m

第2図　遺構配置図

骨片が確認される。(この土師器甕は小出Ⅰ遺跡の骨蔵器と同じ性格のものである。)

11月 4日　平坦部のトレンチ調査で判っていたＳＫ03・ＳＫ04の精査を行う。

11月 6日　ＳＫ07の確認と半截を行う。埋土中に縄文土器、フレイクがある。

11月16日　ＳＫ04・07・13などを完掘する。また平坦部北西側斜面から出土の縄文土器片の取り上げを継続して行う。

11月19日　ＳＫ09などの図面作成を行う。また斜面における遺物取り上げも続けている。この頃からみぞれが降り出し、11月30日には積雪30cmの降雪があり調査に支障を来す。

12月15日　調査終了後の写真撮影の準備と機材の撤収準備に入る。

12月16日　全景写真の撮影。

12月19日　機材を撤収し、調査を終了する。

昭和63年度

昭和63年度の調査は、小出Ⅰ遺跡の調査と併行して行われている。

5月 9日　プレハブ・ベルトコンベアー・発掘機材の搬入を5月24日まで行う。

5月25日　調査は、北東側斜面の表土除去から行う。

5月27日　昨年度調査で検出された炭窯(ＳＷ17)の全体像を表す。

5月31日　ＭＦ80・ＭＨ78グリッドで、縄文土器・フレイクが出土したが、散発的である。

6月 7日　ＳＷ17の作図を開始する。また調査が低地に行くにつれて、土師器片・須恵器片の出土が多くなる。

6月20日　ＭＤ75グリッドの地山面で、幅40cm～50cmの東西に延びる溝状の遺構を確認した。この溝の埋土中には、焼土塊や土師器片がまとまって出土したが精査の結果、この溝は、旧沢地の跡であることが判った。

6月28日　ＭＦ73・74グリッドで、土師器片を多く含む焼土遺構（ＳＮ20）を検出。

7月 6日　ＳＮ20の精査によって、この遺構が、竪穴住居跡のカマドであることが判明し、ＳＩ20に変更してプランの確認作業に入る。

7月20日　ＳＩ20のプランは、沢によって押し流された礫によって確認が困難であったが、北側から東側の壁を検出し、一辺がおよそ３ｍほどの方形を呈する竪穴住居跡であることが判明した。

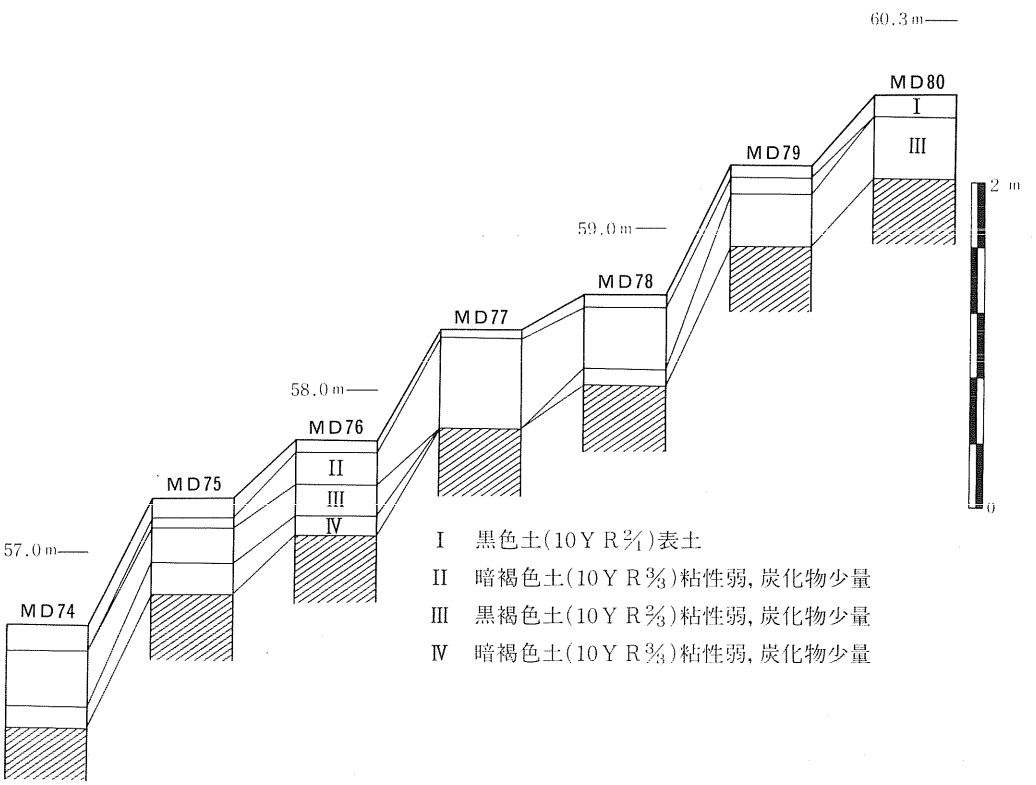
7月21日　ＳＩ20の完掘写真撮影のための精査を行ったところ、住居跡北側から西に伸びる柱穴列を確認、ＳＡ26とする。またこのＳＡ26の斜面内側には、一部斜面を削った道路状の遺構があり、これが、ＳＷ17の西側で斜面を昇る階段状遺構(ＳＤ23)に連続することが判った。

7月25日　ＳＡ26などの精査を行う。また基本土層図の作成を行い調査を終了したが、全景写真の撮影は、小出Ⅰ遺跡の終了をもって同時に撮影することにした。

第３節　遺跡の層序

調査対象地は、標高60～62mの平坦部と標高51mの凹地からなっている。平坦部は、畑地であって20cm前後の耕作土下に、地山である明褐色土(7.5ＹＲ5/6)が存在する。一方凹地の基本層序は、Ⅰ層が黒色土(10ＹＲ2/1)で、以下Ⅱ層は暗褐色土(10ＹＲ3/3)でしまりはあるものの、粘性も弱く炭化物を少量含んでいる。Ⅲ層は黒色土(10ＹＲ2/3)でしまり・粘性とも弱く、炭化物を少量含んでいる。Ⅳ層は暗褐色土(10ＹＲ3/3)でしまりはあるものの粘性は弱く、炭化物を含んでいる。Ⅰ層の表土は、斜面から低地にかけてほぼ均一に堆積するが、Ⅱ層は斜面の中ほどに厚く堆積しているものの斜面上方や低地には見られない。Ⅲ層は、斜面の上方と低地に、Ⅳ層は低地にのみ堆積している。

遺物は縄文土器片や石器が、平坦部寄りの斜面でⅠ・Ⅱ層中より出土するものが多く平坦部からの流れ込みと考えられる。また土師器・須恵器は、低地部分のⅡ～Ⅳ層にかけて出土している。特に沢筋に当たる最低地などでまとまって出土していることから、沢水に押し流された遺物も多いものと思われる。低地に露頭する礫は、これも沢水によって押し流されたものと、地山に含まれたものとがあり、小出Ⅰ遺跡のⅣ層上面に見られる安山岩や砂岩系の礫である。



第３図　基本土層柱状図

第2章　縄文時代

第1節　遺構と出土遺物

縄文時代の遺構は土坑6基である。全て昭和62年度の調査区であった北側の平坦部で検出されており、6基のうち4基は調査区の北端に、残る2基は南東側に位置している。62年度の調査区は、原地表面を削平して畑地に造成した部分であって、各土坑ともこの造成時に上部を削平されたものと考えられる。

1．土坑

ＳＫ03(第4図、図版2・8)

調査区の北端ＭＪ87グリッドで確認している。1辺が1ｍほどの方形に近い土坑で、確認面からの深さは15cm、壁は大きく外傾している。底面は北～北東にかけてわずかに傾斜している。覆土は、暗褐色土と褐色土で、全体的にブロック状となっており、炭化物がわずかに混入している他、角礫や土器片が出土している。

出土土器は、いずれも細片であるが、1はほぼ直立する口縁部破片で、幅の広い口縁部文様帯には、櫛歯様工具を横に引いて交差する条線が施される。口縁部文様帯の下には、縦方向のやや条間の開いた沈線文帯があり、上の文様帯とは小さく粒状につまみ出した一条の低い隆帯によって画される。胎土は緻密で、焼成も良い。

ＳＫ05(第4図)

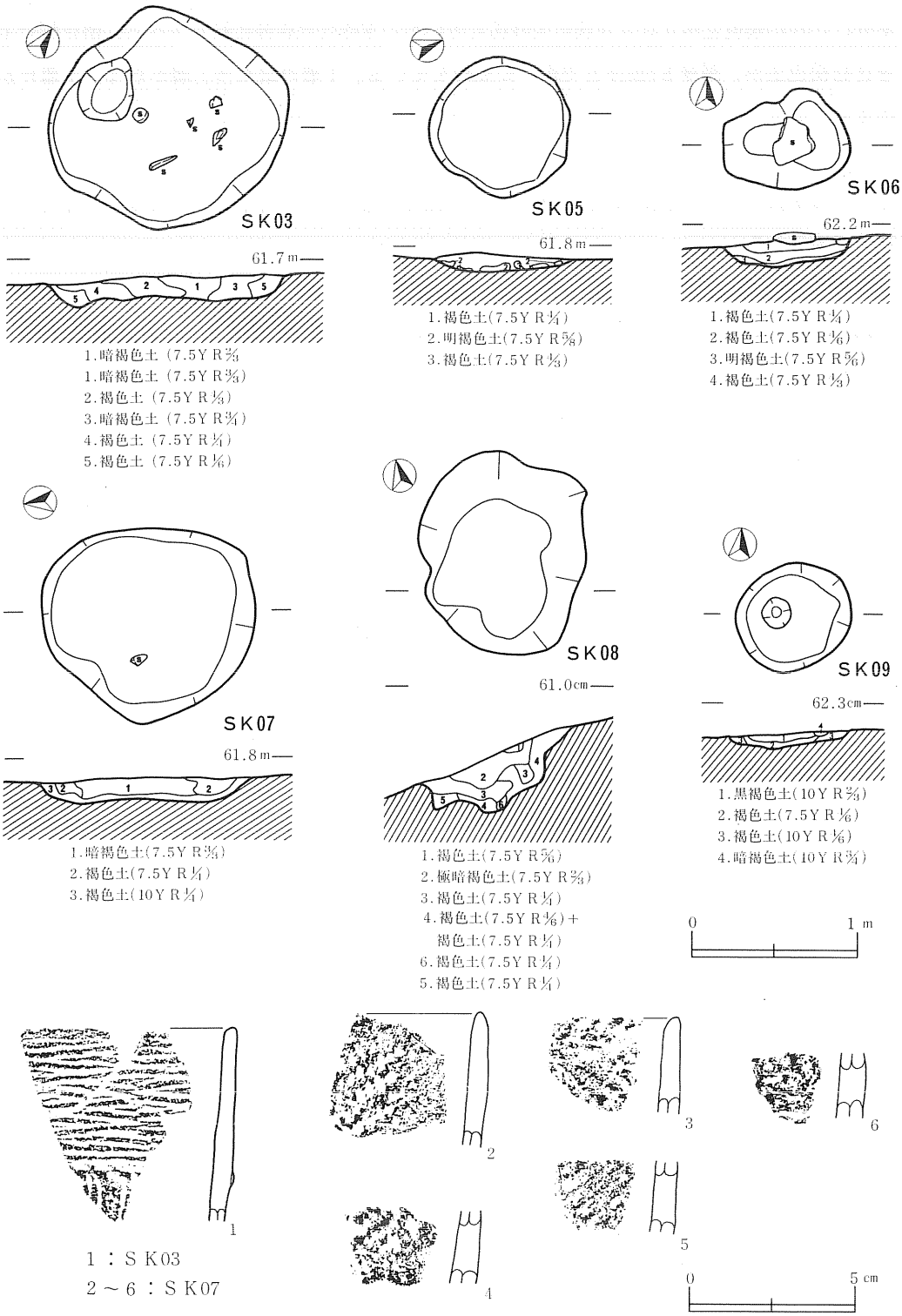
調査区の北端ＭＩ89グリッドで確認している。平面形は径80cmの円形を呈し、深さは10cmほどである。底面は中央に向かって緩く傾斜している。覆土はしまりのある褐色土で上位の中央には炭化物粒子が含まれ、底面近くでは明褐色土ブロックも混入している。

ＳＫ06(第4図、図版2)

北側平坦部の南側、ＭＧ84グリッドで確認している。上面形は75cm(東西)×60cm(南北)であるがプランのラインは出入りがあり、深さ15cmでやや凹凸のある底面プランも上面形に相応して出入りがある。確認面中央には30cm×20cmの扁平な礫が据えられている。

ＳＫ07(第4図、図版8)

調査区の北端ＭＪ88･89グリッドで確認している。上面形は径1.3ｍほどの円形で、底面も径1.0ｍほどの円形を呈している。深さは20cmでわずかに中央部が盛り上がっている。底面から壁は大きく外傾して立ち上がる。覆土は、粘性としまりがあり、炭化物粒子を含む暗褐色土で



第4図　土坑SK03・SK05・SK06・SK07・SK08・SK09と出土遺物

あり、これに褐色土がブロック状に入り込んでいて、下位には底面に沿うように、炭化物粒子を含む褐色土が、層厚８cmほどで均一に堆積している。１層の暗褐色土層からは、土器片が出土している。

出土土器（２～６）は、摩滅した細片が多いがいずれも胎土中に繊維を含んでいる。２は直立する口縁部破片でＬＲ原体の横位回転による斜縄文が施されている。３～５は同一個体で羽状縄文が施される。

ＳＫ08（第4図）

調査区の北端ＭＬ89グリッドで、東から西へ傾斜した面で確認されている。上面形は70cm（東西）×1.2m（南北）でプランのラインは不整で、底面も上面プランに相応している。深さは、東側で30cm、西側で20cmで底面には凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。

ＳＫ09（第4図、図版3）

調査区北側の平坦部南側でＳＫ06の東４ｍのＭＤ84グリッドに位置している。上面が径60cm、底面が径50cmの円形を呈していて、深さは10cmである。底面は平坦だが、中央から少し西よりに径20cmほどのピットがある。覆土は、いずれも粘性としまりがあり、１層の黒褐色土層と３層の褐色土層にはわずかながら炭化物粒子が含まれる。

第２節　遺構外出土遺物

縄文時代の遺構外出土遺物は、昭和62年度の調査区である北側の平坦面から出土したものが多く、基本土層のⅢ層から出土している。

１．土器

遺構外出土の土器には、縄文時代早期～前期、中期、弥生時代に属する土器である。

Ⅰ群土器（第５～15図、図版８～18）

縄文時代早期後半～前期前半の土器で、本遺跡では最も多く、小出Ⅰ遺跡出土の当該期の土器群にも関連の強い土器である。

１類（７～14）：表裏縄文の施される土器である。７～13は同一個体で、表裏にはＬＲ縄文が回転施文され、口縁部にも同一原体による縄文が施される。表面の縄文は横走する。１から観ると口縁部は直立し、口唇部は平坦である。胎土には繊維と径３mmほどの砂粒を含むが、焼成は良好である。14の表裏にもＬＲ縄文が施される。

２類（15～17）：撚糸や縄文の側面圧痕文と刺突文の施される土器である。15は２条一組の撚糸側面圧痕文と「Ｃ」字状に縄文の押圧が施され、その下の斜縄文との間には刺突列がめぐる。16では無文地にＲの撚糸側面圧痕文が施される。17は平坦で内傾する口唇に口縁部はほぼ直立する。３点とも胎土に繊維を含むが含有量は少なく、砂粒を多く含む。

３類（37～44）：楕円形の刺突文が施される土器で、胎土に含まれる繊維は少ない。刺突は、縄の末端かループの側面押圧によるものとも見られるが、摩滅していて明確でない。直立する口縁部に口唇部は「∩」状となり、37では波状口縁の可能性がある。

４類（18～36、45～84）：結束のない羽状縄文の施される土器で、口縁部の形態や胎土によって４分類した。

４ａ類（18～36）：18～23の口縁部は直立し、口唇部は23を除くとほぼ平坦である。口縁部には18・23のように横走する０段多条のＬＲ縄文が施されるものと、口縁上端から羽状縄文の施されるものがある。体部にはこれも０段多条の撚りの異なる原体による結束のない羽状縄文が施される。繊維と砂粒を含み器面はザラザラしている。

４ｂ類（45～71）：直立する口縁部上端に浅い刺突が行われ、口唇部が小波状を呈するもので繊維の含有量は３ａ類より少なく焼成も良好である。「∩」状を呈する口唇部が波状を呈する45～49、平坦かやや内削ぎの口唇部が波状を呈する51・50・53、「∩」状の口唇部の52・54・55などがある。体部にはＲＬ・ＬＲ原体による結束のない単節の羽状縄文が施される。

４ｃ類（78～84）：肥厚する口縁部に縦位の羽状縄文が施される土器で、胎土には繊維を多く含

む。78～81は同一個体で、平坦内削ぎの口唇部、口縁部は肥厚して内傾する。82も同様の形態であるが、口唇部は「∩」状となる。羽状縄文は非結束の0段多条のＲＬ・ＬＲ原体による。

４ｄ類(85～94)：羽状縄文は４ｃ類と同じだが、縄文は細く器面に間隙なく施される。器形は明確でないが、底部は94から広い丸底を呈するものと考えられる。胎土には繊維と細砂粒が含まれるが、焼成は良好で、内面は平滑である。

５類(95～110)：重層縄文に縦位の沈線文帯のある土器である。95～100は同一個体で、「∩」状の口唇部、直立する口縁部から一度内傾し、体部で緩く膨らみ底部にいたるものであろう。口縁部には体部と同様0段多条のＲＬ原体による重層縄文が施され、口縁上端には短い刻目列がめぐる。口縁部文様帯下には幅６cmほどの縦位の沈線文帯があり、口縁部文様帯との境には小豆大のコブが付される、体部との境には短い刺突列がめぐる。胎土は繊維が少なく、肌目が細かく焼成も良好である。色調は褐色を呈する。

６類(111～153)：横走する縄文の施される土器である。111～114、115～121、122～125、126～130はそれぞれ同一個体である。111～114は平坦な口唇、わずかに外反する口縁部から体部に直線的にいたるものである。体部には0段多条のＬＲ原体を斜位回転させることによって横走する縄文が施され、内面には粗い条痕が走る。胎土には繊維も含むが、むしろ砂粒が目立ち、色調は暗～茶褐色を呈している。115～121も器形、胎土とも前者と変わらないが、内面に状痕は無く、縄文はこれも0段多条のＬＲ原体による。121からは底部が丸底に近いことが窺える。122～125は平坦口唇や直立する口縁部など111～114と変わらないが、内面に条痕が無く、多量の繊維と石英粒が含まれるせいか焼成も良くない。色調は外面が暗褐色～黄褐色、内面は灰褐色を呈している。126～130は前３者と異なり、口唇は「∩」状で、口縁部は肥厚しやや外反する。

131～153は本類に含まれる土器片を一括している。いずれも0段多条のＬＲ原体を用いていたもので、口唇部や胎土も前４者と同様である。151～153は底部破片で、本類の土器が広い丸底をもつ土器であることが分かる。

７類(154～183)：撚糸文の施される土器である。

７ａ類(154～171)：横走あるいは斜走する撚糸文の施される土器である。口唇部は「∩」状の154～156・158・159、平坦内削ぎの157がある。口縁部は直立するかやや外反する。施文される撚糸文はＬ撚糸文が圧倒的に多い。胎土には繊維、砂粒とも含み焼成はやや不良である。

７ｂ類(172～176)：不整の撚糸文の施される土器である。口唇部は平坦で口縁部は直立する。胎土には繊維も含まれるが少ない。

７ｃ(177～183)：つぶれた菱形を呈する網目状撚糸文の施される土器である。胎土は７ｂ類と同じである。

II群土器（第16・17図、図版14）

縄文時代中期後半の土器である。

１類（184～201）：沈線による縦位の楕円区画文の施される土器である。わずかに外反する口縁部は無文で、体部には縄文を付した後、おもに縦位に沈線で楕円形に区画し、磨り消しを行うものである。縄文にはＬＲ縄文、ＲＬ縄文の他に複節縄文が付されている。

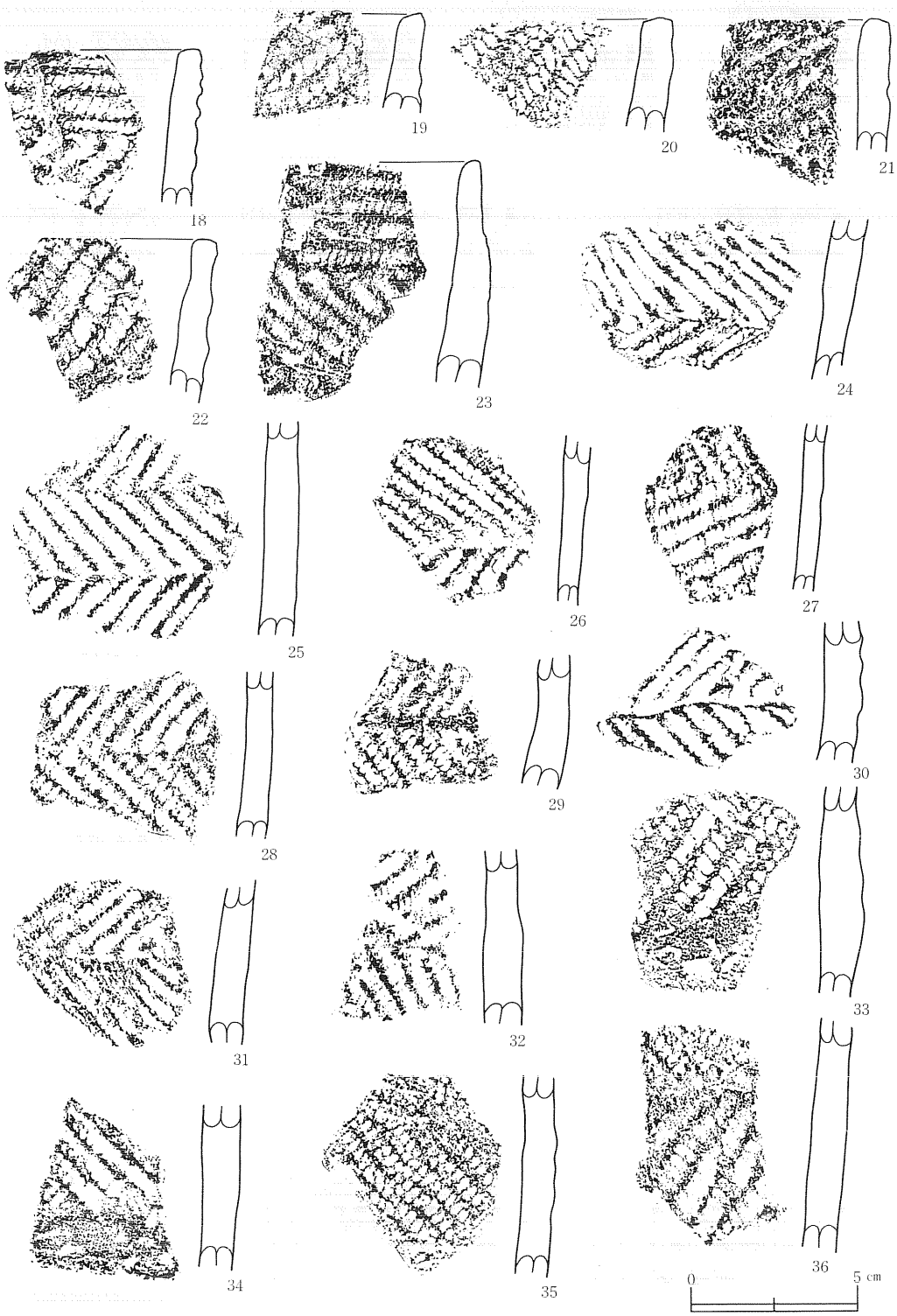
２類（202～211）：１類に伴う粗製深鉢形土器の破片である。胎土に砂粒を含むものの焼成の良好な土器である。体部の縄文はＲＬ縄文が多い。

３類（213・214）：２点であるが、器面に交差する幅３mmほどの竹状の圧痕のある土器である。胎土には粗い砂粒を含み器面はザラつくが、焼成は良好である。

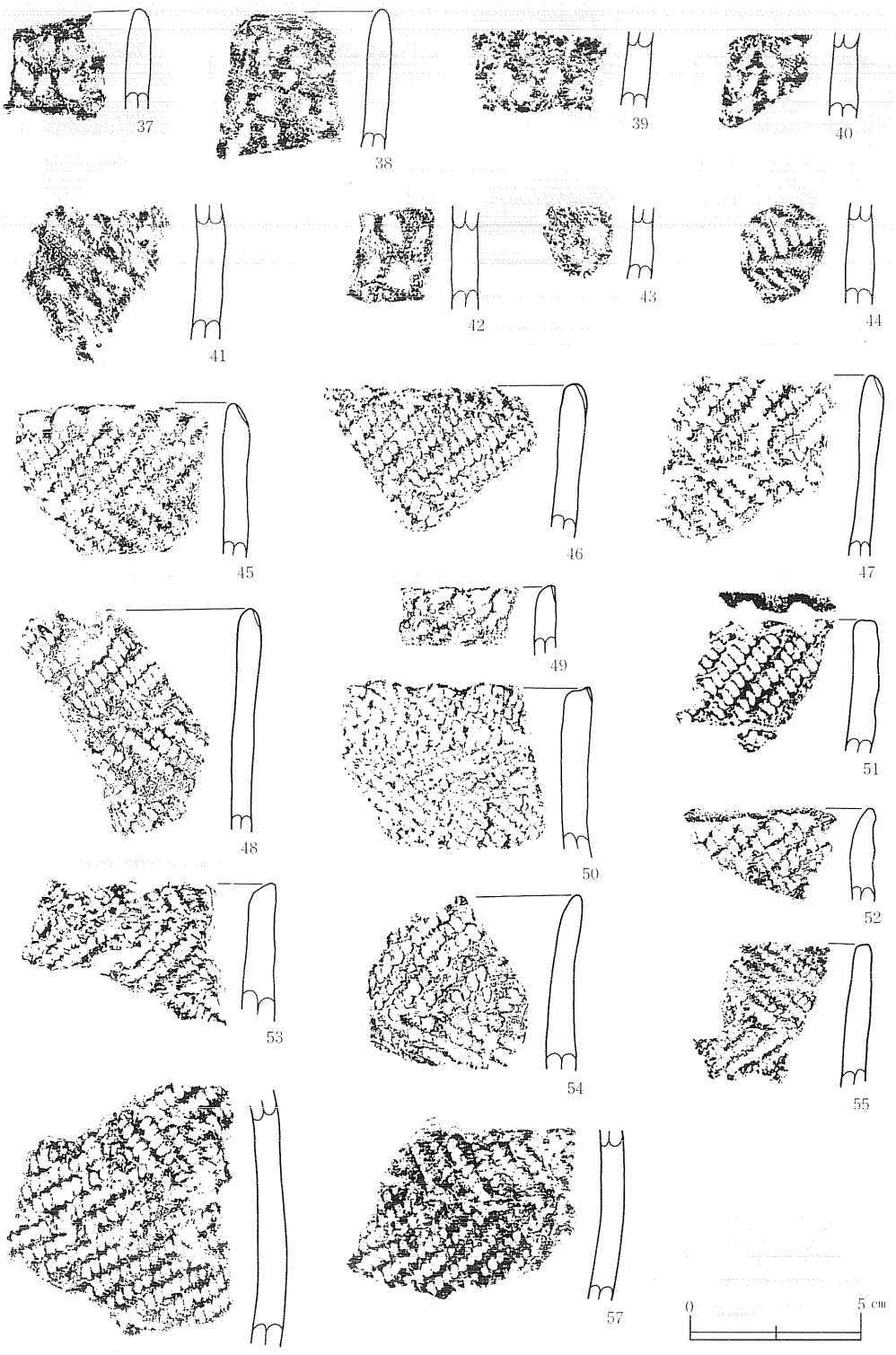
III群土器（第17図215～217、図版14）

弥生時代の土器である。３点だが、215は外反する口縁部で上端には縦の刻み列、その下に２条の平行沈線がめぐる。内面にはハケ目が施される。216ではＬ撚糸文、217ではＲ撚糸文が付される。３点とも胎土は緻密で焼成も良好である。

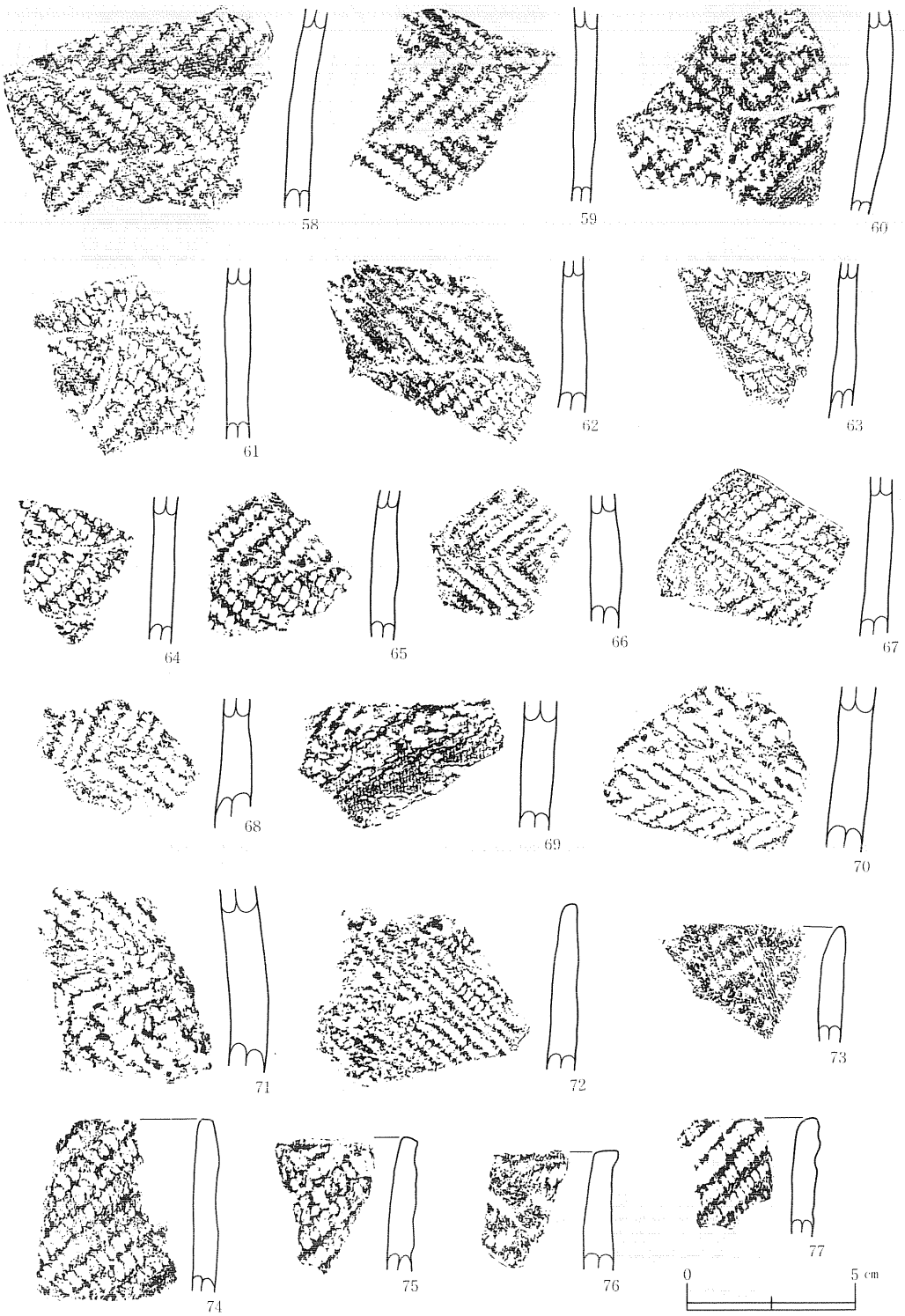
第5図　遺構外出土土器(1)



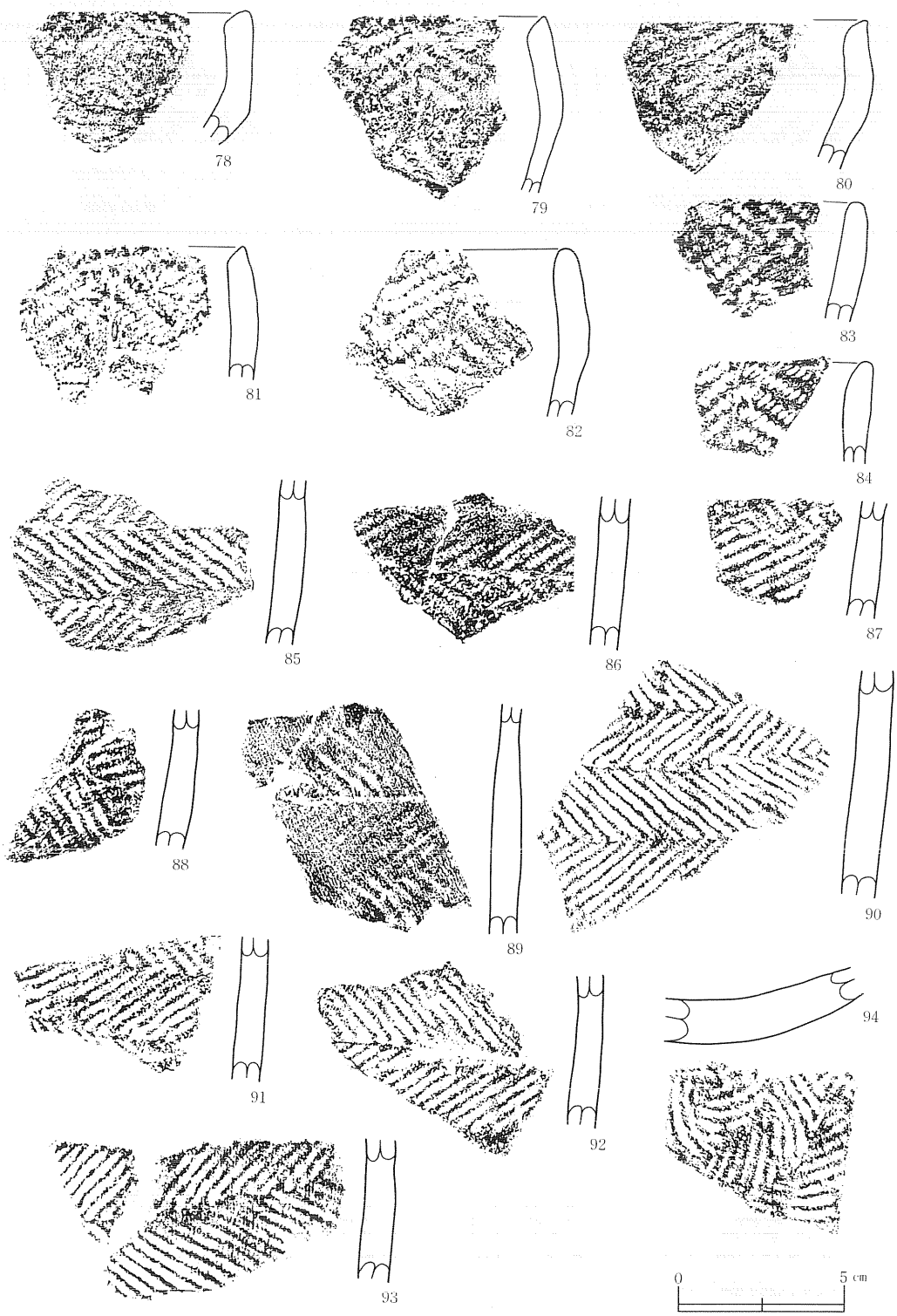
第6図　遺構外出土土器(2)



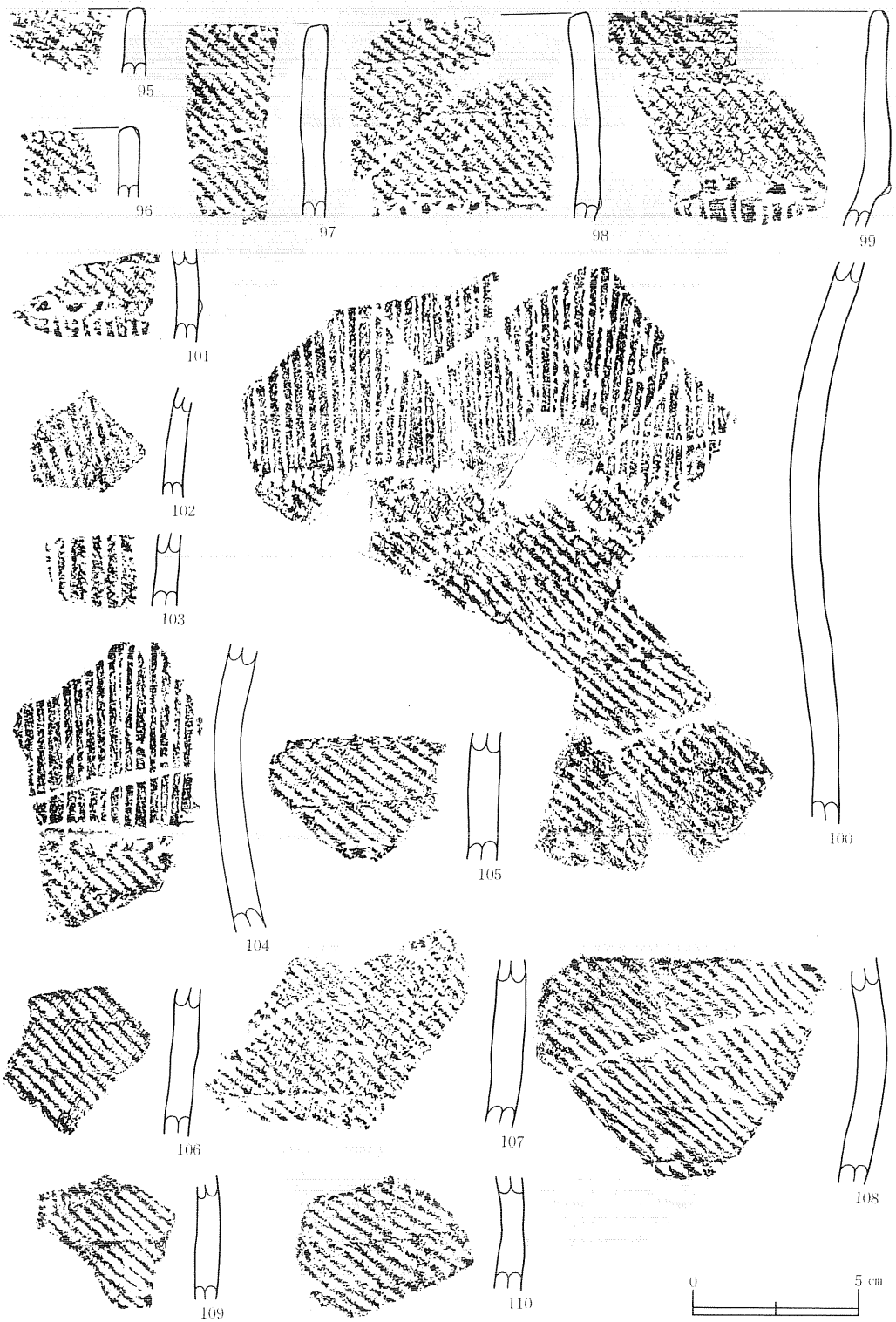
第７図　遺構外出土土器(3)



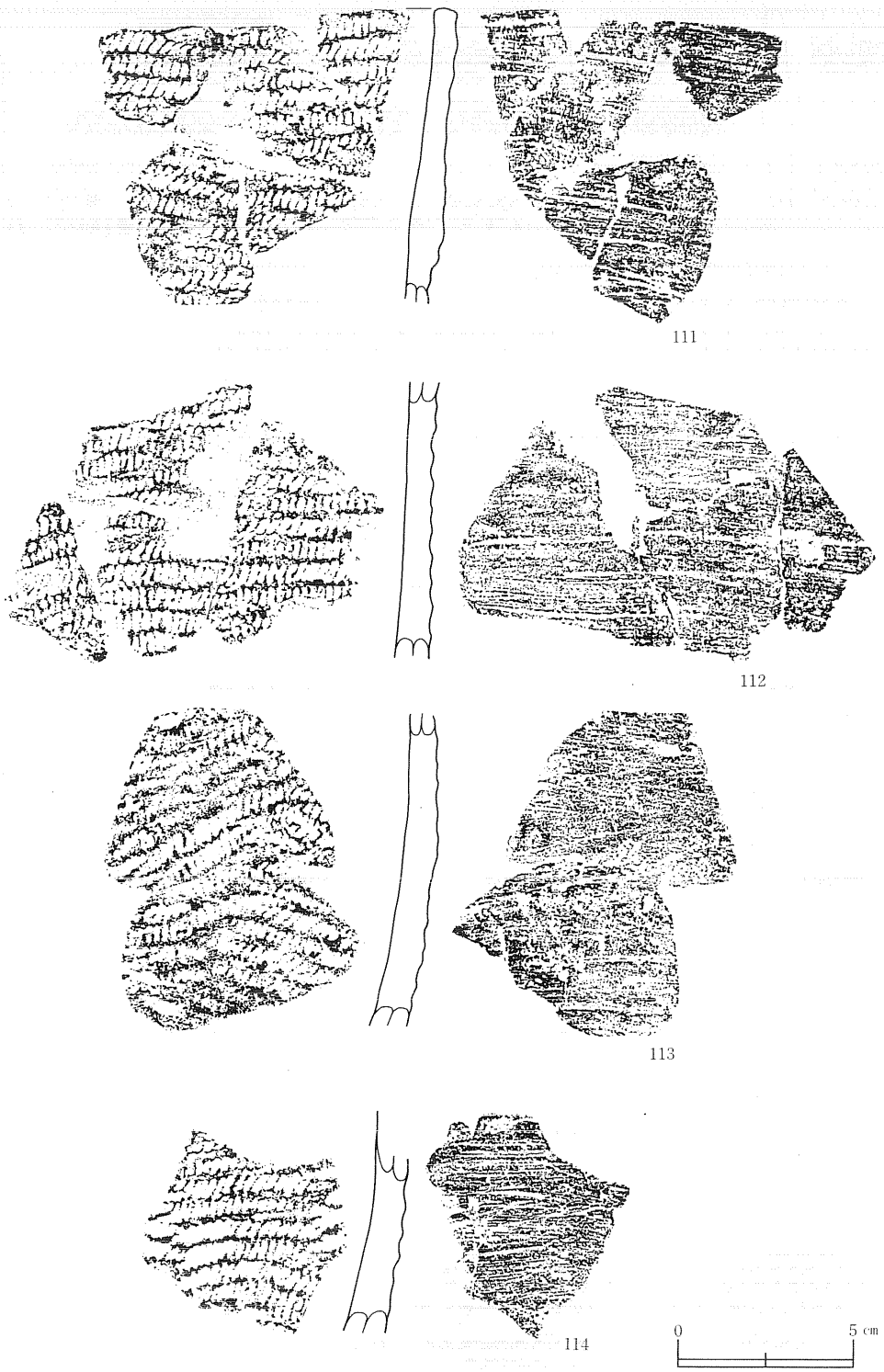
第８図　遺構外出土土器(4)



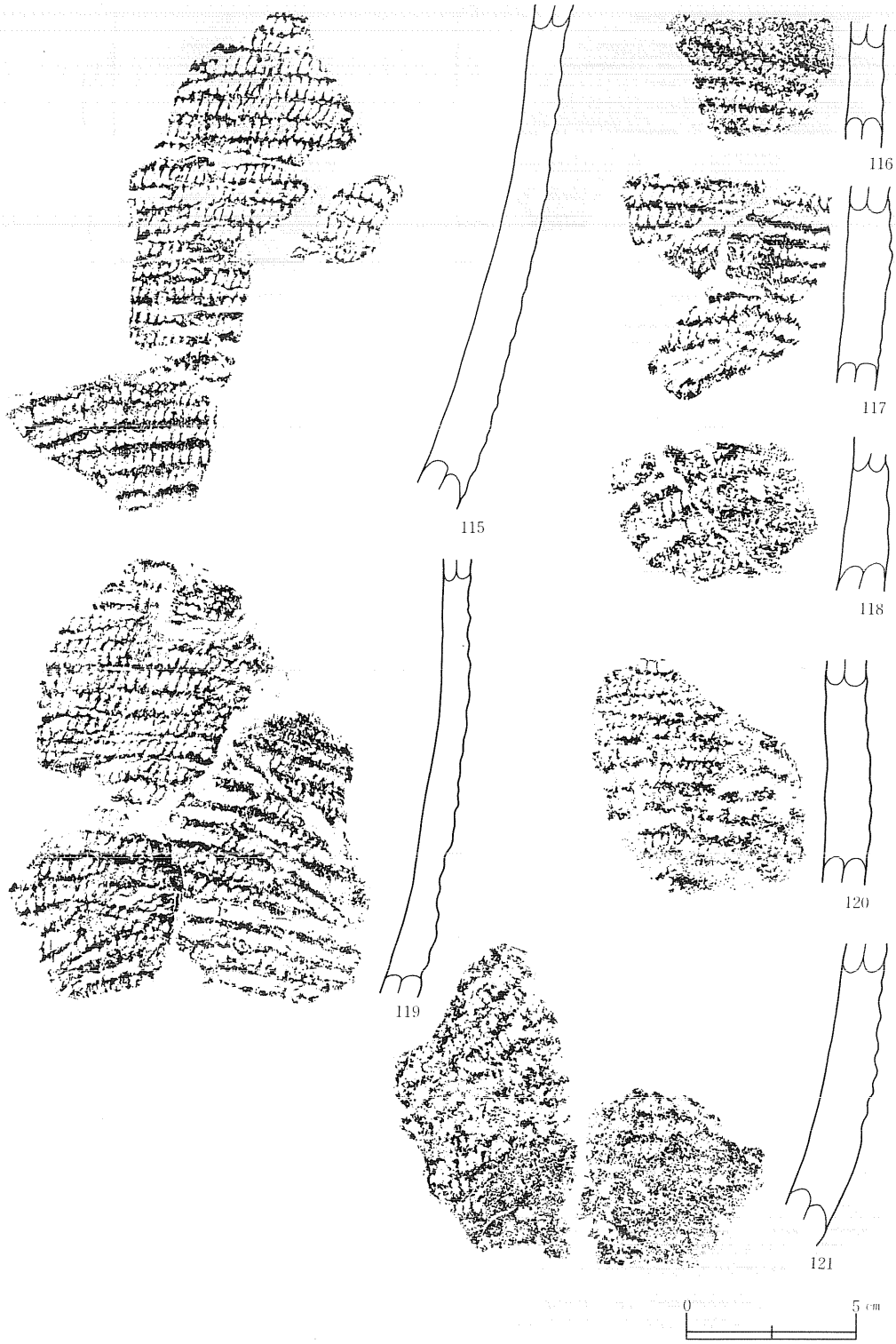
第9図　遺構外出土土器(5)



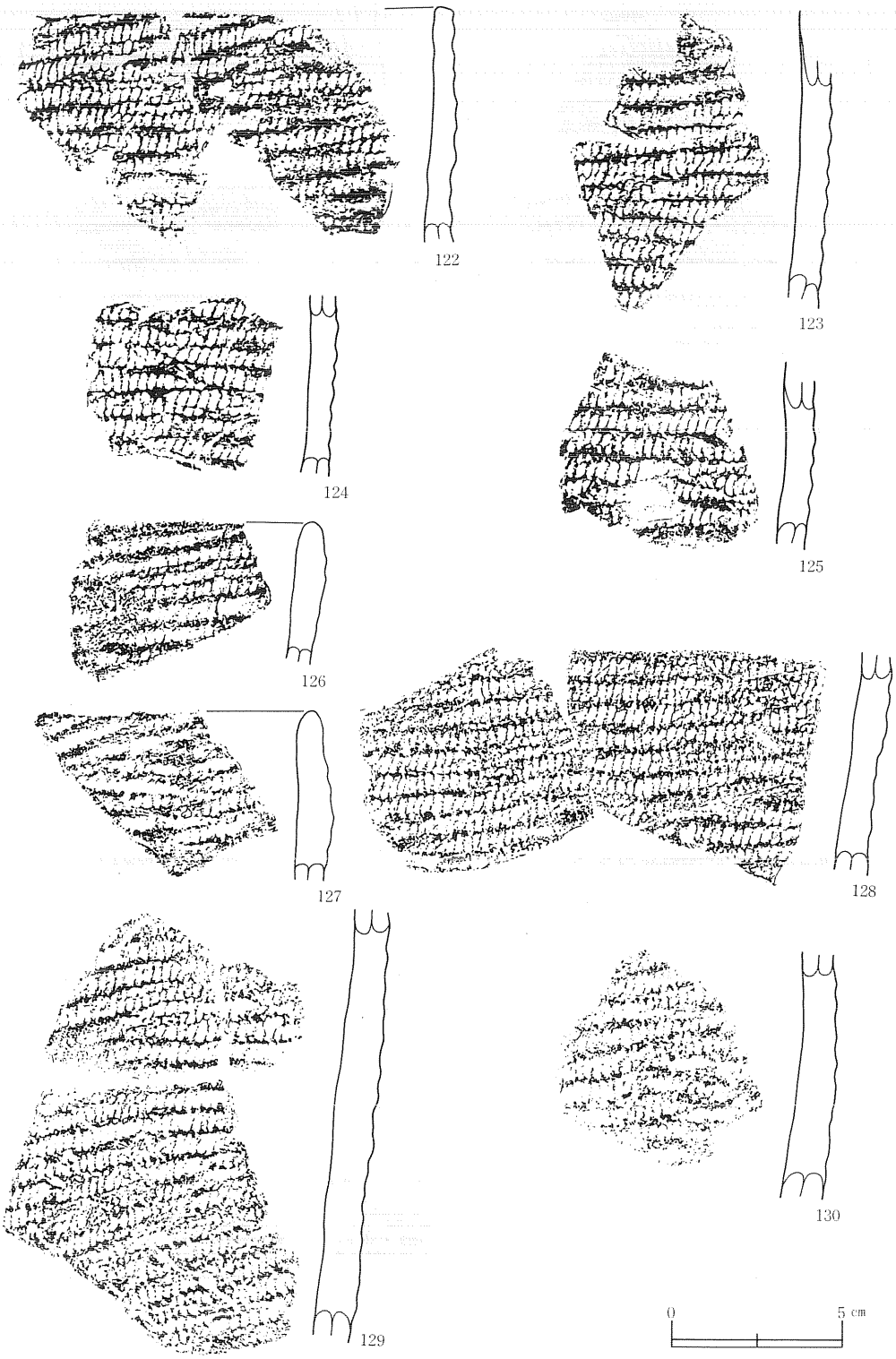
第10図　遺構外出土土器(6)



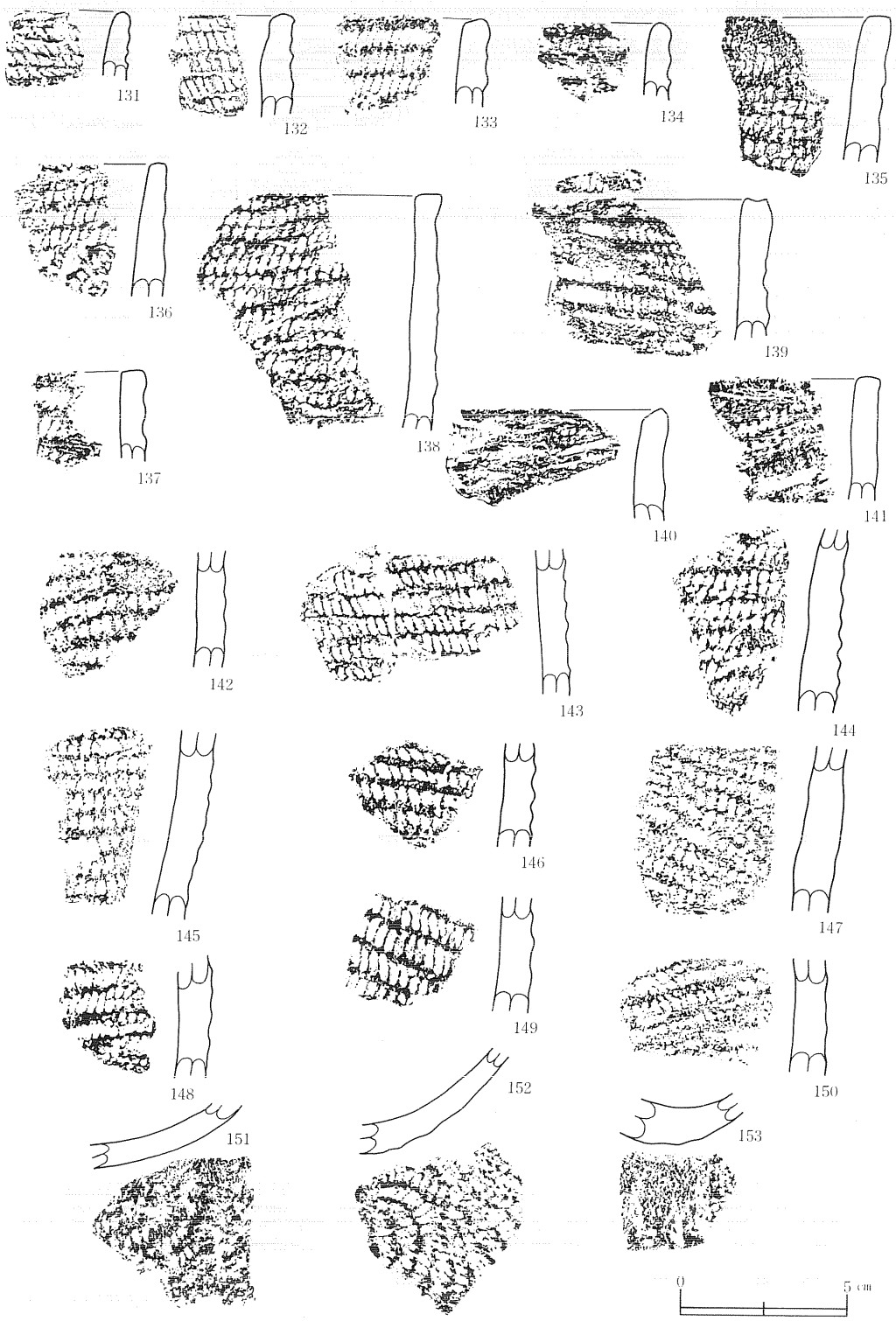
第11図　遺構外出土土器(7)



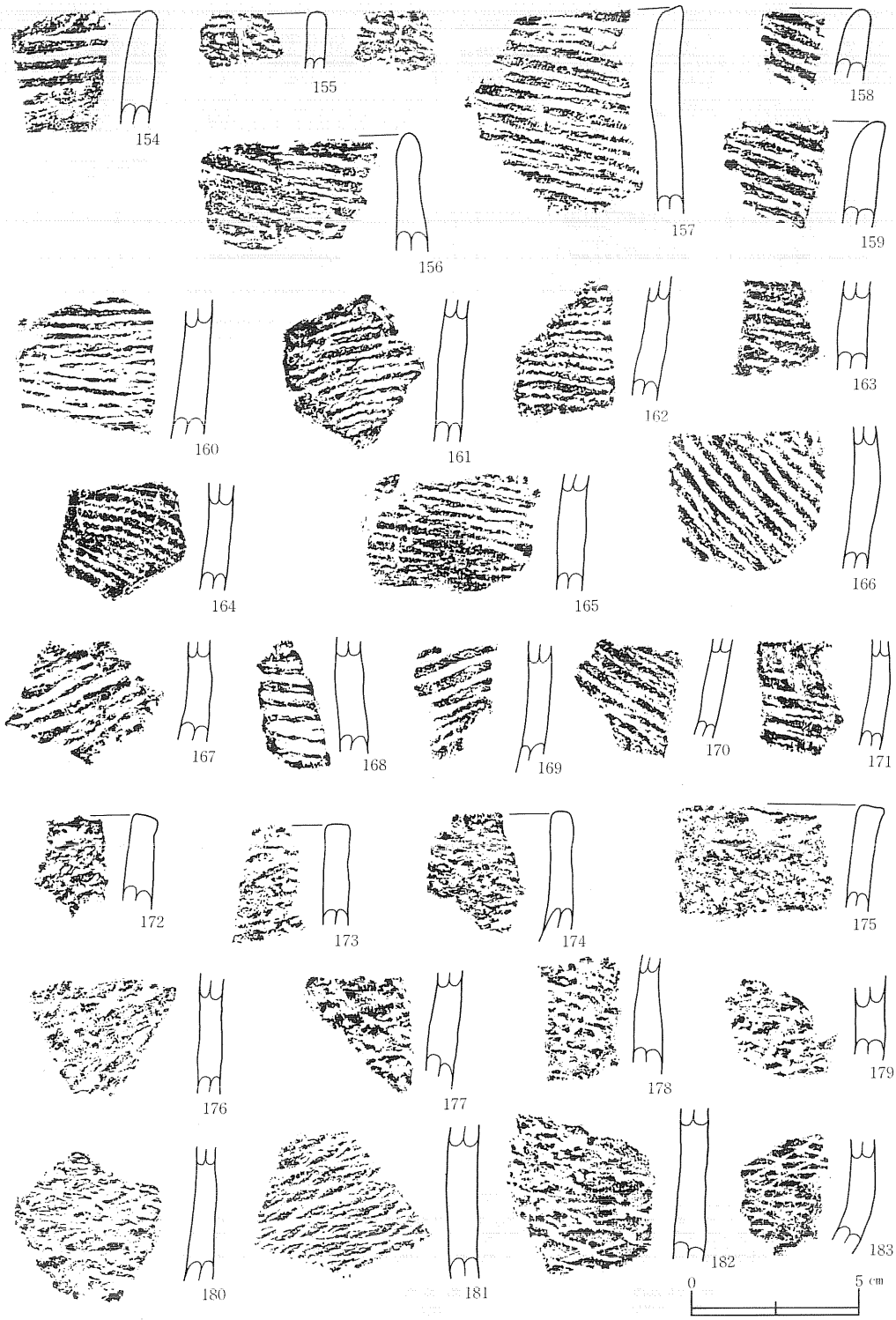
第12図　遺構外出土土器(8)



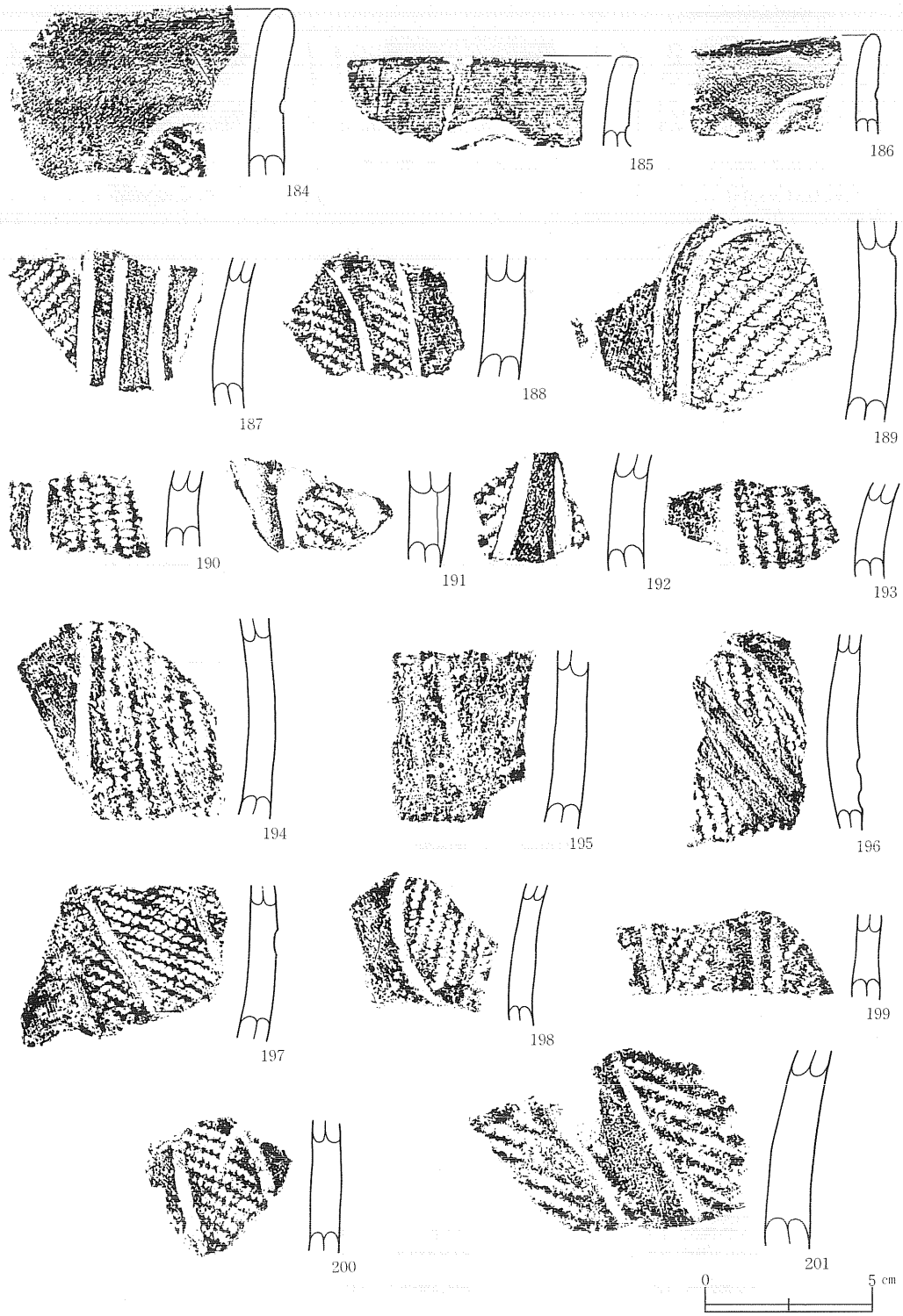
第13図　遺構外出土土器(9)



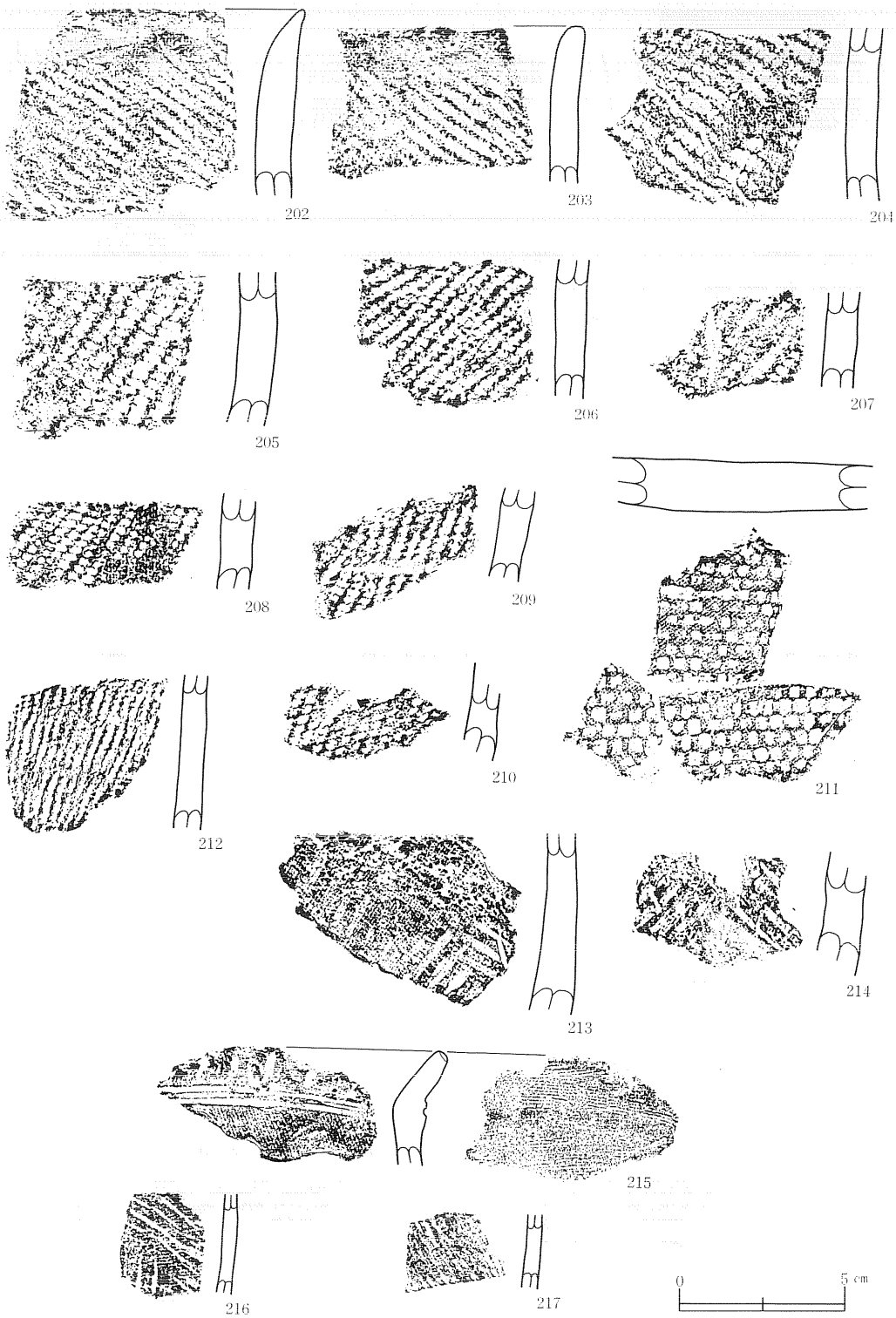
第14図　遺構外出土土器(10)



第15図　遺構外出土土器(11)



第16図　遺構外出土土器(12)



第17図　遺構外出土土器(13)

2．石器

遺構外から出土した石器には、剥片石器・石製品・礫石器などで、その他フレイク・チップがあり、このうち最も多いのはくぼみ石を中心とする礫石器である。出土地域、出土層位は土器のそれとほぼ同じである。

石鏃(第18図、図版15)

石材は、S7・S21が玉髄の他は全て頁岩である。またS6・S19・S20は火熱を受けており、S18は茎部にアスファルトが付着している。茎部の有無によって2分類した。

Ⅰ類

茎部の無いもので、基部の形態によって2細分できる。

Ⅰa類(S1～S11・S15)：基部が直線的な、いわゆる平基式の石鏃で、形状はいずれも二等辺三角形に近い。多くは両面とも丁寧な平坦剥離によって先行剥離面も残さないが、S3では主要剥離面、S6では節理面が広く残る。S7～S9は小型で、両面に広く先行剥離面を残し、側縁にのみ2次調整を行う。

Ⅰb類(S12～S14・S16・S17)：基部の湾曲する、いわゆる凸式の石鏃である。S12・S13のように基部がわずかに湾曲するものや、S14の如く湾曲が深く両脚のつくもの、S16・S17では基部の両端が角状に突出する。

Ⅱ類(S18～S21)

茎部の有るもので、断面が丸みのある菱形に近い。S18・S19は茎部の長さが全体の$^{1}/_{2}$を占める。S18・S19・S21は両面が2次調整されるが、S20では主要剥離面に2次調整は行われない。

尖頭器(第19図、図版15)

背面には2次調整が行われるが、主要剥離面は広く残される尖頭器である。

Ⅰ類(S22・S23)：木葉に似た形状で、S22・S23は背面に細かな2次調整を加え、主要剥離面には側縁にのみ調整が行われるが、S23では打面が除去される。

Ⅱ類(S24～S31)：基部を、剥片素材の打面を利用してつまみ状にしたもので、背面の2次調整はⅠ類ほど顕著ではなく先行剥離面が残され、S28・S30では主要剥離面には2次調整が行われない。S24～S26・S29・S30では折断面と2次調整された側縁とが鋭い先端部を作り出している。

石錐(第20図S32～S34、図版16)

S32は薄い剥片の一端に錐部を設けたもので背面の両側縁に調整が施される。S33・S34は断面が菱形に近い棒状の石錐で、特にS34の先端部は摩滅して丸みを帯びている。

石箆(第20・21図、図版16)

主要剝離面と背面の刃部方向からの剝離によって刃部が作出される石箆である。

Ⅰ類(S35～S38・S44):刃部が曲線的で、両側縁も曲線的なものである。S35・S38は横型剝片を、S36・S37・S44は縦長剝片を素材としている。背面には2次調整を行うが、S36を除いた他は主要剝離面の両側縁にのみ2次調整が施される。S36・S37の刃部は再生されている。

II類(S39～S43・S45):短冊型を呈し、刃部、両側縁とも直線的なものである。いずれも横型剝片を素材とし、2次調整はⅠ類と変わらないが、背面の調整はⅠ類よりも丁寧で、S40などでは顕著である。

石匙(第21・22図、図版16・17)

1点を除いて全て縦型の石匙で、石材は頁岩である。

Ⅰ類

縦型の石匙を本類とする。

Ⅰa類(S46～S59):背面と主要剝離面の一側縁に2次調整を行うものである。S46・S47・S54・S55・S58・S59では主要剝離面の一側縁全体に細かな2次調整が行われるが、S49などの調整の幅は短く、部分的である。つまみ部は素材剝片の打面側に設けられるが、S52・S54では打面とは反対側に作出される。

Ⅰb類(S60):主要剝離面の両側縁に2次調整の施されるもので、S60は薄い素材剝片の背面に丁寧な剝離を行い、主要剝離面の両側縁全体に細かな調整が連続して施される。

II類(S61):横型の石匙でS61の1点だけである。背面の2次調整も側縁部は細かいが他は先行剝離面を広く残し、主要剝離面への調整は行われない。

掻器(第23図S62～S64、図版17)

縦長剝片の一端に刃部を設けるものである。S62では背面の一端に小さい刃部を作出するもので、S64では主要剝離面に刃部作出の調整が施される。S63は背面に平坦剝離を行い、主要剝離面の一側縁にも2次調整が行われる。S64の石材は黒曜石である。

削器(第24・25図S65～S75、図版17・18)

素材剝片の形状を変えることなく、剝片の側縁あるいは一端に刃部を設けるものである。S65～S68は縦長剝片の側縁に刃部を設けるもので、S69・S71では打面に対する一側縁に刃部が作出される。S70・S72では両側縁に刃部が設けられる。

断面調整石器(第25図S76～S78、図版18)

折断面に細かな調整を施す石器で、S76では背面の両側縁にのみ2次調整を施し、先行剝離面を広く残す。S77では背面全面と主要剝離面の一側縁に調整を行い、またS78では両面の両

側縁にのみ2次調整が施される。

石核(第25図S79～S81、図版18)

3点のうちS80が黒曜石で、他かの2点は頁岩である。S79は両端から剝片を剝取するもので、S80では礫皮面を残したままの石核で、剝取される剝片は長さ、幅とも1cm前後のものである。S81は3方向から剝片が剝取された残核である。

打製石斧(第26図S82～S84、図版18)

3点とも両面に2次調整を施すが、節理面や礫皮面を広く残し、断面も厚いものである。

磨製石斧(第26図S85、図版18)

凝灰岩を石材とする小型の磨製石斧で、刃部はやや曲線的である。基部が折損している。

くぼみ石(第27～32図、図版19～22)

出土石器のうち最も数量が多い。凹部のある面の数によって3分類する。

Ⅰ類(S88～S91)：凹部が単面にのみあるものである。

S88・S90S・91では凹部が1ないし2箇所であるが、S89では礫の長軸に沿って浅く連続する。S91の凹部のある面は磨られている。

Ⅱ類(S92～S116)：凹部が2面にあるもので、凹石の中で最も多い類である。

用いられる転石の平面形には円形・楕円形・方形・長方形ものがあり、凹部は広い表裏面にある。凹部が一面に1箇所のものや、一面に数箇所あり連続するものがあるが、後者の場合は楕円形や長方形の礫に多い。S114・S115では凹部のある両面が、S116では片面が磨られる。

Ⅲ類(S117～S119)：凹部が3面以上にあるものである。

S117・S118は長方形の転石の表裏面と片側面に凹部があり、S119では立方体の6面に深い凹部がある。

磨石(第32図S120、図版22)

S120は断面三角柱状の花崗岩の3面が磨られている。

石皿(第33図S121～S124)

S121・S122・S124は安山岩、S123は凝灰岩を利用したもので、中央部は加熱によって黒斑している。

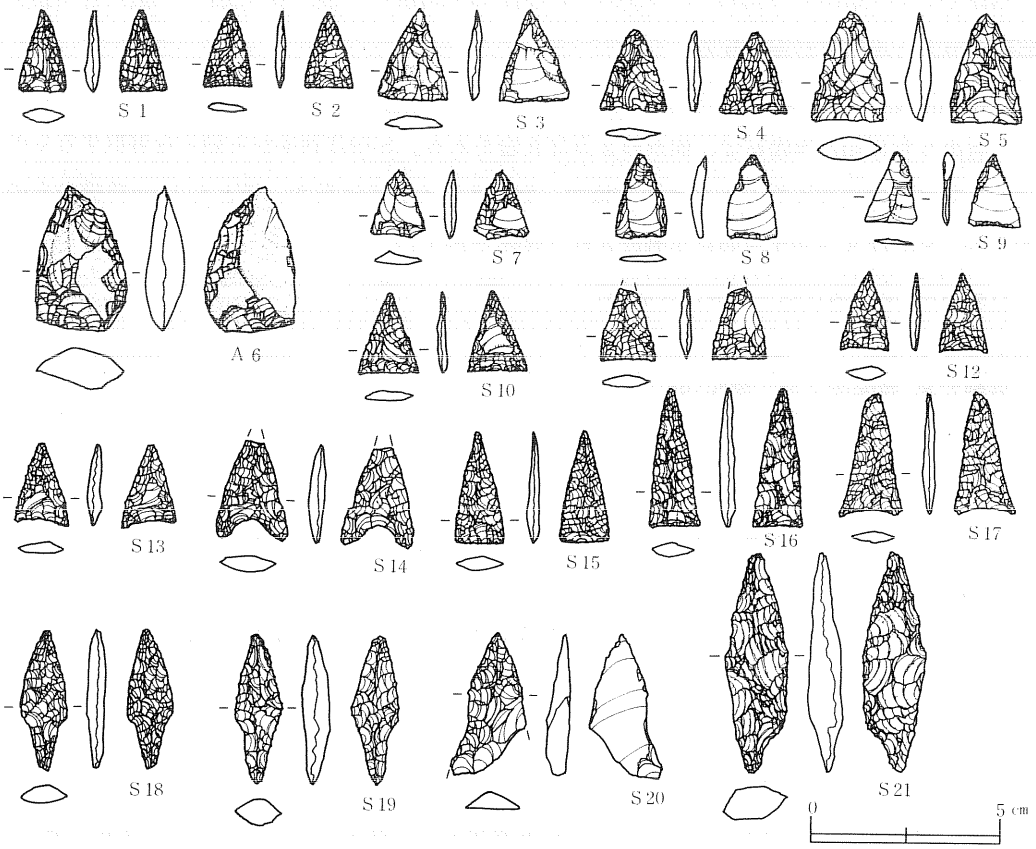
砥石(第33図S125・S126)

2点とも凝灰岩で、方形に近い片面に数条の溝が走るものである。S126は溝のある面が磨られている。

3．石製品(第26図、図版18)

抉状耳飾(S86)：半分を欠損するが、凝灰岩を厚さ6mmまで磨き出したものである。

棒状石製品(S87)：滑石を棒状に磨いたもので、一端は丸く突出している。



番号	出土地区	層位	器種－分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	図版
S 1	MK 84		石鏃 ── Ⅰa	22	13	4	1	頁岩	15
2	MJ 92		〃	20	12	3	1	〃	〃
3	MK 84		〃	24	18	4	1	〃	〃
4	MJ 87	Ⅲ	〃	22	18	4	1	〃	〃
5			〃	29	19	8	3	〃	〃
6	MD 76	Ⅱ	〃	38	25	11	8	〃	〃
7	MC 76	Ⅱ	〃	18	14	3	1	〃	〃
8	MI 84		〃	22	14	5	1	〃	〃
9	MI 91		〃	19	14	3	1	〃	〃
10	MK 86	Ⅱ	〃	22	16	3	1	〃	〃
11	MK 92		〃	19	14	4	1	〃	〃
12	MT 91		〃 ── Ⅰb	21	13	3	1	〃	〃
13	MJ 88		〃	22	14	4	1	〃	〃
14	ML 86		〃	26	19	5	2	〃	〃
15	MF 74		〃 ── Ⅰa	30	13	4	1	〃	〃
16	MD 76	Ⅱ	〃 ── Ⅰb	13	13	4	2	〃	〃
17	MI 91		〃	32	17	4	1	〃	〃
18	MK 89	Ⅳ	〃 ── Ⅱ	37	12	6	2	〃	〃
19	MB 49	Ⅱ	〃	39	13	8	3	〃	〃
20	MF 79	Ⅰ	〃	38	20	7	3	〃	〃
21	MH 84		〃	58	17	10	7	〃	〃

第18図　遺構外出土石器(1)